一〇月五日

起床七時、出発一〇時三〇分、キボハット着十六時一〇分。

朝まだ小雨が降っていた。アメリカ人達はすでに出発していた。昨日より我隊に同行するようになったマックスの足にまめが出来て、その治療のために出発が遅れた。幸いその頃に霧雨になって回復にむかう兆しがする。最後の水場で水を補給、青空が見え出す。頭上に五〇六〇米のマウエンジのピークがせまってくる。まるで岩山と言った感じ、ユーゴスラビアの山岳会の人々約二五人がこの山に挑戦しているとのことである。マウエンジのコースを右に見ながら、我々のコースであるキボハットは左前方に見えてくる。我々の前に草木一つない平原が広がり、その真中に登山道が一本ほとんど直線的にキボハットに達している。マックスが「この平原はテキサスのアリゾナ砂漠だ」と言った。心地よい風が平原を歩く我々を暑さから開放してくれる。

平原の真中あたりに座りこんだ我々は、コーヒーを沸して昼食にする。紺碧の空に白い雪がゆっくりと流れるのどかな風景である。

アメリカ人達のポーターが下山してくるのと出合う。キボハットは四棟あり、寒々した感じがした。小舎の中でしばらくいると寒くなり、セーターを着る。入口を閉めると小舎の中が真暗になって何も出来なく懐中電燈がないと非常に不便である。夕食後は全員早く寝た。

一〇月六日

起床午前一時三〇分—出発二時三〇分—ギルマンスポイント六時〜六時三〇分—ウルフポイント八時一〇〜五〇分（山頂）

キボハット一一時一五分〜一二時三〇分—ホロンボハット一五時五五分—マンダラハット二一時四五分。

満天の星の下我ら五人は小舎の背後にある登山道をたどる。

皆まだ目覚めないのか静かな行進を続ける。コースは電光形に高度をどんどん稼いでくれる。振返えると眼下のアフリカ大陸は暗やみの中に夜明け前の静寂がただよっている。一瞬ここがほんとうにアフリカなのかと疑いが頭をかすめる。思えばヨーロッパのアルプス、ピレネー、ネパールの山麓を歩き、今アフリカの山を歩いている。次はアンデスの山を歩きたいと思った。

周囲が明るくなり、頭上にギルマンズポイント、すなわちキリマンジャロの台形状になった中央部が見えた。そのギルマンズポイントに立つと周囲が赤く染まり日の出の到来を迎える。お互に握手してその喜びに浸る。

ギルマンズポイントの右手には北部氷原が広がっている。

コースを左にとってウールピークに立つ。素晴しい景色にただ無言の時間を過す。体のぬくもりと感動の気持が寒さを忘れさせてくれる。全コースとも全くアイゼンを使用する所がなく、日本の三千米級の夏山とほぼ同じくらいの気温であると思えばよい。

帰路は矢のごとく全員快適にキボハットに下り、ゆっくりと朝食と昼食の二食分をとり、その勢いで暗い中をマンドラハットにまで下山することが出来た。今日は実に二〇時間も行動したことになる。私は今だかつて山登りに連続して二〇時間も行動したことがないのに……。これも五人が一体となって行動した結果だと思う。

一〇月七日

マンドラハット発一〇時五〇分—マラング着一五時—モシ着一六時三〇分—ＹＭＣＡ（泊）

昨日二〇時間も行動したため、太陽が小舎にさしこんでもだれも起きるものがいない。全員死んだように深い眠りにいたようだ。

今日中にモシへ下らないと困るので四人を起しにかかる。朝起きて飲む温たかなコーヒーがとてもおいしい。これで私の二年に近い山旅が無事にそして目的も果し終えた充実感に、飲むコーヒーの味は最高であった。

キリマンジャロの登山を終えた私はまた一人でダル・エス・サラアム＝バガモヨ＝ザンジバル＝ムワンザ（ビクトリア湖）＝キスムと旅を続けてナイロビに一〇月二〇日再度戻ってきた。一〇月三〇日にナイロビを出発するまでユースホステルで過す。

一〇月三〇日の夜行列車に乗り、翌日の朝、モンバサニ着く。ボンベイ行きの船が一一月一二日頃に入港するとのこと。その間モンバサの北にあるカナヌイという小さな部落に住んでいる日本人の海外協力隊員の家で過したり、さらに北にあるマリンデイという町へ行って過す。

一一月一〇日モンバサに戻り、一一月一四日出航の本船「カランジャ」号の三等切符を八三ドルで買う。インド洋を北上一一月二一日にカラチに着き、二四日の朝ボンベイに入港、一〇日間の船旅にも色々ありました。一一月三〇日カルカッタに再度戻ってきた私はいよいよ帰国への思いにふける。カルカッタより飛行機でラングーン＝バンコック＝ホンコン＝台湾を経て大阪空港に一二月二四日に着いた。こうした二年間に及ぶ山旅は私の心にいつまでも生き続けていることに幸せを感じている。

中南西アジア踏査登山隊の頃の思い出

――一九七一年四～八月の踏査のころ――

立岡　佐智央

早いものでもう十九年の歳月が流れたのですね。あの旅行から…。若い登山者**a君**：登山活動しながらシルクロードを車でパリまで走破した、という旅ですね。今日は少し詳しくそのお話をしてもらえませんか――。

立岡（以下**T**と略す）：一九七一年（昭和四十六年）四月のことです、イギリスのチンコア号という八千トンばかりの貨客船で神戸港

を出発したのは。隊の名称は、中南西アジア踏査登山隊といいましてね。谷口忠男さん（当時28才）、岡春海さん（同27才）、立岡佐智央（同20才）といったメンバーで、カメラマンの小山保さん（同42才）が同行しました。とにかく、今から思えばハードな旅でしてね。命からがら、というような場面が、おおげさでなく幾度かありました。

a君：一般の遠征登山とは少し違うようですね。

T：ええ、たしかに。発想の時点で「旅」という感覚が四人に共通してありました。中近東世界からヨーロッパへ、シルクロードという歴史と文化の道を自分たちで辿ってみたい、なんてとてつもなくロマンチックな発想です。とうとう「山の彼方」をめざして三万キロ余走りました。ですから、あのピークを狙って、というスタイルではありませんでした。イランで二カ所、トルコ、スイスの計四カ所で登山活動を展開しましたが、山登りと冒険的要素の強い旅を組み合せたものでした。

a君：自動車はどうされたのですか。

T：日本で中古車を手に入れましてね。少し手を加えて同じ船に積み込んで行きました。

a君：それは今流行の4WDの……

T：とんでもありません、今でいう4WDのオフロードタイプなんていうのとはぜんぜん違うのですよ、これが。

マツダのルーチェ・バン一六〇〇ccというやつで、それも中古車。タイヤなんかも少し厚めですが普通タイプ、これはラジアルだと礫質の道では横腹を傷つけてバースト（破裂）する危険があると教えられていたもので。フロントは強化ガラス。前車のはね上げた小石でよくフロントを破るのですね。これは替えてよかったです。走り出してすぐ小石にあたりましたが、ヒビだけですみましたから。あとはルーフキャリア、ストンガード、板バネ増、ラジエーター・ファンの羽根を6枚にしたり、旅先でガソリンのオクタン価が変りますから、そのへんを少しいじりました。そしてボンネットとボディに日の丸をでっかくかいて走ったわけです。折りしも当時、印パ紛争の険しくなり出した時期で、機銃掃射ぐらいあるかもしれないぞ、って脅されてまして、実際にはそこまではいきませんでしたが国境付近では緊張させられました。日本大使館あたりからまでがピストルを持っていった方が……なんて云われましたが、全員一致でひたすら平和主義で通しました。

a君：具体的な行動の概要は……

T：西パキスタンのカラチに上陸しまして、そこから陸路、熱砂と悪路の旅が始まったわけです。西パキスタン／カラチ→ラホール→カイバー峠→アフガニスタン／カブール→バーミアン渓谷→ヘラート→イラン／テヘラン→デマベント登山（五六七二米）→アラム・クー登山（四八四〇米）→イスファハーン→ペルセポリス→トルコ／ユクセコバ・ジロ・サト山群踏査登山→アンカラ→イスタンブール→ギリシャ／アテネ→ユーゴスラビア→イタリア→スイス／ヨーロッパ・アルプス・ミディ南壁登攀→フランス／パリ。パリで廃車し九月解散、帰国。立岡のみデンマーク滞在、十二月帰国。

a君：メンバーについて

T：谷口氏はグラフィック・デザイナー。岡氏は建築家。小山氏はカ

ラマン。私はその頃車の整備をしてましたが、帰ったら何しようかなあ、ってかんじでずいぶん珍道中でしたね。岡氏なんかはずっと「下駄」で通さないと気のすまない人でして、ペルセポリスの丘もカランコロン、アテネのアクロポリスも同じく、むろんパリの街中もゲタばきでした。明石城の石垣をゲタはいて登ったという伝説めいた話が彼にはありました。登山の時だけはちゃんと登山靴はいてましたが。

a君：登山活動について……

T：イランのデマベント山はイラン富士とも呼ばれ、秀麗なコニーデ型の山、四〇〇〇米を越すと頭痛、はき気など高山病に悩まされましたが現地のガイドと共にたんたんと登りました。広大なすそ野のお花畑は印象的でした。やはりまだ人のあまり入ってない山域（トルコ／ジロサト山群）では苦労も多かったのですが面白かったですね。記録をつくりながら行くのですから。同山域はイラン・イラクの国境とも隣接していましたのでトルコ軍部の干渉はありました。ヨーロッパアルプスでは、当初グランド・ジュラス北壁なんかも狙っていたのですが、なかなか。実際はミディ南壁をこなしてやっとでした。

a君：多くの国を通過してゆくのに言葉の問題はどうでしたか。

T：事務的レベルでは英語圏が多かったわけですが、谷口氏がけっこう達者でして、その点助かりました。あとメンバーで分担して出来るだけ原地語を勉強しました。やはりカタコトの単語をならべても〝友好〟の早道ですから。私なんかもトルコ語の係になりまして、最初に覚えたのが「お水下さい」でね、その次が「ちょっと待って下さい」。それはいったい何だと云いますと、最初に云った言葉はたいがい通じないので、すかさず辞書をパラパラと出すわけです。だから、ちょっと待って下さい、とね（笑）。山岳民族であるトルコのクルド族なんかともけっこう仲よくやってましたね。しかし、いざとなって不思議とどこでもよく通じるのがカンサイ弁（？）だったりしましてね。まあ、それが私たちの語学力の限界であり、切り札でもありましたが（笑）。

a君：旅行中の健康面は……

T：健康面についていえば、かなり過酷を強いられる旅でしたね。

特に水が悪いこと。生では絶対に飲めない。そして酷暑、こういうところで生活している人も居るんだ、とずいぶん感心もしましたが、車のボンネットの上でタマゴ焼が出来るというのが冗談ではないし、ビフテキぐらい焼けたでしょう。実際、熱風にさらされるとヤケドしますので車の窓はほとんどしめ切って走ってました。その方がずっと涼しいんです。もちろんクーラー無しです。持参した温度計は五五℃を突破して壊れてしまいました。砂漠の民が頭にターバンだとか、かなり厚着しているのは、防暑、防熱のためで体温の方が低いのですから頷けます。汚い話ですが、たえず誰かが下痢してまして、急停車してポンプ片手にヤブの中に駆け込むなんてことはざらでした。かけこむヤブの無い時は、そりゃもう悲惨なものです。内から外から脱水状態になりなかなかつらい経験でした。

ヨーロッパに入りまして、谷口氏が健康をそこない、現地での入院、帰国という事態になりました。他のメンバーもちょっとスリムになったっていう感じでしたが、私なんかはかなり栄養失調気味で

帰国しました。

a君：旅行中の危険といえばどういうことがありましたか。

T：やはり、車での二度の事故は大きなアクシデントでした。ケガ人がでなかったのが不幸中の幸い、車はボロボロになりましたが、またなんとか治して走りました。現地の運転ルール、慣例などの違いも事故の原因だったと思います。それとドライバーの過労。

a君：オート・キャンプはしましたか。

T：テント類はもちろん持参してましたが中近東ではめったにしませんでした。ホテルの宿泊料金が安いことと、野外での危険もたえずあったからです。イランの半砂漠地帯で野宿をよぎなくされた時は、サソリの危険がありましたので、二人は車の中、あと二人はルーフキャリアの上で寝ましたね。満天の星が非常に強い印象でした。当時、旅行中に行方不明になるという話はよくありました。馬族に出会うと、ヤットコで金歯まで引き抜かれると脅されましたが、私たちは出会いませんでした。ヨーロッパに入ってからは、もっぱらオートキャンプ場のお世話になることが多かったんです。なによりも経済的な理由からです。

a君：車を使ってどういった利点がありましたか。またマイナーな点は。

T：中近東での交通機関はほとんどが路線長距離バス。好きなところに行けるわけではありません。大きな資材、装備類（総計四〇〇kg）かかえてうろうろできませんから、機動力という面ではバツグンでした。マイナー面は走行中の危険度があんがい高いことです。道路事情や種々の悪条件が重なります。もうひとつは、持ち出された車は一時輸出扱い＝カルネの手続きと保証金が必要で、原則として持って帰らねばなりません。その手続きや運送費は決してバカになりません。結果的には私たちはバリで廃車処分にしましたが。

a君：車での砂漠横断は……

T：アフガニスタンのカブールからヘラートまで八〇〇km、南にはアジアハイウェイが通じているのですが、あえてバーミアンを経てソ連国境付近まで北上し、北部砂漠地帯を突破したのです。私たちはかなり甘く見てましてね。たちまち車は砂の中に埋没するわ、水はなくなるわでたいへんでした。最悪部では手のつけようもなく、ソ連からのダイナマイト運搬車に引きづってもらいましたが。ええ文字通り砂の中を引きづって行きました。フランスから来たという連中は四メートルぐらいの金属プレートを二枚持ってきて、それを敷きながら進んでましたね。

a君：シルクロードでは他にも車などを利用した旅行者はいましたか。

T：それが実に面白いことに行きしの船で、同じシルクロードをバイクで走ろうという名古屋の青年と、もうひとりは自転車でやろうという日本人青年が同船していたんですよ。当時、やはり車やバイクなどで各国に出かけてゆく青年たちがぼつぼつ出はじめていたのですね。それでカラチに上陸しまして、ヨーイドンかというと、車の上陸手続がずいぶん遅れまして、一番最後になりました。

バイクの青年は、走りに走って、後で聞いたところによりますと、四十数日ぐらいでヨーロッパまで抜けています。私たちは一週間程して、やっと出発しまして、次の街ハイデラバードに着きます

と、例の自転車君がいるのですね。とにかく暑くて走れない、というのです。それで現地の人々とけっこう仲よしになっちゃってズルズルいるんだということでした。それからどうなったかとうとうわからないんですけど。カラチから二〇〇km程のところです。空手何段かで強健な人でしたが。

a君：日本とはずいぶん文化・風土とも違いのある地域ですが旅の印象としては……

T：バザールの喧騒と熱気、強烈な生命感、そして自然と共に生きる遊牧民の生活などに接して、非常に大きな驚きでした。

日本の、そのまたごく一部の世界しか知らない二十歳の青年にとってそれはたしかにたいへんなカルチャー・ショックでしたね。ええ、まさに青春の原点です。

中近東世界を抜けて、ヨーロッパに入りまして、道路はもちろん、治安もなにもかも良くなるのですが、人間の様子見てましたら、なにかヨーロッパ文化自体の斜陽を感ぜずにはいられませんでした。生命感むきだしの世界を通過してきたから余計なのですね。

コペンハーゲンではヒッピー宿にころがり込んで、ハッシシの仲間に入ったりしてましたが、自分でも不健康だなって思いました。

a君：山、旅、冒険そしてその後は……

T：帰国後、山登りはその後も続けていましたが、冒険という点ではかなり考え方が変ってきたようですね。私の場合、山と生活をなんとかいっしょにさせたいという気持ちが強くって、仕事（絵画）の面もあったのですが、六甲山、住吉谷の一〇〇年前の水車小屋にアトリエをかねて住みつくことになりました。

山の中に住んでいると、あえて山に登りたい、と思わなくなるのですね。未開な地域に入ってみたいとか、あるいは過酷な条件下の旅をしてみたいとかいう冒険心は変化しました。

いったいどう変ったかといいますとね、一九八六年に犬を連れ夫婦で東海道を徒歩旅行して約七〇〇km近くを歩きました。これは小崎先輩（小崎無一禅師、行脚で神戸―埼玉間二度行っておられます）の感化も多いにありましたが、「これが現代の冒険なんだ」という気概はありました。必ずしも対自然じゃないんです。大げさに言えば、人間の視点を自分の足元からつかみたかったわけ。そこに冒険的な意味を見ていました。やはり旅と生活をいっしょにしたかったようです。

山の水を引いてきて、マキ割りして、畑つくってそんな生活を続けていますと、東京まで犬をつれて歩いて行ったって面白いじゃないか、という考えになってきたようです。エッ、次に何かって？家内も同行の犬君ももうこりごり、と云ってます。はァ、実は。冒険のかたちはすっかり変ってきましたね、まったく。だって今、仕事の上でも生活面でも取りぐんでいるのが「**人間の真の安らぎは何か**」っていうテーマなんですから。その探究が、あえていえば今、私の最大の冒険ということになりますか。まったくこれは逆説的な話になりますが。青春の原点から一九年、感無量です。

さて、帰国してから当時の記録を取りまとめ、昭和四十七年の年末に、四十頁近くの小冊子「SILKROAD」を発行しました。

この中におさめている「デマベンド山」「アラム・クー山群」そしてトルコ東南部の「ジロ・サト山群踏査」の記録を以下に収録しました。

デマベンド山（五、六七二米）登高

テヘランに入ったのが六月一五日の夜半、そして一六日は休養と決め、一七日大使館、東洋工業のエージェントをまわり、イラン山岳協会へ行けば、木曜日の午後は半ドン、金曜日は休日とのことで結局三日ばかり空費したが、一九日にイラン山岳協会へうかがいどう話がつたわったのか、ガイドを紹介していただいたり、イラン体育協会の宿舎を世話してもらい、ここで長野山協隊と知り合い情報を交換しあった。

我々はまず、初期の目的のデマベンドに登ることに決めて二一日にレネーに向う。

そして、長旅のアカを落しにガイドのアドラヒ氏の案内で、デマベンドの中腹（レネーと同高度）にあるオブギャルの硫黄温泉に入りに行く。車で五分、思わぬ温泉にひたり明日への英気を養う。

六月二二日

レネーのB・Hに残る小山氏の運転で取付きまで行く。約三〇分で着き、ケシに似たゴロカシタの咲きみだれる裾野に取付く。

ところどころ遊牧したところを過ぎ、小高い丘に寄れば、そこは放牧の最中で石囲の中に追い込んだヤギや羊の乳をしぼっている一家に出合う。

ジェムシー氏は知り合いの間柄で、ヨーグルトをわけてもらうが、我々にはすっぱく、あまり多くは飲めないがジェムシー氏はグイグイのんでいる。イランではヨーグルトがおいしいと読学してきたが、あまり口にあわなかった。

カラチ上陸以来、初めての登山とあって気ははやるが体がもうひとつピリッとしない。

それでも今を盛りの名も知らぬ花を見ながら行けば気もまぎれる。

放牧地から一時間ほど登ったころ、谷口が突然もうれつな胃けいれんにおそわれる。しばらく様子を見るが、彼が『俺はここでビバークして明日下るからお前達は登って来てくれ。これは、俺自身よくわかっているから明日になればよくなるだろうから』といわれたのでツェルトと水、食料を置き、彼と合図の方法などを決めてジェムシー氏と立岡の後を追い岩稜を登って行く。

ジェムシー氏はあと一時間ぐらいと言っていたのが、なかなか遠くて、急傾斜になった岩稜を登ってようやくイラン山協ハウス（四一五〇米）に着く。初めて四〇〇〇米を越したので軽い頭痛がしてしかたがないので増血剤と鎮痛剤をのみ、夕食後早ばやとシュラフにもぐり込む。

谷口はいまごろ、どうしているのだろうかと思いつつ……。

六月二三日

夜も明け切らぬころ、軽い食事をとり頂上へ向う。ガレバ状のところや、ベニテントスノー帯を三回ほど横切り、そして頭痛でガンガンする頭をだましつつボッカの要領で一歩一歩登る。ジェムシー氏は八回目の登山とかで余裕しゃくしゃく、立岡のバテぶりも彼の今まで見たことない程。比較的余裕のある私が〝やはり酒のみの方が強いのかなァー〟とか冗談をいったり、けしかけたり。顔のむくみもお互いひどいもので見られたものではないが、ガマンをして登る。

ようやく頂に着いた時、カスピ海の上空は完全に雲でおおわれ、何の眺望も得られず山頂に凍った湖があった。

肌を刺す風がヤッケをとうしていたかった。不思議にわきあがる喜びはおこらず、しっとりとした情感がわいてきた。

山頂にある登山帳に登山記を書き、降る足のその速いこと。四七〇〇米付近から一気にグリセードすればまさに疲労コンパイ、フラフラになって小屋に入り一時間ほど休養してみたが、それでもおさまらず出発する。高度を下げれば体も回復してきて頭痛もおさまった。登りしなによった遊牧民のところによって、谷口が下ったことを確めて安堵の胸をなでおろす。登ったルートよりデマベントの裾を横切るようにしてレネーに向う。

裾野には、シシウドの花や、ゴロカシタ、コクティーなどと、名も知らぬ花が一面に咲き誇っているのを見れば、登頂の喜びと相まって足どりも自然と軽くなる。

途中ではるか下方の車道に我々の自動車がむかえに来ているのを見つけたが、大声もとどかず先に帰るのを追いかけつつレネーに帰る。

（岡　春海）

アラム・クー山群（四、八四〇米）登高

アラム・クー山群

アラム・クー山群とは、テヘランの西、約二〇〇キロのカスピ海側に位置し、主峰のアラム・クーを中心に四〇〇〇米を越える高峰が二〇以上もある一大山群である。ザグロス（ZAGROS）と共に、イランにおける雪と岩との殿堂といった感じで、イラン山岳協会の発行するパンフレットにも詳しく紹介されている。

六月二五日

朝からとんだ間違いをしてしまい、半日行程で行けるところを、延々一〇時間のドライブとなってしまう。つまり、ルートバラクとルートバラという地名のスペルを読み違えたのが原因で、途中で気がついたもののあとの何とかで、夜の九時頃になってようやくルートバラクの村に着く。

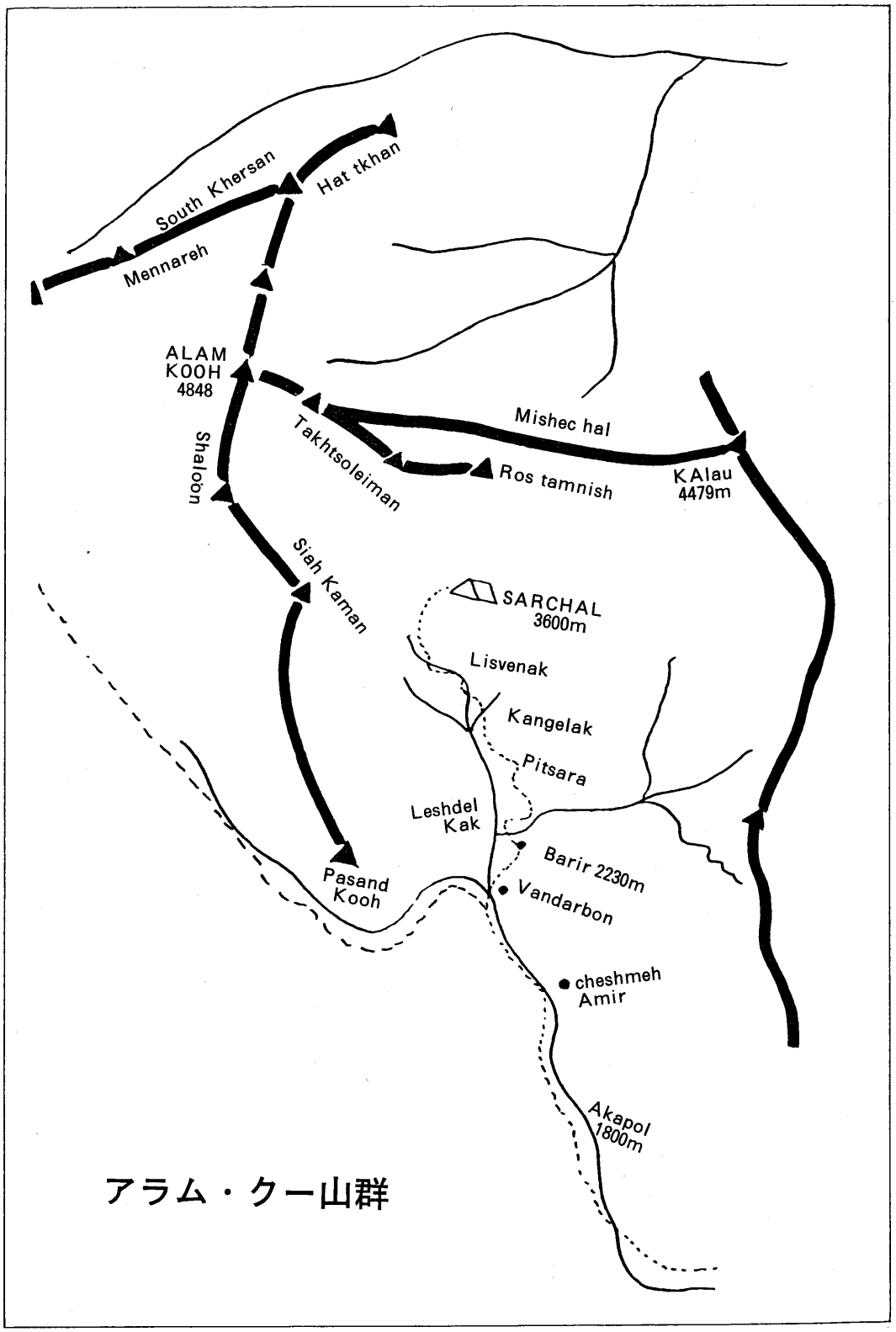
とりあえず腹ごしらえということで食堂のようなところに入り、豆入りのスープのようなものをすすっていると、気のよさそうな男が話し込んできた。もちろん言葉が通じるわけもなく、いつものように関西弁で話し合った結果、すぐ上にあるオジャベツの村まで便乗させてくれということである。他にもおまわりが一人割り込んで来る。こうなればギブアンドテイクということで、車中にて今夜の寝グラを世話するということを条件にオジャベツへ向う。

オジャベツに着くと、義理がたい男はさっそくアリさんというカーペット職人の家を紹介してくれ、今夜はここに役宿することにした。

美しい娘さんを囲んで、タブリズ大学に通うという息子との語らいが深夜まで続いた。

六月二六日

昨夜たのんでおいた馬一頭に私たちの全装備をボッカさせ、長身の馬方とともに七時に出発する。かわいそうなのはボッカ役の馬公で、ハァーハァーフゥーフゥーというのを横目でみながら、何ともけっこうな入山である。


South Khersan
Hat tkhan
Mennareh
ALAM
KOOH
4848
Mishec hal
Takhtsoleiman
Ros tamnish
KAlau
4479m
Shaloon
Siah Kaman
SARCHAL
3600m
Lisvenak
Kangelak
Pitsara
Leshdel
Kak
Barir 2230m
Pasand
Kooh
Vandarbon
cheshmeh
Amir
Akapol
1800m

アラム・クー山群

イランの中でもこの辺りは、カスピ海の影響で雨量も多く、山々は深い樹木とみどりにおおわれており、私たちにしっとりとした気分を与えてくれる。この二カ月間、荒涼たる砂漠地帯を旅している私たちにとって、このウェットな気分にひたれることが何よりもうれしい。

一路サルダボード川にそった川原を進み、途中点在する遊牧民のキャンプ地に立ち寄って、ティーやヌンをごちそうになる。約三時間ほどでバンダラボンという二俣に達し、第一回目の渡渉を行い右俣にルートをとる。このバンダラボンは標高約二〇〇〇米とはいえ、すぐ上の谷には残雪があり、雪どけ水がゴウゴウと流れる中を太モモまでつかりながらの渡渉はなかなか大へんであった。

これより目的地のサルチャルまで、標高差にして約二〇〇〇米の急登にそなえ、台地の上にある遊牧民のキャンプ地に仲間入りし大休止とする。

さっそく馬公の荷をおろしてやり、たっぷりと休養を与え、遊牧民と楽しい語らいと真昼の宴がはじまった。メランコリックな笛の音が川面にながれ、ローマンティックなひとときを過ごす。

これより一気に険しくなった高まきをくりかえしながら、二三〇〇米の峠を越え、再び道は急な沢ぞいとなり、つらい渡渉をくりかえしながら高度をかせぐ。

この辺りからパサンド・クーの側壁や前衛峰の急な岩稜がせまり、ガスの切れ間に一瞬姿をあらわす高峰群は、コンペキの空にそそり立っている。

オーッとかヒャーッとか、感嘆の声を発しはじめたのもこのあたりからである。何しろ、ピッチの方は馬公しだいということで、スケッチをしたり、写真をとったりしてのんびりゆく。

やがて道は沢ぞいをはなれ、キュラマ・クー側に大きく高まきをはじめると最後の登りである。約三時間ほどで氷河の末端の台地に登り立つとサルチャル（三六〇〇米）である。

氷河とお花畑にかこまれ、アラム・クー山群を一望にできる別天地である。先日以来入山しているという長野隊と再会し、イラン山協のハウスをベースとして使用させてもらうことにした。サルチャル着午後八時三〇分、満天の星空であった。

六月二七日

ゆっくりして四時起床、六時出発。小山氏はキーパーとして残ってもらうことひした。

ベースハウスからすぐそこに見えた、通称私たちが呼ぶところの四〇〇〇米台地は以外に遠く、八時過ぎにようやく達する。さっそく取付点に予定していた左方向のルンゼ末端でアイゼンを着用する。

一応ノーマルルートとはいえルートがあるわけでもなく、ルートファンディングをしながら登り出す。穂高あたりでいえば、ちょうど北尾根の五・六のコルへ涸沢側から登高するのに似て、雪もちょうど五月のそれであり、アイゼンがよくきいて快適である。ほぼ一直線にルートをとり、約一時間でこのルンゼを登り切り、シャー・カーマン峰（四四八〇米）から主峰アラム・クーへつらなる主稜線のコルに出る。

このあたりから眺める山群はなかなかのもので、氷河をしたがえ四五〇〇米以上の高峰が二〇以上も林立する姿は大パノラマであり、とりわけ、タクシクレーマン峰の赤い大岩壁は豪快そのもので、ピーク

からダイレクトに氷河まで切れ落ちている。

小休止の後、これより主稜線は急な岩稜と雪壁のミックスした登はんとなり、アンザイレンする。コンティニァスのまま、チャローン峰（四五八〇米）へ突きあげているこの岩稜は、大小さまざまなルンゼが入りみだれ、急な雪壁、極たんにもろい岩、落石には極度の神経をすりへらしながらのジグザグ登高を続け、チャローン峰のピーク直下をトラバースし、コルに出る。一一時三〇分である。

もうれつな風をさけ、岩影で軽い行動食をとってそうそうに出発。すぐ前方に見える最低コルへ向って急な下降となる岩稜をたどる。高度のせいか、このあたりから頭がガンガンしだしてくる。

最低コルからアラム・クー主峰へのルートは大きく開け、ガレ場の大斜面を直登しピッチを上げる。

風は相かわらずもうれつをきわめ、飛ばされそうになりながらピーク直下、二〇〇米ぐらいの岩稜を登り切り頂上に立つ。午後三時である。

小さなホコラの中にメッセージを入れ、一気に最底コルまでかけ下る。時間的に余裕がないため協議の結果、最低コルから氷河までダイレクトに落ちるルンゼに下降路をとり、一気に下降することにした。ルンゼといっても事実上の雪壁であり、六〇米のザイルをフルに使う。中間地点でぼくが滑落したが大事に至らず、ゆっくりと時間をかけて下降する。

中間地点より下部は特に急な氷雪壁となり、その上滝や氷の出現で苦労させられるが、約三時間の苦闘の末、大きなシュルンドに滑り込みホッとする。

小休止の後、ザイルをつけたまま台地までグリセードでかけくだる。ベースまでは思い思いのルートを楽しみながら七時三〇分着。

六月二八日

本日は完全休養日と決定する。

長野隊の一行を見送った後、勝手にふるまうことにし、各自のスケジュール発表どうりの日課をこなす。

- ●小野氏――台地へ商売のためとかで出張。
- ●岡チン――シュラフ持参で終日家出。
- ●立チン――鳥毛服に身をかため、ウロウロスケッチ。
- ●谷ヤン――チリチリしながらイランの豆炊き。

六月二九日

下山日である。ひさしぶりのボッカとあってガンバル。ヨーイドンよろしくボッカレースとなるが、登りにさんざん手こづった渡渉に悩まされ、バンダラボンあたりでガタがくる。

ルートバラクのイラン山協ハウスに立ち寄り、その足で、オジャベツ村へ車を飛ばし、一宿一飯のジンギもそこそこに、お別れパーティと称して大いにもてなしをうける。

六月三〇日

村人総出の見送りをうけて一路テヘランへ。　（谷口　忠男）

トルコ、ジロ・サト山群の踏査

一九七一・七・七 ➡ 七・一六のきろく

ジロ・サト山群

トルコ東南部、ハッケャリ地方に位置するジロ・サト山群はチグリス河の源流にあり、イラン、イラクと国境を接する辺境地で、地理的にも、そのアプローチは相当の不便が予想された。

しかし、私たちは車という機動力を得ることによってその問題を解消することができたのである。

当時トルコは折悪く戒厳令下にあり（政権の交替及び政治不安のため）主眼をおいていた最高峰レシュコ（四一六八米）は、軍事的理由で許可されず、計画の半分と消化できなかったがサト山群を縦走・踏査することができた。

七月七日

イランのタブリズを朝出発した我々の車は四〇〇キロ余り走り、昼すぎセロというさびれた谷間の国境に辿りついた。イランにくらべ意外とカンタンな入国手続きをすまし、国境より三一キロのユクセコバというジロ・サト山群踏査の基地となる村へと向った。

ユクセコバは、イラン・イラク国境のせばまる、人口二〇〇〇人たらずの町というにはものたりない辺ぴなところである。

ユクセコバは二〇〇〇米の高原状盆地にあり、その語意は〝高原のバケツ〟と聞いている。

夕暮時、南の彼方にジロ・サトの山々がくっきりと望まれ、ふしぎな美しさが我々を魅了するのであった。村には軍が鮮屯しており、戒厳令はまだとけていないらしく、同山群への入山があやぶまれた。

七月八日

ホテルの息子を案内に同山群のアプローチの偵察に行く。村を出ると一面のグリーンフィールドで湿地状のところも見られる。

ユクセコバが二〇〇〇米の高原にあるため、ジロ・サトの両山群に深く分け入るアバルバシ谷の峠を越えると、だんだん高く、けわしく、青い空にそそり立って見えてくる。

石と泥でかためた四角い家の〝クルド〟族の村を四つ程すぎると、車道の途絶えるハニハジの村である（高度一二〇〇米）

渓谷のかいまに見る岩峰・岩壁群は、どれひとつとって見てもすばらしく、ため息のでる思いであった（それらはすべて前山か支稜の側壁にすぎぬことが、あとでわかった）。

車でのアプローチがハニハジ止りであること、又荷役に予定していた馬がやとえぬことを確認し、今日の偵察を終え帰路についた。

●ユクセコバ～ハニハジ間四三キロであった。

七月九日

同山群で陸軍の演習が近日行なわれるとの情報が入り、警察署に出向き署長に面会する。演習の件はデマであるらしいが、ジロ山群には軍事上の重要なポイントがあり、前山のトレッキング程度ならよい、サト山群の入山はかまわないとのことであった。

一応サト山群に先に入山することにし了解を得た。踏査のための食料買い出しに八方手をつくすが満足なものは得られなかった。

七月一〇日

一週間分の食料・装備をととのえ、入山しないカメラマンの小山氏にハニハジまで送ってもらうことにし、八時ユクセコバを出発する。

ここ当分快晴が続きそうで、今日もすばらしい天気である。トルコの標準時がずっと西のアンカラにあるので、一時間ちがいずれがあり八時とはいえ、もう真昼の太陽である。ハニハジでスイカを割り、向

への日時を決め小山氏と別れる。

出発して間もなく、頭をケガしたクルド族の少年に出くわし、手持ちの薬品で応救処置をしてやる。お礼のつもりなのか、仲間の男が途中の岩場を通過するまで道案内をしてくれた。

前方にベルキス（BELKIS・二八一二米レシュコの前衛峰）のすっぱり切れた大岩壁がだんだん高く大きく見えてくる。

左方にはセリシブ（SERISIVI・二七八七米）の大岩壁をはじめ四〇〇～五〇〇米ぐらいの首のいたくなるような見上げる大岩壁が連なり、針峰群がひしめいていた。

我々は、しばしかたずをのんで見上げていた。途中、山仕事を終え帰路につく愛想のよいクルド族の男に会い、彼の妻や娘と記念写真をとったりする。こちらが〝メルハバ〟（トルコ語でこんにちわ）と声をかけ、握手を求めていくかぎり、彼らは決して強固な態度に出たりすることはなかった。

彼らは、かなりの社交家であることもわかった。しかし女と、一部の子供はそうはいかない場合もある。異国人を初めて見る連中が多いのだから、ちゅうちょしてひっこんでしまう。

土の壁だけ小さく見える高い丘の上の自分の家を指し、今晩はぜひ泊ってゆけと手ぶり、身ぶりでいってくれる。しかし、標高差は三〇〇米からあるし、我々はオラマールに行かねばならないのだと説明し、陽気な彼と別れた。

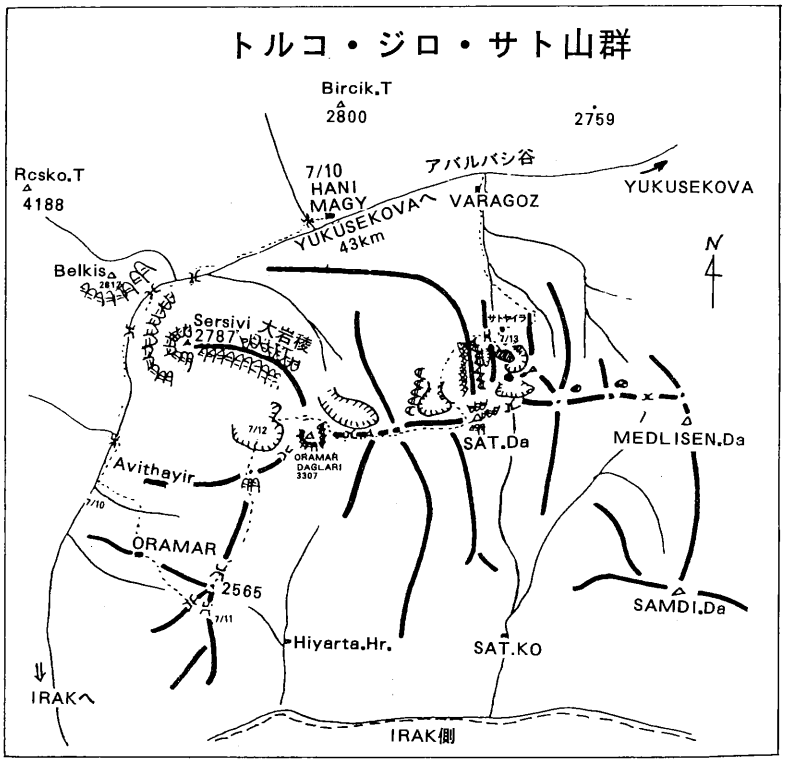
一七・〇〇オラマールに登る谷の入口でツェルトを張る。

七月一一日

夜中、あんまり明るい大きな月に起され、よくねむれなかったせいか体がだるい。

五・四〇出発、小一時間かけてだらだら登りの峠を越え七・四〇オラマールの村につく。

背の高いポプラのならぶ緑の大地に彼らクルド族の生活は静かに営なまれていた。



トウモロコシ畑があり、小川が流れ、背景にはジロ山群のレシュコ峰が雄々しい姿で望まれた。

石と泥でつくった四角い家が三〇戸ばかり、まさかこんな山奥にと思われる山岳地に彼らの舞台はあった。永遠にと思われる程、この静かで平和なオラマールの里にも異変は訪づれていた。すでに軍が駐留していたのである。突然あらわれた我々も最初は誤解され、どなられたが、日本人とわかりココアを出してくれたり、写真をとったりして仲よくすることができた。

オラマールよりヒヤアタに行く峠道を辿りコルに出る。谷に水はなく、陽はかんかんと照りヒィヒィいう。さいわい唯二カ所だけ天の恵みのような小さな湧水があり、助けられる思いで、のどをうるおした。

高度を上げるにつれ、ジロ山群の全容がうかがわれ、主峰レシュコ（四一六八米）の姿もはっきりと見える。一三・一五、二四〇〇米のコルに立つ。コルの近くに湧水を発見し、行動を打ち切るが、明日からはさらに水不足に悩まされそうだ。

主稜の一部に小さな残雪が見当るだけで、見渡すかぎり南面はガラガラの山容なのである。ちょうど乾期で天気の心配は皆無なかわりにこの水不足問題が明日の行動を左右するように思えた。

とにかく明日は岩とヤブの尾根を主稜線までがんばってみることにする。展望台のような大岩の上によじのぼり、オラマール・ダグラリ（三三〇二米）のジャンクションピークの登路を双眼鏡でさぐる。

三〇〇米からの壁に囲まれたオラマール・ダグラリが夕日に赤く染って美しかった。

七月一二日

三時三〇分起床、五時一〇分コル発。オラマールダグラリより南西にのびる岩稜にルートをとる。二つ目の岩峰のチムニーでワンピッチアンザイレンする。ジャンクションピークのコルまで登降困難な岩峰がつづくため、東面をトラバースするも、ひどいヤブこぎをしなければならなかった。

G・Pのコル一二時、底をつきかけた水筒をぶらさげて、オラマール側のずっと下に見える残雪まで四〇〇米ばかりも下って水を取りにゆく。

水の問題は踏査の成否を握っているように思えた。今日の行動で見通しが立たねば引き返すよりない。コルから、G・ピークの肩に突き上げる草付にルートを求める。途中いたるところに熊のフンを見つけ、また熊の穴らしいものもあり、我々を狼狽させた。

笛を吹いたり、鍋をたたいて警戒しなければならなかった。熊のフンは、主稜線上のこんな高所の岩稜にと、おどろかされる所でも見かけた。

午後四時五〇分、G・ピークに立ち我々は、はっとおどろかされた。なんと北側はびっしりと雪のつまった氷河なのである。みごとなカールと赤茶けた岩峰オラマール・ダグラリ。それに続く針峰郡と巨大な側壁！ ただ、その凄絶ともつかぬ美しさに、はげしいおどろきを覚えたのだった。

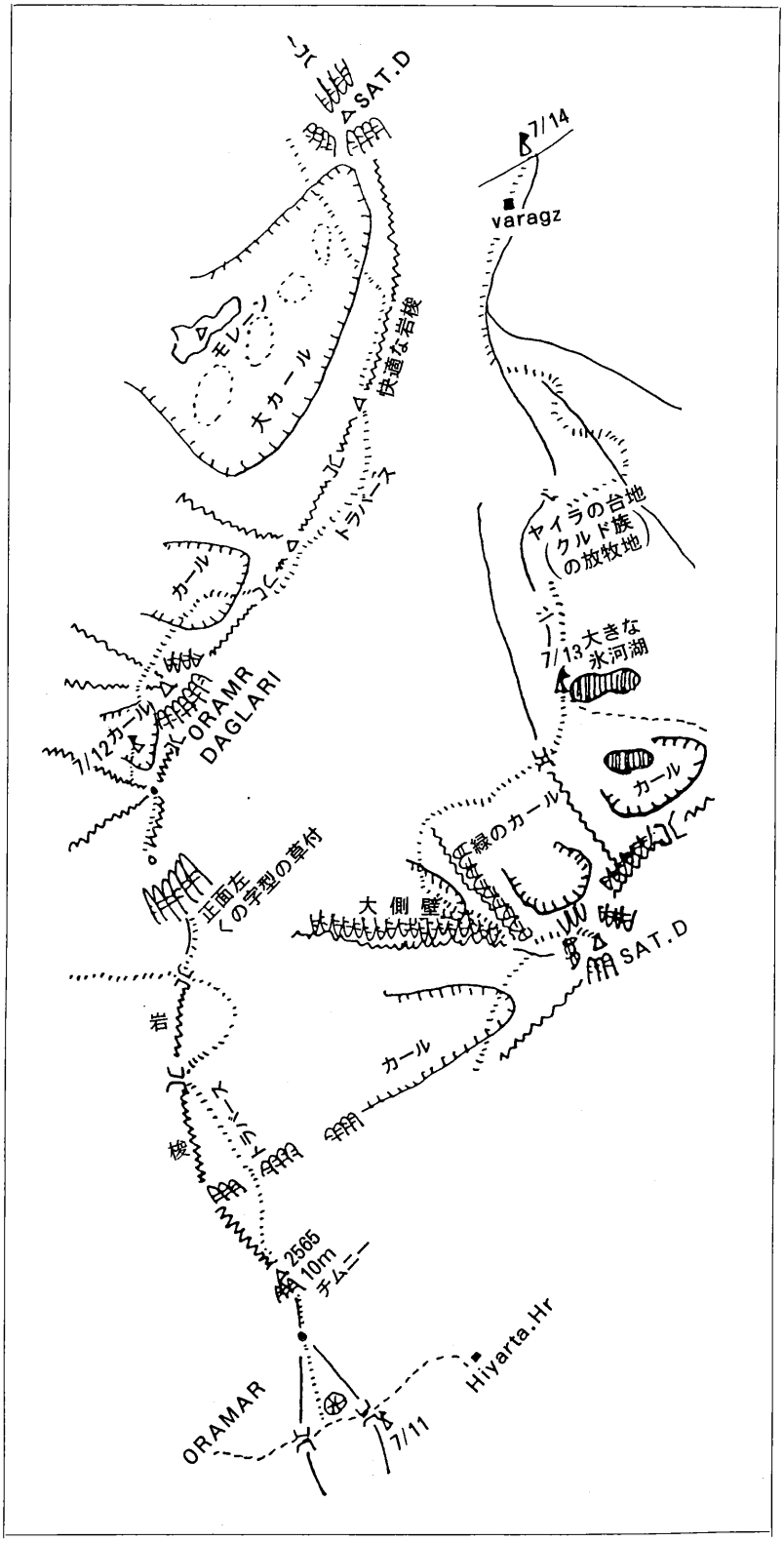
モレーンの緑の台地にすばらしいテントサイトを見つけた。

七月一三日

五時二〇分カール発、七時一〇分オラマール・ダグラリ峰のピーク

に立つ。頂上はせまく三六〇度の大パノラマが展開する。人跡が見かけられないのに気を良くし、ケルンを積み、大事にしていた手製のハーケンを記念に打つ。

ピークより主稜線は二〇〇米近い壁となって切れているため、カールをトラバースし、再び主稜線をたどる。北面は大きなカールを形成し、氷河湖らしきものが四つ見られた。



サトに続く岩稜は以外とやせており、ザイルを出す程ではないが、馬乗りになって渡ったところもあった。午後二時一五分、サトのピークに立つ。

サト（ＳＡＴ）とは、この急しゅんな岩峰群といくつかの氷河湖のあるこの付近の総称であるらしいが一番高いこのピークが一応主峰であろうと思われる。サト山群をはさんで、アドルバシ谷側と南面のサ

ト村を最短距離に結ぶ道がサト主峰の東肩のコルを抜けているわけであるが、主峰東面は二〇〇～三〇〇米の懸崖を呈し、北面も主峰直下より同様であり、直接コルに立つルートは見い出せなかった。

主峰より北にのびる大岩稜とその支稜の間の氷河を下降し、適当にその支稜をこえて、はるか眼下に見える大氷河湖まで行くことにする。

傾斜がゆるくなってしばらく行くと又、熊公のフンと生々しい足跡に肝を冷された。

氷河湖より東側に小尾根を乗越し、すばらしい緑の大地に着く。そこには河川の標本でもみるような、みごとに蛇行した小川が流れており、清らかな雪解け水で顔を洗うことができた。ここはすでに里人のヤイラ（夏期の放牧地）であるらしく、石囲いの跡や羊たちの足跡が見られた。

氷河湖に至るには、さらにもう一つなだらかな尾根の峠をこさねばならない。峠のむこうの景観は疲れ切った我々に充分むくいてくれるものであった。青い湖面、湖水に沈む氷河の流れ、夕陽をうけたすばらしい岩峰群は湖をとりまき林立している。これ以上、望みようのないこのユートピアに我々は小さなテントを一つ張った。

何かのまちがいから一週間分のはずの食料が、もうとぼしくなっていた。腹は満たされないが、大自然の中に溶けこむようで、この上なく素適な夕暮れであった。

食料不足のため、明日は下山するより他に方法はなかった。サトの頂上で我々の目をうばったメデルセン峰やサムディー峰に行けないのが残念なことであった。

七月一四日

八時二五分、湖畔出発。サト村を結ぶ明瞭な道を三〇分も下ると、わずかの大地が広らけ、ヤイラにぶち当る。どう猛な数匹の番犬にほえたてられ、最初はどうなるのかと思ったが、背の高い青年が犬を押えてくれ、我々を彼らのテントの所まで案内してくれた。三〇人近くのヤイラー族にとり囲まれ、我々は大歓迎を受けた。

一〇才ぐらいの子供たちがやたらと多く、彼らの好奇心は有頂点に達し、我々はもみくちゃにされた。こういった場合、未開民族の間で絶対的に人気のあるのが薬である。子供たちまでそれを欲しがり、子供たちがあんまりさわがしいので、ひとりの男が「コラッ」と大声でその場を制したかと思うと、すっと手を出し、俺にくれという。思わず吹き出してしまった。

能書きと用法を知ってこそ薬は効を奏するが、乱用して有害になる恐れもあるので、何でもかんでも与えるわけにはいかなかった。

胃腸薬やビタミン剤程度だ。

娘がわかしてくれたチャイをすすりながら、しばしの間、彼らと愉快なひとときを過ごした。

午後四時、ハニハジまで迎えに来るはずの小山氏の車は、待てど暮らせど一向に姿を見せず、陽も落ちたので岸辺でビバークする。食べるものもなく、やたらと湯を沸してのんだ。

夜中の一二時頃、ひとっ子一人いないはずのあたりが急にさわがしくなり、ジープの一団にたたき起された。詳しくはわからないが、とにかく小山氏に何らかの事故が生じたらしいのだ。そのジープでユクセコバに帰り、ホテルで小山氏に会うことができた。小山氏は無事で

あった。我々をむかえに行く途中、あのジープに衝突されたのだという。お互いの安全を確認し合って我々はホッとすることができた。

一週間後、車の修理を終え、思い出多いユクセコバを後に一路ヨーロッパをめざし、西へ西へと車を走らせた。

チョモラーリ・ベースキャンプへの旅

片山英一

一九七九年の四月下旬から五月上旬へかけて西遊旅行社の主催で蝶を採集するツアーがブータンへ入ることを聞き、一行の中へ加えて貰い初めてのブータンの旅を経験した。私は蝶には興味はなかったが北の方中国チベットとの国境に連る氷雪に鎧われたブータンヒマラヤの壮観をひと目だけでも垣間見たいの一心で捕虫網の一行の後に蹤いて歩いた。然しもうモンスーンのシーズンに入っていて厚い雲が低く垂れこめ山容は望むべくもなかった。幻の白いヒマラヤの蝶を追って、首都ティンプーから北の尾根を登りパジョディンの村から更に高く約四二〇〇米の稜線へ出た時突然目の前に真白に氷雪に覆われたチョモラーリ（七三一五米）の美しい山容と、荒々しく突っ立ったクンドカン（六一〇〇米）の岩峰が現れた。約三週間にわたってのこの旅の間、上空が晴れて山の方が見えたのは此の日ただ一日だけであって全く運が良かったと言う他ない。私は夢中になって何枚もシャッターをきった。此の時以来あのチョモラーリの麓を辿ってみたいの一念の虜になった。早速西遊旅行社を通じてブータン政府観光局へトレッキングの許可を申請した。

翌一九八〇年にチョモラーリのベースキャンプへのトレッキングが許可になったので、入山は好天の継続するポストモンスーンの十一月初旬ときめ神戸近郊に在住の山の仲間に呼びかけて急きょ七人のパーティが編成された。最年長の前田浩（当時六四才）を隊長に選び片山英一（六三才）浅野初子（六一才）長島隆（五九才）藤田達三（五一才）小川集大（四七才）寺本滉（四三才）の七名に西遊旅行社からは前年蝶のツアーで一緒だった伊丹紹泰君を指名してお願いした。出発近くなってから共同通信の筒井功氏の参加がきまり総勢九人の老年、熟年のチームとなったが、まあ気楽に行こうやと出かけることになった。

昭和五十五年十月二十九日大阪を出たインド航空機は同日深夜にカルカッタへ到着する筈であったが空港がストで閉鎖されていた為やむを得ずそのままボンベイへ直行一泊し、翌日の国内便でカルカッタへ引っ返し更に一泊を重ねたため丸一日遅れてバグドグラ空港へ辿り着いた。このトラブルの連絡が取れず心配していた通りブータンからの出迎えの車は来ていなかった。タクシーをチャーターして国境の町プ

ブータンの主要山岳　①チョモラーリ(7314m) ②チャトラケ(C 6000m) ③カンブン(6500m) ④ジチュダケ(7003m) ⑤チュムカン(高度不明) ⑥カンチュダ(6800m) ⑦マサカン(7100m) ⑧ツェンダカン(C 7200m) ⑨テリカン(7000m) ⑩ジェジェカンプーカン(C 7300m) ⑪カンブーカン(C 7200m) ⑫ゾンゴブーカン<テーブルマウンテン>(7000m) ⑬チョモラーリカン(7000 m) ⑭ガンケルブンズム(7541m) ⑮メルンギカン(7000 m) ⑯クーラカンリ(7554m・中国領内) ⑰ガルーラカン(6500m・ブータン最北東の雪峰) 以上の山岳に関しては雁部貞夫氏が「ブータンの山々」と題して岳人447号～450号にわたり解説している。

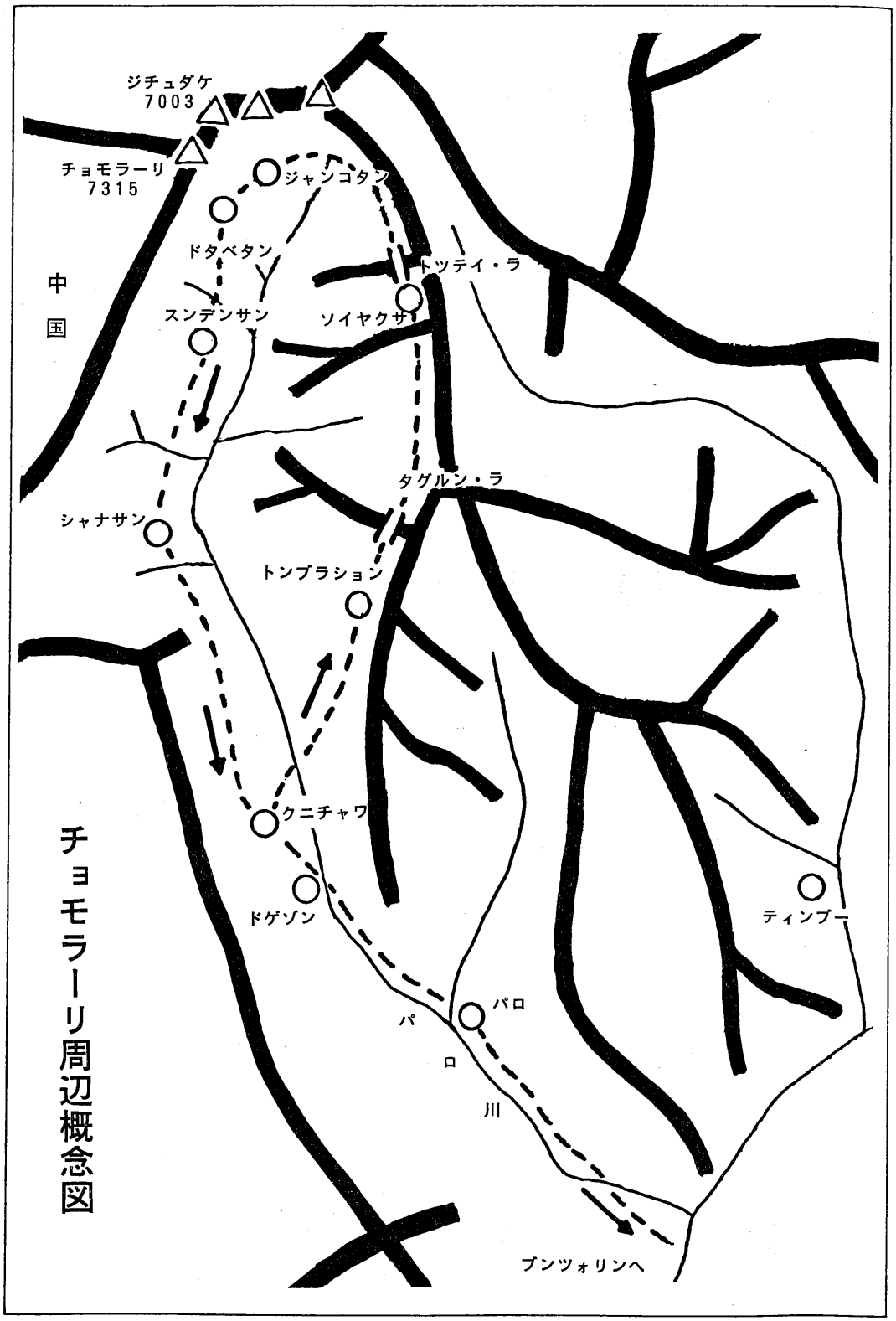
ンツオリンへ入ると言った何か不手際な口惜しいスタートとなってしまった。

十一月二日朝パロを発ってトレッキングの出発点ドゲゾンに九時頃に着きキャラバンの到着を待った。此のツアーが中止となったと判断されたため準備が遅れたようで午前中待ったがトレッキングチーフも馬も現れない。午後二時すぎ、乗馬五頭・駄馬十五頭、馬子三人、コック三人それにチーフが揃いやっと出発の運びとなった。

パロチュウ（川）に沿って上流へ進み、とっぷりと暮れすでに真暗になったグニチャワの村につき暗闇の中での幕営となった。夜遅く政府のガイド、ニマ君が追いついて来、乗馬をもう二頭追加用意した。このグニチャワは標高約二七〇〇米、ブータン陸軍の兵士約七〇〇人とその家族が住んでいる。

十一月三日午前六時の気温はちょうど零度で昨夜はかなり寒かった。陸軍の駐とん地とあって、テントのすぐ近くの射撃練習場では早朝からパーン、パーンと小銃の射撃音が賑やかで兵士達の徒手馴練も熱心にくり返されていた。村を出るとすぐにパロ川を離れた左岸の尾根を東北方へ向っていきなり急斜面の登りとなる。今日は乗馬七頭となり若い伊丹君と筒井君が徒歩でゆくこととなった。約二時間急坂の直登が続き高度三六〇〇米の放牧場に着く。森林帯をぬけ視界はひらけて西の方パロ川の源流にはチベットとの国境が望まれ東には山頂を白雪に包まれたダギゴンの長い岩尾根が現れる。草木は枯れつくし、岩と石塊の急斜面の処々にエーデルワイスなどの小さな草花が見える。晴天が続き空には雲一つ見えず深い紺青に澄みきっている。やがて尾根上のヤクの放牧のための木小屋（カルカ）に着き昼食にする。弁当はコックが出発前に作ってくれたもので、食パンにゆで玉子、フライドポテト、雞肉の煮物それに缶ジュース。仲々のごちそうである。ポロポロの食パンはジュースで流しこむ。更に尾根道をゆっくり登ってゆく。低いシャクナゲの密生が果てしなく拡がり続いている。四二〇〇米のトンブラション・ラへ着く。トンブラとは広いと言う意味だそうで峠から北面、西面一帯見渡す限り背の低いシャクナゲの密林で、花の頃にやって来たらどんなに素晴らしい眺めだろうかと話し合った。眼下の草原の最低部で先行の駄馬隊がテントを設営していた。トンブラションである。この広々とした草原は春から十月中頃位まではヤクの放牧場となっているが、草の枯れた今は低地へ移動してしまっていて一頭も見られない。今日は約七時間の行程である。

十一月四日トンブラションを発って約一時間で二番目の峠タグルン・ラ（四四五〇米）に着く。昨日四〇〇〇米を越えたあたりから一行のうちにポツポツと高山病の兆候が現れはじめた。此の峠からはチョモラーリの南面と右へ続くジチュダケが真白な姿の上部をのぞかせている。実はこのジチュダケをガイドのニマ君がツエルムカンだと教えてくれたのでずっとそう信じていたのだが、一九八三年春に日本女子登山隊がこの山にアタックした際、女子登攀クラブ代表の田部井淳子氏の報告によりこれがジチュダケであることが判明した。従ってこの紀行文では以前に報告したツエルムカンを訂正することにしたい。峠から馬を下りて低い灌木の林の中の急坂をジグザグに谷の底まで一息に降る。乗馬は登り道だけで下降路は馬を下りる。谷間へ降ってから再び馬の背にゆられカンバやシャクナゲの林の中をゆっくりと過ぎる。やがて小さな渓流に沿い広々とした美しい谷間に入り今夜の泊り



チョモラーリ周辺概念図

場のソイヤクサの村に着く。標高約三八〇〇米。此の谷間にはヤクの農家が十二軒点在している。このうちの一軒へ取材に出かけた筒井君の報告は次の通り。

「ニマ君と一緒に村の一軒を訪れた。二階建の大きな家で入口を入るとすぐ居間兼食堂そのまん中で囲炉裏の火が燃えていた。家族は十人、大人達が火の周りに集って来た。人なつっこい笑顔でお茶を勧めてくれる。そばの男（三五才）に百円ライターをプレゼントすると、男は直ちにそれを、われわれの正面に坐っていた彼の妻（三〇才）に渡してしまった。彼女はライターを品定めし、満足そうな顔でポンと自分の懐に納め「カディンチェ（有難う）」と頭を下げた。此の家の財産は全部彼女のものなのだ。ここは婿入り婚の世界である。彼女は此の家で生まれ、夫を迎え、母親から財産を受け継ぎ、そしてそれを娘に譲る。」

この農家ではヤクを百頭も持っているそうである。又別の農家の息子が、父親が病気でお尻から血便が出て困っているので薬が欲しいと頼みにやって来た。ドクター藤田が抗性物質の薬を一週間分持たせて帰した。（帰途私達がドゲゾンまで帰りついた時、偶々この息子も来合せていて親爺の病気がおかげですっかり良くなったと礼にやって来た）。このソイヤクサはかつて、昭和三十三年七月に、雨の降りしきる山道を中尾左助氏が辿りつかれた村ではなかったろうかと想像される。夜はぐんと気温が下りマイナス十一度にもなっていた。

十一月五日更に東北へ進みこの旅での最高地点トンティ・ラ（四八〇〇米）を越える。峠の手前でブルーシール（羚羊）五〇頭あまりが一行の前を横切っていった。峠は雪がベッタリとついていて雪の稜線が東へ続き、その先に美しい二つの岩峰を持つ氷の山が突っ立って見える。強い風の吹き抜ける荒寥とした峠にはしきりにタルチョン（経文旗）がはためいている。峠から左手へ眼下にきらめいている小さな流れまで下降し右岸を下ってゆくと真正面に三角錐の美しいジチュダケの純白の姿が現れ二つの氷河湖が見えてくる。湖の右岸を下って再び西斜面が展開する草原で又ブルーシールの大群と出逢った。前田隊長は大いそぎで馬から下りその移動してゆく群れにカメラを構えてシャッターを押しつづけていた。二つの氷河湖の下部に更にもう一つの大きな湖がありジチュダケの倒影が美しい。パロ川最奥の部落ジャンコタンは戸数三戸の淋しい村である。標高四一〇〇米のこの村がチョモラーリのベースキャンプと呼ばれている。三戸の内の中央の農家の庭にテントを張り、コックは農家の囲炉裏を借りて炊事をする。各戸は夫々五〇～六〇頭のヤクを持っており耕地は全く無い。ヤクの糞は貴重な燃料で家の周囲に堆く積み上げている。食物の偏食からくる甲状腺異状のため出事る大きなコブを首にぶら下げた老人を抱えた家族であったが、私達一行に何かと親切に便宜をはかってくれた。一番奥の家でヤクを解体していると言うので見にいった。五〇〇キロもある巨大なヤクをきれいに皮を剝ぎ内臓を取り出し、足を外しといった具合で一時間余りで処理してしまった。腰の所のロース肉に相当する部分を約十四キロ買った。一キロ十二インドルピー（約三六〇円）であった。秋の終りから冬へかけて彼等は何頭かのヤクを追ってパロの街まで山を下り、ヤク一頭を米五～六俵と交換し一年中の主食を確保する。又塩、布地、その他生活必需品を入手する。貨弊は最近までは必要なかったようだが近頃納税（年に百二十ルピー・約三千六百円）が

金納になったりしたので貨弊経済の波がこの山奥にも及んで来たようである。主食は米・ヤクのミルク、バター、チーズ、乾し肉などの他に豆類や蕎のようである。子供達は学校へゆくこともなく、四～五才からもうヤクを追うことを教えられる。

十一月六日は休養日とし、のんびりとテントで休む。元気な連中はチョモラーリの見える処までとニマ君の案内で少し下流から右へ尾根を登っていった。テントの背後からはジチュダケが覆いかぶさるようにのしかかり、谷の奥のモレーンの上から氷河の裾が今にも崩れ落ちそうに頭上高くかかっている。実は今日を休養日にしたのは私達のこれから先の旅路に予定されていたニレ・ラ（四七六〇米）を越えてリンシゾンへ、そして首都ティンプーへと辿るコースを変更し、パロ川沿いの道を下ってパロへ引っ返すことにしたので、今日はのんびり昼寝を楽しんでいる次第なのであった。

十一月七日パロ川の右岸を約一時間下ったあたりで放牧のヤクを多く見られるようになり、次の部落ドタベタンに着いた。ここにもヤクの農家が三軒ありその一軒を訪問する。両親と娘夫婦の他六人の十人家族。ここも習慣の入り婿婚のようである。狭い平家の内部は食糧置場、囲炉裏、天井にはヤクの乾し肉やチーズがぶら下っている。ブータンではどこの農家でも一戸に二～三頭の犬が同居している。パロ川に沿って気楽に高度を下げて午後早く今夜の泊地のスンデンサンに着いた。ヤクの肉を手に入れて楽しみにしていた昨日はラマ教の肉食禁止日に当ると言うのでお預けになって今夜に持ち越された。ショウガ醤油のタレでつけ焼のヤクの肉は久しぶりのご馳走と舌つづみを打った。チョモラーリももう見えなくなった谷を下り、このあとシャナサン、グニチャワ、ドゲゾンと泊りを重ね、十一日にパロへ帰りつきその足で首都ティンプーへ到着。九泊十日の高山病になやまされながらも結構楽しく充実した小さなトレッキングを無事に終えることが出来た。

（尚この紀行文は今は故人となった前田浩氏のメモに基いたことを付記します。）

神戸・日本・ブータン友好協会

ブータン・トレッキング報告

新川利夫

一、日程

昭和六一年一〇月七日～一〇月二二日　一六日間

二、参加者

L　新川　利夫（六四才）神戸山岳会

SL　小田　政美（三七才）神戸市役所山岳部
　　岡崎　群司（五七才）神戸山岳会
　　野上　芳宏（五〇才）神戸山岳会
　　梶浦万智子（四六才）関西登高会
　　佐藤　昌志（二一才）神戸商大山岳部
　　加藤　文江（二四才）西遊旅行（添乗員）

三、ブータン西部の山について

トレッキング前半は天候が悪く、充分な偵察をすることができなかったが、三つのブロックに分けて感想を述べることにします。

編集注・山域の概略については、別稿片山英一氏の「チョモラーリベースキャンプへの旅」に掲載の『ブータン北西部概念図』を参照されるようお勧めします。

(1)　パロ川（チュー）左岸の山

地図上チャトラケ（六〇〇〇米）の山があることになっているが、ドゲゾンから北望したところでは、そのような標高の山は見当らない。ヂャンゴタンの宿営地から南望した時、上半は雲にかくれていたが大きな山がある。恐らくタンタンカより東に入る（シェレラに至ると思われる）谷の源頭に当るが、片山氏等の話や写真から見てもせいぜい五〇〇〇米級の山と思われる。

(2)　リンシ付近の山

チョモラーリ、ジチュダケ、ツエルムカンと国境線の七〇〇〇米級になるが、先ず登山許可の問題がある。それに日数の問題（リンシまで入るのに最低四日、更にBC建設、キャンプを延ばしていく日数）、隊の編成（ブータンではシェルパが使えないので全部隊員がやらなければならない）等を勘案すれば、大規模な遠征隊でしかも日数も余裕をもって望まねばならないと思われる。

(3)　ショドウ付近の山

標高は五〇〇〇米級の山ではあるが、田部井さんの登ったセブチュカン東峰（五二〇〇米）、川崎橘山想会が登ったカンブン（五五九〇米）以外に、少なくとも五つくらい考えられる。

すなわちセブチュカン西峰及びセブチュカンの南にある山、シェレラ北方の双耳峰、ヤレラから西の峰続きにあるピーク、カンブーの西のピーク等である。

ショドウまで入る日数はティンブーより登り三日、下りに二日あれば十分であり、ショドウよりACを出す（ヤクを利用できる）ことによって、これらの山は一日か二日で登り得る可能性があり、しかも隊の規模も小さくてすみ、短時日で成果が挙げられるものと思われる。

(4)　登山の時期等について

次ぎに時季の問題であるが、プレ・モンスーン、ポスト・モンスーンいずれにも長短があるが、プレ・モンスーンにリンシに入る場合、その年にもよるが残雪の多い時の峠越えは苦労するだろうし、ブータン・スタッフの装備（特に靴）の配慮も必要である。彼等はほとんどズック靴しか持っていないからである。

ポスト・モンスーンの場合ブータン・スタッフに聞いたところ、例年十月十日から五日間（?）のパローのお祭りがすんでからチョモラーリが見え出すといっているところから、十月中旬以降に山へ入るのが良いのではないかと思われる。

四、行動記録

十月七日（火）大阪空港(九・四〇)—JL一五二—成田空港(一〇・五〇～一五・五〇)
—AI三〇七—機中泊。

当初は大阪夕刻出発の予定が、エア・インディアの都合（アジア大会の選手を香港から乗せるため）で成田・香港直行となり、しかもカルカッタをスキップしてニュー・デリー直行となる等、出発前からゴタゴタ続きとなってしまった。

大阪空港で片山、梶浦さん等の見送りをうけ成田へ。成田は雨である。そこで加藤嬢と合流、諸手続きをすませたが、迷惑をかけたと出国税（二〇〇〇円）はエア・インディアが負担してくれた。

香港で印度選手団が乗込んできて満員となる。

十月八日（水）ニュー・デリー国際空港(二・一〇～三・〇〇)—アショカセントラルホテル(三・一〇～七・三五)——ニュー・デリー国内線空港(九・四〇)——カルカッタ空港(一一・三五～一三・三〇)——エア・ポート・ホテル(一二・四〇)。

機内をうろうろする選手団でさわがしく眠れぬ十三時間余りを過ごし、夜半のニュー・デリーに着く。印度人の雑踏の中をぬけて空港近くのセントラル・ホテルに入り仮眠。朝食後国内線空港からインデアン・エアラインでカルカッタに引き返す。

雲上にでてから期待していたヒマラヤ連峰は、少し南にそれて飛んだので遠く離れ過ぎていて期待外れであった。カルカッタは雨模様。まだ雨季の名残が残っているらしく、ブータン行きの飛行機はここ二、三日は飛んでいないとのこと。明日が心配である。

エア・ポート・ホテルに入り午後は市内観光。相変らずの人と車の波、牛の群れ、路上生活者、すさまじい騒音。地下鉄ができ、人口が一〇〇〇万人に増えたといわれるが三十年前と少しも変わっていない。特に印度の縮図である。

明日はどうやら飛行機が飛ぶと聞いて安心する。

十月九日（木）カルカッタ(七・四〇)——パロ(九・二〇)——オラタン・ホテル(一〇・〇五)

一六人乗り双発のドウルック航空で、やっと晴れかけたカルカッタを飛び立つ。ガンジス・デルタを過ぎブータンに近付くにつれ、カンチェンジュンガの大きい山容が見えてくる。

ブータンは山と谷ばかりの山国、かなり山の上まで人家が見える。チョモラーリが遠くに見え出し、快晴のパロ空港に順調に着陸。日差しがかなりきついが空気が乾燥していて気持ちよく、日陰では涼しいくらいである。トヨタの乗用車三台に分乗（ブータンの車はトラックを除きほとんどがトヨタである）一先ずオラタン・ホテルに入る。

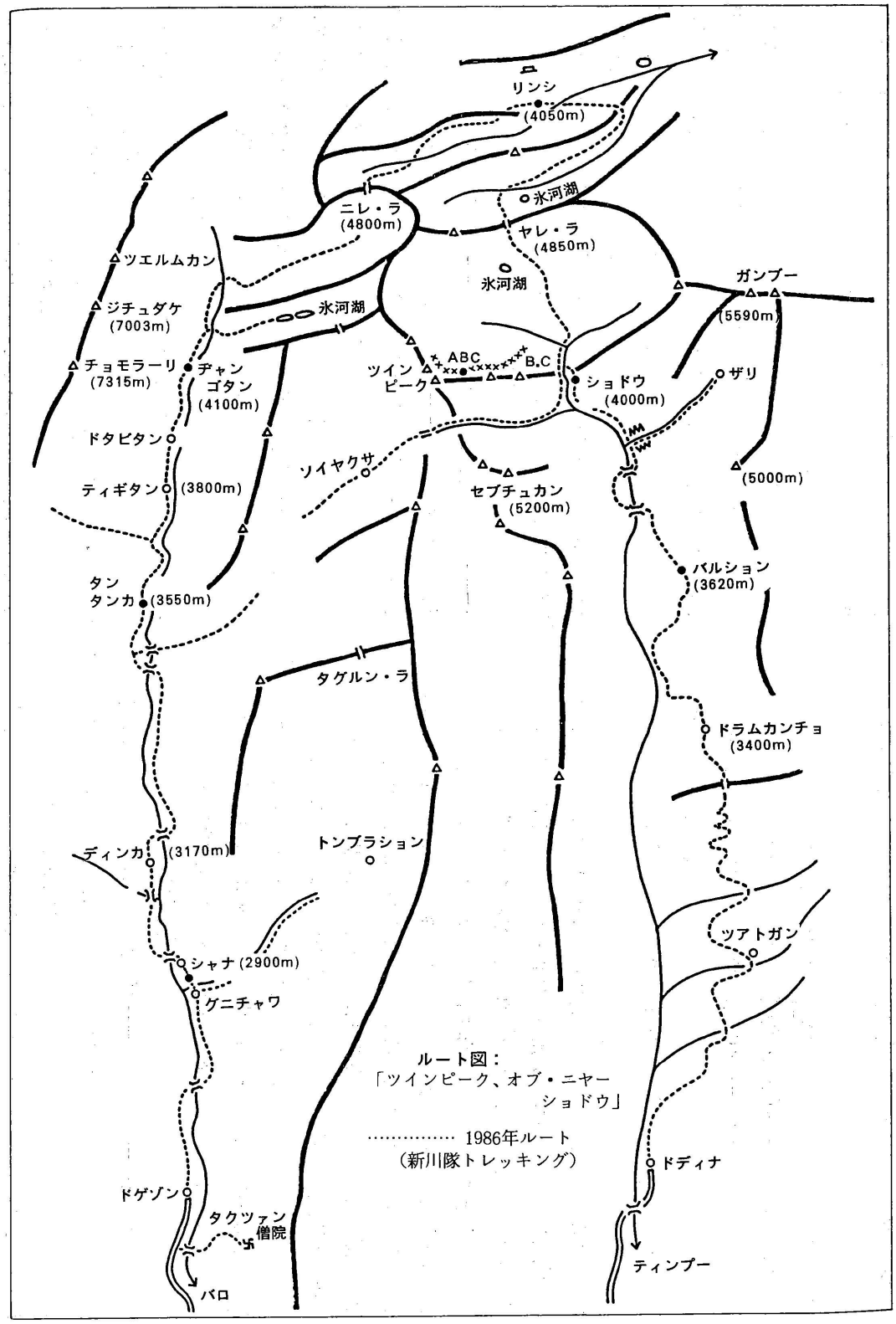
BTCの手配がうまくいかず、明日トレッキングに出発できなくなったので、その代わりトレーニングを兼ね明日はタクツアン僧院に行くことにする。午後はパローの観光、ドゲゾン・パロゾンを見てまわる。

夕食後各自絵ハガキを買って日本に便りを出したが、これらは帰国後二、三日して到着した。

十月十日（金）オラタン・ホテル(六・五〇)——登り口(七・一五)——タクツアン僧院(一〇・五〇～一一・〇〇)——登り口(一三・四五)

昨日見た登り口で車を捨てパロ川（チュー）を渡り、谷を少し渡った所で左手の尾根に取付く。

道は観光客が馬で登るため広いが馬糞だらけの凹凸道である。途中


リンシ
(4050m)
氷河湖
ニレ・ラ
(4800m)
ヤレ・ラ
(4850m)
氷河湖
ツエルムカン
ガンブー
(5590m)
ジチュダケ
(7003m)
氷河湖
チョモラーリ
(7315m)
ゴタン
(4100m)
ABC
B.C
ツイン
ピーク
ショドウ
(4000m)
ザリ
ドタピタン
ソイヤクサ
ティギタン
(3800m)
セブチュカン
(5200m)
(5000m)
タン
タンカ
(3550m)
バルション
(3620m)
タゲルン・ラ
ドラムカンチョ
(3400m)
ディンカ
(3170m)
トンブラション
ツアトガン
シャナ (2900m)
ゲニチャワ
ルート図：
「ツインピーク、オブ・ニヤー
ショドウ」
1986年ルート
(新川隊トレッキング)
ドディナ
ドゲゾン
タクツァン
僧院
ティンプー
パロ

に休憩所があるが、そこから仰ぐタクツアン僧院は岩壁に張り付いたようで、どこから登るのかルートが分からない。しかし近付くにつれ細々とした岩棚の道が続いていて、一度左側の岩稜をつたって、滝の中間から寺院に登りつけるようになっている。

僧院の中を見学。窓からの眺めは素晴らしい。高度計は三一〇〇米を示している。前穂か涸沢岳の高さである。休憩所で砂まじりのカレーの昼食。そこを出る頃から小雨となる。下山後博物館、民家、ドンチェラカン寺院（ここで幸運にもダライラマのツエイケンポに拝謁でき祝福を受けた）。その後西岡農場等をめぐった。

十月十一日（土）オラタン・ホテル（七・四〇）――ドゲゾン（八・〇〇～八・一五）――グニチャワ（一四・二五）

今日はいよいよトレッキングに出発。ドゲゾンで荷物を馬にまかせて吾々はサブザックで先行する。日本の田舎を思わせるような風景で、肥沃なパロ川（チュー）の右岸を行き途中で左岸にうつる。昼食はパックランチ、サンドイッチ、フライドチキン、ポテト、ゆで卵、チーズ、デザートはリンゴ、加藤嬢手製のおにぎり、たくあん、のり、といった豪華版で食欲旺盛。晴れていた空は午後から小雨となる。

グニチャワが見え出す頃検問所がある。男十人、女七人のアメリカン・パーティが三日程前に通過して行ったことを知る。後日ティンプーで聞いたところによると、彼等はリンシから更に奥に行ったが天候悪く雪のため途中で中止し、中部ブータンをまわっているとのことであった。

グニチャワには軍隊が家族ぐるみで駐屯している。そこを過ぎて少し行った広場でテントを張る。先発のアメリカン・パーティが装備を過重に持っていったため食堂テントがなく、シートを張っただけで夕食となったが、スープに始まって肉や野菜がふんだんにプレートに盛られ、ナイフ・フォークを使っての食事で、デザートからティーまで続き大いに満足する。

夜半から雨が本格的となる。

十月十二日（日）グニチャワ（七・三五）――昼食（一一・五〇～一二・二五）――タンタンカ（一五・四五）

モーニングティーで起こされ洗面の湯まで持って来てくれる。よい気分だが、天候は小雨模様ですっきりしない。

出発後一時間程で右岸に渡るが、そこが火事で焼けてしまったシャナである。パロ川（チュー）に沿って、南アルプスか上高地の徳沢・一の俣間のような道を辿る。途中熊に出合ってびっくりさせられた。

午後、左岸に移ってからアップ・ダウンが多くなり、周囲の山は雲がかかって見えず、ただ黙々として歩く。もう一度右岸に渡る所からチョモラーリが見えるとのことだが見えず、そこから三〇分程登った所がタンタンカであった。

今日はかなり長い行程であった。夜、またもや雨になる。

十月十三日（月）タンタンカ（七・五〇）――ヂャンゴタン（一四・三〇）

昨夜の雨で周囲の山が大分白くなっている。地図にあるチャトラケらしい山を探すが、上半が見えないので判然としない。

歩き出してしばらくすると森林限界を越え、ようやく高山らしくなってくる。谷巾も広くなり、右岸はゆるやかな丘でヤクの姿も見られるが、左岸は急峻な山々が懸崖となって続いている。天気もよくなってきて気分は爽快である。

昼食はドタビタンの民家でラーメンを食べる。

一四時半ヂャンゴタン着。さっそく小田、佐藤、岡崎、野上君等は、北西の尾根に偵察に登っていった。四七〇〇米位まで登ったらしいが、雲のためよい結果は得られなかった。

四〇〇〇米を越え、疲れと高度障害がでてくる。

十月十四日（火）ヂャンゴタン（八・三〇）――氷河湖（一〇・〇五～一〇・二〇）――ヂャンゴタン（一一・三五）

「チョモラーリが見える」という声で目が覚める。モーニングティーもそこのけでカメラを構えたが、しばらくしてガスの中に消えてしまった。今日は氷河湖へ、高度順応のトレーニングと近くの偵察をする予定だが、朝食を終えた頃から段々と天気が怪しくなる。

氷河湖に登りついた頃から雪となり、寒いので直ちに下る。午後はすることもなく休養となる。

十月十五日（水）ヂャンゴタン（一〇・三〇）――ニレラ（一三・三五～一三・四五）リンシ（一六・二〇）

昨日からの小雪がテント周辺を白く染めており、相変らずのガスで山の中腹までしか見渡せない。

梶浦さんの調子が悪く、高山病の徴候が見えてきたので、これからのコース、標高等を考えると気の毒ではあるが引返してもらうことにし、ガイドとアシスタントをつけて馬で送り出した。

小田、佐藤、加藤君は徒歩で先発。新川、岡崎、野上は馬で後発する。ヂャンゴタンの奥にヤク飼いの家が三軒ほどあり、氷河湖への渡河点を過ぎた所でパロ川（チュー）を渡り、スイッチバックで山腹を登る。登り切ると、立山の室堂平のスケールの大きいような所に出てゆるく登っていく。その頃から少し雲が切れかけて、ジチュダケがチラリと頭を見せてくる。正面の雪山のどこを越すのかと思っていたら、途中から左手の砂礫の急斜面を登っていく。やはり馬は早く、先発隊に峠直下で追付いた。

祈りの旗がはためくニレ峠（ラ）には寒い風が吹き通っていて、展望はもうひとつである。峠の北面は一面の雪で、昼食を積んだヤクが遅れているため昼食抜きで、各自行動食だけですませ峠を下る。

峠からは谷の右岸の山腹を下り、対岸に渡ってからも長い下りが続く。遙か下方の山腹にリンシゾンが見え出すと、左手の尾根に出てジグザグに下り切るとリンシである。

風通しの良い石室でたき火をしながらヤクの到着を待つ。暗くなってヤクが着いたので夕食はおそくなったが、加藤嬢の指導で日本食のうどんと赤飯がでて元気回復する。

十月十六日（木）リンシ（八・四〇）――ヤレ峠（ラ）（一三・三五～一四・二〇）――ショドゥ（一六・四〇）

久しぶりの快晴。ジチュダケ、ツエルムカンの東面が素晴らしいスケールで迫っている。地図を出しブータン・スタッフに聞いてもどうも山の名前がはっきりしない。今日一日付近の偵察をしたいところだが予備日が少なく、ドディナ～テンプー間の車の手配を本日しなければならないので、ヤレ峠（ラ）を越すことになる。

昨日同様徒歩隊は先発。ヤクに荷をつけるのに手間取り、岡崎君は待ち切れずに先発組を追いかけた。

リンシの部落まで下らずに右手の尾根を登り、回り込んで谷沿いに登る。広い谷間のヤクの放牧地を川沿いにゆるく一直線の登りであ

る。途中ヤクが暴れて荷物を振り落としたので回収するのに手間取ったりしたが、雄大な風景の中をキャラバンで行く気分は満点である。ニレ峠と同じく谷のどんづまりまで行かず、途中から右岸に渡って急坂を左へ、台地に登ると湖のある雪の平原に出る。その頃からガスが湧き出し稜線が見えなくなってくる。眼前の岩峰の間の雪の稜線がヤレ峠である。

その頃になるとさすが馬も疲れたのか、四歩行っては止まり五歩行っては止まりの状態である。ブータン・スタッフも疲れ出し、岡崎君の乗る予定だった馬に乗ってしまう始末である。雪は二〇～三〇糎くらい、とうとう峠直下の岩場で馬を下りたがさすがに歩いて登るのはえらい。息もたえだえヤレ峠に登り着く。

小雪混じりの寒風が吹上げ、周囲の山もカンブーらしき山容も上部がはっきりしない。ヤレ峠南面には雪がなく、広いヤクの放牧地を下っていく。途中右手に氷河湖がある。左右から谷が次々と合流し谷らしくなっていくが、ショドゥまでは相当長い。放牧地が終わり左岸に大きな岩峰が現れ、谷も渓谷らしくなりかけた頃、その岩峰の下にショドゥの小舎を見出した。

さすがブータン・スタッフも疲れたのかテントを張る動作もにぶく、排煙の悪い小舎でたき火に苦労する。

十月十七日（金）ショドゥ付近偵察

最後の予備日でありかねてから考えていたショドゥ付近の偵察をする。朝食前に、小田君が小舎の東にあるセブチュカン方面を調べた結果、朝食後西の尾根に登ることになった。

小田、佐藤両君が先発、岡崎、野上君が続いて後を追った。新川、加藤は残留。

ブータン・スタッフを集めて今朝は朝食が遅れたこと、今までの行動についての遺憾な点について気合いを入れる。ヤクに荷物を積んでから落とすことが多く、食料が大分不足気味となっている。ケロシン、砂糖、卵等がなくなってジュースその他の缶詰めも不足してきている。

陽だまりでも風が寒く、正午頃からガスが湧き出す。午後一時過ぎ岡崎、野上君が、四時頃小田、佐藤君が疲れて帰ってきた。偵察の結果を検討したが有望である。

夕食はなけなしの材料で、加藤嬢がコックを督励しコロッケを作ってくれ、味噌汁に舌つづみを打った。

十月十八日（土）ショドゥ（七・二〇）――バルションゾン（一四・〇〇）

「バラザブ、ティー」の声でテントから顔を出すと、まだ月が煌々と照っていて夜は明けていない。昨日の気合いが効いたのか、時計を見るとまだ午前四時過ぎである。天気はよく朝食をすませたが、寒いので直ちに出発する。

左岸に岩峰が続き渓谷らしくなっている。カンブーに登る谷の入り口は、両側共大きな岩壁の廊下になっている。その下流で一度右岸に渡り、谷が東から南に回るまでアップタウンが激しい。左岸に大岩壁が続くが、頂上は恐らく五〇〇〇米位の標高があると思われる。岩壁がおわった所で左岸に渡り、川から離れてダラダラと山腹の登りが続く。前方の尾根にゾンが見え出し、それを越した所がバルションゾンの宿営地である。

今日はトレッキング最後の夜であり、岡崎君の誕生日だというの

で、ありったけの残りの材料でバースデイケーキをはじめ日本食の御馳走が出る。タンタンカ以来飲まなかったウイスキーもまわり、歌の合唱からブータン・ダンスまで出て最後の夜を楽しんだ。

十月十九日（日）バルションゾン（七・〇〇）――ドラムカンチョ（一一・四五～一三・〇〇）――ドディナ（一六・〇〇～一六・二〇）――ティンブー・モティタン・ホテル（一七・一五）

今日はトッキング中一番長い行程になるが、今夜はティンブーに帰れるとブータン・スタッフも楽しそうである。

七時出発。ゆるい下りが続き、川に下りたってから、川沿いの道が一時間半位続き今度は登りとなる。先行した加藤嬢が足を捻挫したので、小田君とスタッフ一人が付き添い後尾からゆっくり来てもらう。

登り切れば平坦な道となり、対岸の山を眺めながらのんびりと歩ける。コックが熊の足跡を見付け緊張させられ、先行した岡崎君が心配になってくる。やがて下りになるとドラムカンチョの草原が眺められ、その先の対岸に槍ガ岳のような岩峰が見える。

ドラムカンチョで昼食。また登りになる。ヤレヤレといったところである。登り切って平坦な道が続き、一寸した峠状のところからいよいよ下りにかかる。

十月二十一日（火）モティタン・ホテル（八・一〇）――パロ空港（九・三〇～一〇・二〇）――カルカッタ空港（一一・三〇～一三・〇〇）

快晴の下、思い出多きブータンを飛び立つ。静かなブータンから喧噪の印度へ。

佐藤君は午後の飛行機でネパールのトレッキングに出掛ける。残り六名は二三時五〇分発のＡＩ三一六で帰国の途につく。

十月二十二日（水）

成田着一五時三〇分。通関をすませＪＬ〇五一に乗り継ぎ大阪へ。空港で片山、市役所山岳部の梶浦さん等の出迎えをうけ、午後七時半ロビーで解散。

以上のような次第で良きメンバーに恵まれ、無事トレッキングを終えることができた。短時日の旅とはいえ、ブータンの良さをそれぞれの心の中に刻み込まれたことと思われました。

亡き友たちへの追想

想い出の仲間たち

片山英一

昭和九年に、後の神戸山岳会の結成と運営の中心となった「嶺同人」が発足した当時、このグループのリーダーシップをとっていたのが前田房男氏であった。山登りに対して理想が高く理論派であったと同時にロマンティックで夢のようなことを真面目に熱っぽく語りかけてくる淋しがりやの男であったと思い出す。声が良くて、キャンプファイヤーの炎に照らされ岩によりかかり乍ら満天の星空に向って声量一杯に歌っていた。「佐渡おけさ」や「白秋の山のうた」などであったと思う。毎月一回の定例集会の席や、日曜日毎の山行例会ではいつも仲間の同人たちの山への情熱にあきたらず憤慨の末叱咤激励が絶えなかった。若い連中は青木一男氏を大将に集会や例会のあとでよく飲んだが彼はあまり飲めなかったので二次会はいつも欠席。いつもの理論斗争に辟易してしまっていた連中は彼と分れたあとやっと一息つき、生き返ったようにやれやれとばかり大いに飲むのがきまりコースとなっていた。「笛吹けど、人踊らず」と言って彼は同人結成後二年あまりで退会していった。良い男であったけれど理屈っぽすぎた。戦後は東京で暮らしておられて彼の地で逝去された。

小橋弘氏は、後に西田姓に変られたが、無口で物静かで、そしてスマートでハンサムな私共の理想の男性として敬愛の的であった。ドイツ商社のウインクレル商会に勤めておられ、現役兵で入隊し幹部候補生として一年余りで少尉に任官し除隊して来られていた。支那事変がはじまって召集され、戦地へ発たれる前に結婚し西田家を継がれた。昭和十四年に中支那、無錫の近郊の戦斗で両眼を負傷され、顔面に厚く白い包帯を巻かれ手をひかれ乍ら神戸へ帰って来られたのをお迎えし、山の仲間一同涙にむせんだものであった。幸いにしてその後の治療の甲斐あってどうやら弱い乍らも視力を取り戻されたことは何よりの喜びであった。あのような不幸な戦争の始まる前の、貧しくはあったが平和な日々の夜、小橋氏を中心とした私達のたまり場であった「喫煙バー・リスブラン」は今でも懐しく想い出の中に甦ってくる。

三の宮の、今の生田新道のあたりに、こじんまりした板前割烹「博多」があった。ここは青木一男氏の巣であり前田房男氏が退会したあとの嶺の仲間は青木氏をリーダーに固っていた。「博多」ののれんをくぐるといつも青木氏とそして仲間の誰彼と顔が合った。前田浩、島田文雄、馬場芳雄、前川茂などの面々であった。青木氏はご両親を早く亡くされ、二人姉弟のお姉さまはお嫁にゆかれて一人きりの淋しそうなお暮らしでしたが、至って朗らかな親分肌な性格で私達を弟のように心にかけ面倒をみて下さっていた。神戸大丸の北トーアロードに面した河南商店へ勤務しておられた。嶺同人を解散し神戸山岳会として発足した翌年、昭和十六年（一九四一年）六月十三日、金曜日の未明、彼の身辺に悲しい事故が起り、彼はその責を負って折からの梅雨の中、二十八才の若い生命を自ら絶ってしまった。その悲痛な想い出は今も胸を刺す思いがあり、本年は丁度五十回忌の年に当る。

木村寅次郎氏の家は中山手通一丁目にあって質屋さんであった。お

宅へよく遊びに上った。どう言う事情で大阪から神戸へ移って来られたのかを承ることは出来なかったけれど曽祖父に当られる木村平七氏は大阪で名門の豪商であられた由で、明治維新後初めて背廣を着用した浪花ハイカラ五人衆の中のお一人であったとか。煙草の製造販売を経営し、村山・上野両氏に出資して朝日新聞社を創設した方である。お家の蔵の長持ちには朝日新聞創刊号からの印刷後の紙型が沢山残っているとか、村山竜平氏の詫び状文も保存されていると言ったことを伺った。彼は非常に几帳面で義理とか順序とかにやかましい、どちらかと言うと固苦しいお人柄であった。昭和十二年に支那事変が勃発すると間もなく召集を受け北支那方面の山野で大変な苦労を重ねて来られた。昭和十五年に命を長らえて復員除隊して帰って来られ、その五月に冷沢、三ノ沢から東尾根を経て鹿島槍ガ岳へ登頂した。この山行では青木一男氏も一緒だったがその翌年彼の死に遭いその嘆きは一入であった。その後再び召集を受けられたが無事終戦を迎えられ、神戸の家は戦災で焼滅し尼崎市へ移られた。

昭和五年春、私が県商へ入学して剣道部へ入部したとき一年先輩に前田浩氏が居た。その後私は山岳部の例会に参加するようになり前田氏も同じように山の方へ来るようになっていたので二人揃って剣道部を脱退して山岳部へ入部した。彼は昭和九年に卒業し貿易商の岡本商会へ就職したが間もなく肋膜炎を患い退社して療養していた。その休養中に嶺同人設立のいろいろの事務を担当していた。その頃よく蔵の二階の彼の部屋を訪れて山の話にふけったものであった。彼はその時の病気のため兵籍はなかったが体格は良く至極頑丈で健康そのもののように回復していた。昭和十三年の神戸の大水害の時、川を溢れて押し流された山津波の土砂の下に彼の家はすっかり埋まってしまい、私達は何日もかかって掘り起したけれど家は再び使いものにはならなかった。戦争が激しくなって商売も出来なくなり徴用を先取りする形で神戸製鋼所へ入社した。戦後再び自営業を営むようになってから、神戸山岳会の再建に取り組んでいた私が仕事の関係で大阪へ移るのに従って、私に代って神戸山岳会を主宰し兵庫県山岳連盟の結成に努力するなど、苦しく多忙な日々の暮らしの中に山に対する情熱に生き甲斐を燃やすこととなった。そんな彼の結婚に際して年下の私共夫婦が仲人の大役を仰せつかり戸まどったことであった。神戸登山研修所が全国に先がけて設置されたとき彼は初代所長に就任するなど生涯を山一すじに生きた。剱岳の頂上近くで急逝したあと神戸山岳会会報の別冊の形で追悼号を刊行したが、私とは五十余年にわたる長い交友であった。

廣瀬文雄君は神戸山岳会の創立のとき、島田眞之介氏が主宰していた「滑火の仲間」の一員として一緒になったがまだ初々しい少年であった。戦時中は徴用や何やかやで別れ別れになっていたが終戦後又一緒に山へ行くようになった。天才的なロッククライマーでその技術と体力は唯々舌を巻くばかりで真似の出来るわざではなかった。一時関西登高会へ入会していたり、東京へ出て新村氏と一緒に好日山荘の海野氏の手伝いをしていたりしたが、結婚して神戸へ帰って来て私の会社へ入社した。岩登りの天才としては認識していたが仕事をさせてみてもう一つの素晴らしい、数学の才能を発見し驚かされた。彼には我社の研究開発部門で思い切り力量を発揮してもらった。昭和二十九年八月、島田眞之介氏から初めての輸入のナイロンザイルが手に入った

ので、これを試そうと二人で槍平へ入り、滝谷を登攀し、第三尾根へぬけて北穂の小屋へ入った。北穂高岳滝谷側のクラック尾根などのクライミングに引きつづき前穂高岳の屏風岩アルファルンゼの登攀などを楽しんだ。昭和三十年に創業した新光印刷株式会社の工場長として活躍していたが不幸にして病を得、胃癌のため惜しまれつつ若死にしてしまった。

神戸山岳会の五十年の歳月を回想するときずい分と長い時間の想いと、又夢のように過ぎ去ったつかの間のような思いにも感じられる。思い出の中に出てくるみんなは、揃って若々しく覇気と斗志に満ちみちている。懐しくも悲しいかんばせである。軍服をまとい陽やけした元気な顔で敬礼しつつ去っていった中村作三、生田育雄、片山武臣等は戦い終ったあとも逐に再び相まみえる日もないままである。

想い出の記

島田文雄

かつての私達は、一日の勤めがおわると帰宅までのコースは、まず故人となった島田眞之介氏の店（好日山荘）を訪ね、一・二時間の時を過したあと、行きつけの酒肆（しゅし）へ自然に足が向かっていたものである。そこには必ず一人や二人の山仲間がきていた。彼等の間に割り込み、めいめい好む物を注文する。やがて遅ればせに顔を出すものもある。われわれの共通の話題はいうまでもなく山行のことばかり。熱心に計画を語り、過ぎた山行の想い出話に花が咲く。このように山へ行かぬ時は一か所に集まり、グラスを傾けるのが楽しみであり、又同時に友情を深めるのにこの上もない場所であった。

そのうち、大きな山行計画（大きな山行と云っても、われわれの時代では、せいぜい信州、飛驒方面であった）がたち、いよいよその山行が決定すると、行きつけの酒肆には全然顔を出さず、ひたすらに山行の諸準備に没頭する。個人、共同装備の点検や整備、毎日曜日ごとの神戸背山での各種トレーニングなどは勿論であるが、一番気をつけたことは、各自の身体の調子を整えておくことであった。山行前の一か月ぐらいは禁酒を実行し、最高のコンディションに持っていくように気を配ったものである。もっとも、このことは皆で申し合わせたものではなく、必然的にそうなったものである。その当時は会員数も少くて、一人でも落後者があれば、折角の山行計画が完逐できないから当然のことであったと、今でもそう思っている。

ある正月の八ヵ岳合宿の折、出発の時間になってもメンバーの一人が顔をみせず、心を残して出発したことがあった。後で話を聞けば、この禁をおかし、出発前日の深夜まで宴会があって呑んだくれていたとのことで、天罰てきめん、指定の列車に乗れず、一日遅れて一人で赤岳鉱泉まできた人があった（名前は彼の名誉のために発表を差し控えます）。装備の一部を彼が持っていたことから、計画の一部が逐行できずに残念がった思い出がある。

酒の話では、連帯で責任を背わねばならぬことがあった。

正月の合宿を西穂高と決め、多忙な年末仕事が終わって全員（故人となった青木、それに片山、馬場、島田等）上高地へ向け出発した。その冬は近年にない大雪でバスは奈川渡止りで、そこからは徒歩。心はあせるが重装備のため行程ははかどらず、時間はどんどん過ぎていく。途中釜トンネルの内部は天井からツララが下っていたり、道が凍っていて数えきれぬ程転んだり、頭をぶつけたりしながら歩いた。一度などは、後から来る青木が転倒したまま起上らぬので、気絶したのではないかと心配して引返えしてみると、目を開けているではないか。「どーしたんだ」と聞くと、あまり何度も転ぶので起き上るのが面倒になったといいながら、むくむくと起き上ったのには驚いた。釜トンネルの出入口には谷へ向かって、人一人が這い出せるように梓川に向かって丸太を組んであった。

凍てつくような梓川の流れを眼下に見おろしながら、全員スキーをつけ出発しかけたところ、まったく突然に、自分達のたっている場所を囲むように、四、五米上部の斜面に「ビュー」という音をたて亀裂が走った。この時は全員思わず立ちすくみ、進むことも後退することもできなくなり、ただ顔を見合わせるばかりであった。スキーのビンディングをゆるめ、一人づつ慎重にこの危険区域を通過したが、全員安全地帯に脱出するまでは、実に長い時間のように思われた（実際は十分間位であったろうか）。上高地入口に達した時は、あたりはすっかり夜の帳に包まれ、ヘッドランプの光を頼りに大正池の水際まで降りてみたり、白樺の林の中をうろついたり、悪戦苦闘のすえ、宿舎の木村氏宅へ到着したのは二十時過ぎ頃であったと思う。

荷物を投出し、ストーブを囲み、早速出されたお茶を一気に飲む。お茶と信じて飲んだものが、全く不思議なこともあるもので、茶が変じてお酒となっていた。酒と気づいたが既に一杯の茶椀は空になっている。続いて注がれる茶椀を眺めながら、誰も中身のことは云わぬ。二、三杯飲んでから、誰かが「しまった、酒だった」と云ったのを、木村氏が笑いながら「正月だからよいでしょう」と云われたので全員ホッとした顔付で大笑した。

この時は全員が禁を破ったので、あえて氏名を公表した次第です。

西穂高登頂は吹雪のため視界が悪かったが、一応成功したのを覚えている。

いくつになっても、山行前はなんとなく不安な気がするものである。そんな感じがあったせいか、親には心配をかけぬように、山行計画はなるべく控え目に話をしたものである。

ある年の二月、故人となった木村寅次郎君と二人で、木曽御岳山へ行く計画をたてて諸般の準備にかかった。ご承知の方も多いと思うが、木村君はいたって親孝行だったから、御両親には、単に神鍋山にスキーに行くと話していたとのことであった。

出発の二、三日前に、ピッケル、アイゼン等を小生宅まで目立たぬように持ちこんでおいて、当日は自宅をサブザックにスキーと云う軽装で出かけ、小生宅で荷物をまとめて出発した。予定通り飯森小屋で一泊、翌朝登頂して下山したが、この時にとった写真で嘘がばれたことがある。

山行後、一週間ほどしてから木村君宅を訪問し、山行の話をしなが

ら御岳山の写真を見ていたところ、悪いことはできぬもので、かたわらから御両親が覗きこまれ「これが先日の神鍋山の写真ですか」と聞かれたが、ピッケルを持って御岳の頂上に立っているものや、デポでスキーの側にピッケルを突立てた写真であった。神鍋スキー場では戦前といえども、このような風景は見られなかったはずである。御両親が笑っておられたのは、なにもかもお見透しであったのだろう。

若い頃の山行や、山行に付随した想い出は数々あるものの、何分ほとんどが戦前のこととて、正確な記録も写真等も戦災でなくしてしまったのは残念であります。

筆者もすでに七十才をこえ、若い会員の方々とのきびしい山行のお付き合いは到底できませんが、藪山の散策にはまだまだ意欲を燃やしています。老兵ながら、皆さんとともに会の発展にこれからも協力させて頂きたいと思っております。

大樫正之さんの想い出

野上芳宏

「こらお前ら」の一声で、前に進んだ話は大樫さんの有名な話です。

忘れもしない昭和三十四年の冬山合宿。御岳山稜線での地吹雪で、誰もが前進せず岩陰に身を寄せ、じっと風雪に耐えていた時の出来事です。

この話を夜の一杯飲み屋で話して酒の肴にしたものです。その時の大樫さんの顔はほんとに愉しそうでした。

私が大樫さんと初めて出逢ったのは昭和三十二年ですから、もう三十年余のお付き合いです。その間、幾度も一緒に合宿に入り、私にとっては親父の様な存在で、よく可愛がってもらったものです。

それは三月の鹿島槍の南峰と北峰の間の稜線で、吹雪の為停帯していた時のことです。

「どんな事があろうと俺は帰るからな。四ツん這いになっても」と言った時、一瞬私は

「冷たい事を、自分だけ」と思いましたが、後になって思えば、その言葉は、大樫さんの口ぐせの様でした。これは皆に這ってでも帰るぐらいの根性を持てと言い聞かせていた様です。

しかし私は、その時は何日吹雪かれようが、全然心配してしませんでした。それはやはり、大樫さんという良き先輩がおられたからです。

でもそんな大樫さんに気を使わなくてはいけない事がありました。それは山での食料です。ニンニクが絶対駄目な事です。

テントの中で臭いでもしたら、一ぺんに気嫌が悪くなり、そのまま怒って下山してしまいそうです。

いや、ほんとに気嫌を悪くして、一人先に帰られた事も時々ありました。

よく怒りよく笑い、喜怒哀楽がそのままでる先輩でした。

しかし、大樫さんは心の温い方で、よく叱られるT君なんか、仕事の世話までも面倒をみてもらっていました。

大樫さんがよく私たちに言った言葉を書かせてもらうと、山でのアプローチで休憩した時、メガネを外し、向こう鉢巻のタオルで顔の汗をぬぐいながら、

「ああしんど、もう欲も得もないわ」

「山でのつらい事、それを社会にいかせ!!」

「わしはあらゆる遊びをやったが、山が最高や!!」

この言葉を云ったのを今も覚えています。

そして、大樫さんの山でのスタイル。頭にタオルを巻き、腰に水筒とカメラをぶらさげながら歩く姿は今も想い出します。

大樫先輩とは数えきれないぐらいよく一緒に山に行き、想い出せば次から次へとなつかしさで一杯になります。

ほんとに、野上とか一号とか、よく可愛がってもらいました。

山スキーも大樫さんに初めて連れていってもらったのですが、妙見蘇武縦走の時、シールを外し、滑るスタイル。なんやあれは、スキーを付けたグリセードやないかと思って、アゼンとしたものです。あの格好はまねしたらあかんと思いました。(クセになりそうで)

また、アルコール(酒)もよく飲んだものでした。

昭和四十年の冬山合宿で、BCを設けスキー練習と白馬岳登頂の時、新人曰く、大樫先輩のテントをラッセルしていると、出て来る出て来るポケットウイスキーの瓶。

栂池の小屋へ何回も買いに行き、ついにはウイスキーは売り切れ、今度は若い連中が山麓へ行って買ってきたものでした。

元気だった大樫さんも東京へ単身赴任した頃から体力もおとろえ、四十九年の冬山合宿で自信をなくしたようです。

そして例会の山行にも顔を出さなくなった頃、谷口君、田中君、私の三名でお家へ寄せてもらった時は、まだまだ元気そうでしたが、川崎病院に入院された時に、見舞に行かせてもらった時は、あまり話もせず、急に弱くなられたようでした。

しばらくそばに居させてもらい、あまり長居は大樫さんが疲れてはと思い、そっと病院を後にしました。

人は誰でも年齢を増すほどに角がとれ、丸くなると申しますが(私も大分丸くなったと思っているのですが?)しかし、大樫さんに関しては全然丸くならず、若い時のまま、最後まで頑固な先輩だったように思います。でも、そんな大樫さんを私は敬愛していました。

ある時は若い連中皆でお家へ泊り込みで山の話をしたり、大樫さんも神戸山岳会に入会して山に行ったことで、人生において色々プラスになったのではと思います。

私もよい先輩や仲間に恵まれた事で、今日までまあ飽きもせず、よく山に行ったものです。(お蔭様でお金は貯まりませんでしたが)心の貯金は一杯貯まり、ゆとりある毎日を過ごしています。

大樫さんには、もっと長生きをしてもらい、そしていつまでも、一緒に山へ行きたかったです。大樫さん——。

三宅信道氏を偲んで

宮松　晩

三宅信道さんが亡くなって丸十年になる。

彼は、昭和五十五年七月十一日、脳出血で急逝した。本当に突然のことであった。

お通夜の日が、五十回目の誕生日であったのが何とも痛々しく、いまだに忘れられない。

お通夜は、彼の自宅で営まれたが、父君の案内で彼の部屋へ入ると、ミレーの中型ザックに山行の用意がなされていた。

七月六日の土曜日にザックの荷造りを終えて、入浴中発作が起こり倒れたのである。すぐ福原の吉田病院に緊急入院したが、六日目に息を引きとられた。

私は、その間何度も病院に足を運んだが、彼は意識不明のままで、遂に口をきいてはくれなかった。倒れる前日の、金曜日の晩の電話が、最後の彼との会話になってしまったが、無論山の話で南に行くという彼が話役、私が聞き役であった。

三宅信道（みやけのぶみち）昭和四年七月十二日生。

彼は中国山脈の山懐、現在の広島県庄原市で、旧制中学の教師をされていた保郎氏の長男として生まれた。地元の県立格致高校を卒業して広島大学に入学した彼は、一年生の夏休みに、中国山脈の山中で枕木用の材木を伐採する現場の検数員として、アルバイトに行きそのまま、二学期になっても学校に戻らず退学してしまった。山の飯場での生活がすっかり気に入って学業を捨てたというのである。荒くれ男達と生活を共にして酒も覚えたが、純真さだけは失わなかった。

そんな彼が、昭和二十六年に警察官になって、葺合警察署を経て、昭和三十二年であったと思うが、当時私が勤務していた垂水警察署に転勤になって来た。実は彼とは、昭和二十九年の秋に、大阪城内にあった旧近畿管区警察学校で二か月間寝食を共にして、刑事講習を受けその間私は、彼を先輩として接していたので、彼が垂水に来てからは、非常に仲良くしてもらったのである。

彼は学生時代既に日本山岳会の会員になっていたし、休日にはせっせと山歩きを楽しんでおり、私も彼にお供をしてよく六甲山系を歩くようになった。

昭和三十四年の春私は、当時三菱重工の東垂水寮におられた萩原邦一先輩と知り合い、三宅さんと二人で神戸山岳会への入会をお願いして、仲間に入れてもらったのである。私が実際に会の合宿や例会で、山に行ったのは、昭和四十二年の秋までで、以後ペーパー会員になり下がったのに比し、彼は、息の長い山行をこつこつと続け、大山や但馬に、そして南アにその足跡を残したことは、私が語るまでもない。

特に、学生時代から通い続けた大山には詳しく、たびたび出かけていた。そんなことから何時しか、誰言うとなく彼のことを〝大山さん〟と呼んだりしていたが、何時もニコニコして、誰とでもわけへだてなく付合っていたし、彼のおこった顔は見たことがない。この愛すべき

彼が、昭和四十年十一月に南アルプスの麓から美しい奥さんをもらった。私は、結婚式に出席し友人代表としてお祝いを申し上げたのであるが、何故か六か月で別れてしまった。彼は、その事について多くを語らなかったし、私も友人として尋ねる気にはとてもならなかった。従って彼は生涯のほとんどを独身で過ごしこよなく山を愛し続けたことだけは確かである。私なりに、彼が晩年よく南アに足を運ぶようになったのは、別れた奥さんに対する思慕の念と無関係ではなかろうと思っている。

彼は、純真で極めて誠実な男であると同時に大変な読書家で博学であった。とくに山に関する本は、小さな図書館ができるくらい集めていたし、よく読んでいた。月給の半分は本代だとよく笑っていったが、これも山を愛するが故の道楽であったのではないだろうか。私は若い頃は、彼を〃三宅さん〃と呼び晩年は〃信（しん）ちゃん〃と呼ばせてもらった。父君は〃のぶ〃〃のぶ〃と呼んでおられ、本当は〃のぶさん〃と言うべきであったが、そんなことにはおかまいなく、彼は終始、私の身勝手をゆるしてくれ〃おい〃とか〃宮松〃と言って親しくしてもらったのである。私が彼と飲みたいなあとおもっている時に、予告なしにふらっと家に来るのが彼の特技であった。今も昭和三十八年五月に、槍平で撮った彼の写真を机上に置いて、毎日顔を合わせているが、とにかく威張らない先輩でよく酒をおごってもらった。

最後になったが、彼が生前月給の大半をつぎ込んで収集した山の本は、父君の〃のぶの供養に〃との申し出により私が、そっくり登山研修所に運ばせてもらった、今も仲間の役に立っている筈である。

愛すべき好漢
玉井　保さんを悼む

丸屋信雄

玉井保さん、通称「玉ちゃん」は、兵庫県下の山仲間では神戸山岳会の会員というよりも、神戸新聞の「玉ちゃん」で知られていたといってもよい存在であった。

玉井保さんは、職業柄のせいもあってか長期の山行に加わったという記憶はあまりない。どちらかといえば、当時の若い神戸山岳会の会員との山でのかかわりはそう深いものではなかったが、心臓が強そうで始めてのものはびっくりするような、それでいていたって気のいい人ざわりは（アクのつよいといっては失礼ながら）ＫＡＣの会員のなかでは特異な存在であった。山での活動の記憶の少ないわりには、飲んで議論を戦わした思い出をもっている人は案外多いのではないだろうか。

その玉井保さんは、昭和四十三年九月十七日、勤務先の神戸新聞カメラマンとして神戸港摩耶埠頭で写真取材撮影中、突然暴走してきたトレーラー台車にまき込まれ殉職された。享年四十歳の働き盛りであった。

玉井保さんが神戸山岳会に入会したいきさつについてはあまり定か

ではないので、すでに故人となられたわが神戸山岳会の大御所であり、山岳連盟の副会長をしておられた前田浩さんの、兵庫県山岳連盟の機関誌「兵庫山岳」第十八号に寄せられている「故玉井保君を悼む」と題した一文から拝借して、その間の事情を記します。

彼、玉ちゃんは神戸新聞社の事業部員として活躍していた昭和三十一年一月に、神鍋国体のリハーサルに全関西の学生スキー選手権大会を催した折りに神鍋の宿で初めて出会った。そのすぐ後の三月上旬に岳連と神戸新聞社共催で、氷ノ山スキー登山を実施した際に、「スキーは下手ですが北海道生まれなので、何とかついて行きます」というて担当者として同行してくれたのでしたが、たまたま、稜線上で骨折者を出し氷ノ山から春米（つくよね）に収容し、なお一名の事故者が終り近くに出たりして貸切りバスの神戸着が遅くなり、阪神間方面へ帰宅する人のうち数名がどうしても帰れなくなり、灘に住んでいた私の陋屋に何とかざこ寝をして貰ったようなことがあって以来、大変私を信用してくれ、山はやっぱり勝手に行くと危険ですからといって、神戸山岳会に入れて貰いたいという申し出を受け、神戸山岳会の一員としていっしょに何回か山行をともにするようになった。

（以上の文中「私」とあるのは『故前田浩氏』である）

故前田浩氏も述べておられたが、気が強そうで本当は気の弱い、それでいて生一本な人柄が、同年代の者以外の人たちからも「ちゃん」づけで呼ぶのは失礼ではあったが、「玉ちゃん」と愛され、親しまれていた理由かもしれない。

ＫＡＣの会員のなかでは特異な存在であった玉井保さんは、また、特異な、そして壮烈な最後をかざって逝かれてしまった。

安らかに眠られておられることを祈念するのみである。

堀野和子さんと過した
青春の思い出 ―山―

乾　美子（朝倉）

もう今から丁度30年前の春、神戸山岳会がはじめて行った新人募集で私は入会した。それまで一人で六甲のあちこちを歩いていたが、ぼつぼつもっとちがう山へも行きたい、友達も欲しいと思っていたところだったので、ＫＡＣがどんな会かもわからず、とにかくとびついた。

その時入会したのは40人以上いたように思う。女子は私、堀野さんも含めて四、五人だった。彼女の第一印象は、もう大分はきならした〝たかはし〟の登山靴にかっこよくまとめたサブザックと、一人でブラブラハイキングをしていた私なんかより山をやっているなという感じだった。そして、軽い気持で入会した私は、毎日曜日の例会がキツイのにおどろいた。まず思ってもみなかった岩登り、前夜から岩場のテント場に集まり、お酒をくみかわしながらの「山談義」あくる日、早朝から岩登り。帰りは山越。例えば道場なら、六甲の山を越えて芦屋まで歩く。歩きだけの日なら六甲横断往復等、二〇㎞ぐらい軽くこなした。又合宿前は恒例になっていた六甲全縦走と菊水山から北へ尾

根を行く石峯寺往復。それは四〇㎞以上の距離である。今は六甲全縦走も六甲の名物になっているようだが三十年前は、まだまだめずらしく例会にしたのは、ＫＡＣが最初ではないだろうか。朝一番電車で塩屋から登り、足が棒のようになって東六甲についた頃は、日もくれ最後の組、私達女子組が宝塚に着くのは夜八時頃になっていた。

このようなきびしいトレーニングに四～五人いた女の人達も、体力的についていけなくなったり結婚等で一人へり二人へりして三年もたつと残った常連は、堀野、常松(榊)、私ぐらいになってしまった。

私と堀野さんは、同じ年生れ、月も私が二ケ月だけ姉さんというわけでいつのまにか親しくなっていた。アルプスへの山行も、大抵の合宿は一しょだった。毎年行った夏の剱岳、秋の穂高、雨の中二人で登った御岳、但馬の山々のスキーツアーときりがないが、その中でも心に残るのは、はじめての冬山合宿（白馬合宿）である。リーダーは萩原。メンバーは谷口、北出、山本、松本、梅原兄、私、堀野だったと思う。年末から入山し二日かけてやっと天狗原にテントをはったが翌日からもうれつな地吹雪が続き登ることも下ることも出来なくなった。そんな時のテントの中は食べることだけが楽しみである。誰かがいいかげんな味付をしようものなら「ちょっとどいてよ、同じ食べるならおいしいのが食べたいの」となべの前に陣どり神妙な顔をして何度も汁の味をみる。いいかげんな私なんか料理はこうでないといけないのかと思った次第です。又、十一月の富士山、リーダーは大樫。神戸を夜行で発ち翌日は朝から登り、七合目あたりの小屋の前にテントを張ったが夜になるにつれ風は強くなり、カマボコテントの支柱をきしませたがテントの中はそんな風をふきとばすような若さと情熱にあふれたものだった。話は、汽車の中で耳にしたケネディ大統領の暗殺のニュースを中心に政治論から労働問題にまで発展し、いつもは無口な宮永さんが堀野さんと最後まで熱心に議論していた。当時は山のことしか頭になかった私は博識な二人に〝へえ〟と聞きいっていた。その時の二人は今はもういない。

今三月、もう外は春の日差し、しかし山は冬である。春スキーのシーズンです。春スキーの思い出の一つに、五月の連休を利用して行った梅池からレンゲ温泉スキーツアーがある。メンバーは堀野、榊、私。今のようにリフトのない時代、梅池小屋までスキーで一日のコースであった。二日目小屋の誰よりも早く出発し天狗原で休憩、天気もいいし時間も早いと、前の白馬乗鞍に登りシュプールのついていない大きな斜面を頂上から滑ったあの爽快さは今でも忘れられない。そこからレンゲ温泉への下りは谷を一本まちがえたらしく大分下ったところで滝の上に出てしまいこれはどうもおかしいと、天狗原にもどって正しいルートを見つけた時には、とっくに昼をすぎていた。そのあと二日雨にたたられて下山したが、堀野さんは小屋の前の谷を下りる時スキーを折ってしまったのである、そこから雪のない風吹大池までスキー組の私と榊さんが、歩きの堀野さんを待ったおぼえがないのは、私達のスキーの技術のせいだろう。風吹大池でスキーをぬぐと、ふきのとうが雪の間から顔を出し、スキーをかついでぽこぽこ行くと木地屋部落あたりではもう水ばしょうが白い花を咲かせていたのをおぼえている。そういえば、彼女は植物にもくわしく、あの有名な牧野富太郎博士が生前上高地で行った植物観察会に参加したというだけあって、道端の花から上高地の木まで、私が聞く植物の名をたいてい知ってい

る。ただ歩くことしか能のない私は、彼女に感化され草花にも興味を持つようになった。うつぼ草、まつむし草、いわかがみ、おだまき、みな堀野さんが教えてくれた花である。

その後、私は結婚し住いも神戸、大阪、東京、茨城とうつり、彼女や山ともごぶさたになってしまったが、一方堀野さんは、病弱なお母さんをかかえて、外資系会社の秘書としてキャリアウーマンの道を進んでいった。しかし時々電話をかけてきたり、旅行のついでによったりして顔を見せてくれたが、いつも若々しくはつらつとして、子育てに明けくれていた私は、まぶしいような気持でながめていた。

それがある日の夕方、堀野さんからの電話（彼女はいつも夕方のいそがしい時間にかけてくるのである）「ちょっと聞いてよ」と。いつもの会社の上司とのトラブルかと思っていると「もしもし……」と言ったきり電話のむこうから声が聞こえない。「私乳ガンらしいの、もっとくわしく検査してみないとはっきりわからないけれど……」と小さな声。「えっ、まさか！」と私は次の言葉が出なかった。そんな会話から丁度三年、彼女は四十七才の人生を終った。「屋久島へ行こうよ、私が計画をたてるから、いい山があるんだ」と彼女が言った約束をはたさずに……。

最近本を読んでいて目にした言葉に、友の死それは自分の一部を失うこととあった。ああ本当にそうだ！青春を共にした友を失うことがこんなにつらく悲しいとは、私は今でも堀野さんのことを思うとき、目がしらが熱くなる。

〃堀野さん　私達は、青春に悔いなしだったね〃

香地博方君の思い出

岸本光弘

香地博方君との出会いは昭和三十二年頃であった。

当時私は神戸山岳会に入会して間もない新人であり、例会山行では彼と顔を合わすことは少なかったが、物静かな人物であったという印象が残っている。しかし、重荷（ボッカ）のトレーニング例会への出席は少なく、合宿には参加するがよくバテていたようで、他人に迷惑をかけるんやったら神戸山岳会を止めてしまえ、とリーダーからよく大目玉を頂戴していたことを思い出す。しかし、岩登りに関してはなみなみならぬ実力の持ち主であった。その彼との思い出の山行となったのは、昭和三十三年夏の剱岳合宿であった。

合宿の登攀の目的ルートは東大谷G2岩壁であった。G2を目指して六甲の岩場でトレーニングに励む。彼のバランス技術は抜群で、登った場所は必ず下降を要求するのである。また小さなスタンスやホールドを特に好み、バランス登攀を楽しんでいた。

そんな彼のザイルパートナーとなって、真砂平のベースキャンプから朝早く平蔵雪渓をG1隊と登り、平蔵の頭で分かれ私達はG2の下降口へと向かう。残置ハーケンのあるルンゼを見つけ、懸垂でG2の取付きに向かおうと、私が懸垂ザイルをセットしていると、彼はとて

つもないことを言い出した。岸さん、懸垂やめてトップザイルで下降しようや、とあっさりのたまうではないか。私はあっけにとられ、ここは六甲のゲレンデとちゃうで、ここは本場の岩場やで、と。

ルート図には目を通しては来たが、二人とも東大谷に入ったことはなかったのである。始めてのルートではあったが、彼は私より先輩でもあり言うとおりに従うことにする。私はトップで下降させてもらう。

ルンゼの出口はハングしており、右側の壁を下降する。私はビレーザイルのため一気にザイル一パイまで降りてしまう。彼のことも考えず、四〇米の間にはハーケンをセットせずである。彼が無事下降することを願い確保に入る。彼は下降にかかる。上部を通過しあと十五米ほどになって、この時大声で、岸さんここからは下りるのは無理や、と叫んだ。ついに行き詰まったのであった。

大変な出来ごとであり、私はハイ松の根もとにビレーをしっかり取り救助に向かう。悪戦苦闘の末ようやくにして確保点につく。アンザイレンしてからG2の壁を右に回り込むようにして下降していく。その時G1を登っている仲間を見つける。G2のルートを間違うていることを報告し、登れるルートを確認してもらう。今いる場所から登るのがよいとの返事が返ってくる。私達は時間のロスもあって引き返せない状態であり登ることにする。高度差は一〇〇米程である。見た目には容易そうであり登攀準備にかかる。ワンピッチはフェイスで快適に通過する。ツウピッチ目は岩質が逆層になり、ハーケン使用できず慎重に登る。三ピッチはリッジで容易な登りでありG2の頭に出る。登攀終了である。このルートはのちに、G2南面側ルートとして登られているそうである。

香地君と登った思い出のルートでもあり、G2南面側初登攀の記録でもある。その後香地博方君は例会にも顔を見せなくなった。

風のたよりによるところでは他界したとかのことである。当時彼は二十二、二十三歳であった。

紀行・随想

OBの一人ごと

島田文雄

昭和十五年に神戸山岳会が創立されてから早や半世紀、その間には数多くの出来ごとが夢のように過ぎ去った。会の創立のいきさつは片山英一氏が詳細に記しておられます。山岳界の大先輩である故藤木九三先生や、故水野祥太郎博士のご自宅へ、片山英一及び故前田浩の両君等と共に、再三にわたり訪問し、故藤木氏を顧問に、故水野氏を会長にお迎えして神戸山岳会が発足したのでありますが、その頃の事が今でも鮮やかに記憶に残っております。

昭和十六年一月に神戸山岳会の第一回の冬山合宿が赤岳鉱泉をベースにして、硫黄、横、赤岳等に集中登山を行った。合宿に参加したメンバーは、「旧嶺同人」や「旧ほた火の仲間」等の人達でしたが、現在でも健在の片山、馬場君の他の人達は、今頃どうしているのだろうか。

昭和十二年七月に日華事変が勃発、岳友達は軍隊へ召集され始めた。事変が終着しないまま、昭和十六年十二月には遂に太平洋戦争に突入、戦争が熾烈になると共に、戦線へ出征して行く山仲間の人数が増え、淋しくなってしまった。

昭和二十年八月十五日の終戦までの間は、山へ行けるような世情でなく、空白の日が続いた。終戦と共に岳友達もボツボツと戦地から帰還し始めたが、武運つたなく戦場の露と消え、再び共に山へ行く事が出来なくなった岳友の数も少なくない。生活も貧しいながら落付き始め、戦争中に押えられていた山に対する思慕、情熱が一気に爆発したかのように、岳友達は貧しい食料、不完全な装備や服装等を克服して山へ向かって行き、神戸山岳会の黄金時代が続きました。しかし、私は仕事の関係ですっかり山から遠ざかってしまい、会員として申訳なく又肩身の狭い思いを致しました。昭和五十四、五年頃より、やっと自由な時間が持てるようになり、昭和九年頃からの岳友の片山、新川君等の誘いを受け、近畿の山々を歩き始めましたが、既に還暦を過ぎていた私には往年のように、岩や氷の山へ向う体力も気力もなく、ハードな山行は出来なくなりました。しかし、縦走ぐらいは出来るだろうと、毎年信州方面の山へ出かけております。山は昔と変らず時には厳しく、又時には優しく私を迎えてくれますが、変った事といえば、ランプとみそ汁の匂いしか印象に残っていない山小屋に電気が灯り、都会と余り変らない食事がテーブルに並べられ、なん百人も収容出来るマンモスの山小屋が出現し、賑やかな事である（昔のままのランプで静かな小屋もありますが）。又山麓周辺には立派なホテルやモダーンなペンションが建ちならび、観光地に変ってしまっている事は、唯々驚きであります。

半世紀以上経た現在でも、心安くお付合いをして頂いている旧い岳友との友情の絆は、山を通じて結ばれたものであり、生涯かわることはないと思っております。

神戸山岳会には現役、黄金時代の会員、それに筆者の如き七十才台の超OBを含む会ですが、いまでも活発に活動を続けられることは、

全会員が一丸となって山に情熱を傾けている為だと思っています。
会員相互間の和は大切にしなければなりません。山を通じて現役、中堅、ＯＢの会員同志のより親密な連繋を計り、我が神戸山岳会の一層の発展を衷心より願っております。

登山者の健康管理と身体機能

――医師として自己の観察データの紹介――

米澤典之

はじめに

登山の始まりは昭和二十五年夏、二十一才。夜明けと共に信濃四ツ谷駅に着きましたがバスが運休のためそのまま歩き、大雪渓で学友をロープで引っ張りながら日没前に白馬頂上小屋到着。
中年期にはいり始めた昭和四十二年夏、三十八才。学会の帰途ツエルマットに寄りマッターホルンに登りました。スイス山岳会に入会の上ようやくガイドを得て、ヘルンリ小屋から往復十時間、ソルヴエブ小屋上部より息切れ激しくガイドに冷やかされました。
まだ若いつもりの昭和六十一年、五十七才。膝を痛めるほど十分にトレーニングを積んで春山合宿に参加しましたが、コブの頭で顔色が悪いと心配をかけました。
こういったことから心肺機能の劣化を疑い、某スポーツセンターを訪れました。安静並びにマスター負荷心電図正常、肺機能正常でしたが、トレッドミル負荷は年齢＋九〇／一五〇と心拍数増多の理由で納得する前に中止されました。この時自覚的苦痛は全くありませんでしたので、平成元年春山合宿前のトレーニング中この問題を再検討しました。
その概要を如何に述べてみます。

肺　機　能

呼気力を示す一秒率は一一九％と正常。酸素を取り込む能力を示す％肺活量は八二％とやや低値ながらも正常範囲にあります。これでは息切れする筈はないのですが％肺活量を計算する因子には肺活量、年齢、性別、身長しか加味されず、体重、赤血球数、色血素量、心疾患の有無は除外されております。体重のみを加味して再検討しますに私の体重は七七kg、身長一六三cm、肥満度四五％です。この体重を標準体重とみなすには年齢、統計、計算法により異なりますが身長一七八～一八六cmを要します。仮に中央値の一八二cmとして％肺活量を再計算しますと七六％、更に年齢を五十才としてみれば七〇％と異常低値で拘束性障害を示します。拘束性肺機能障害の原因は種々ありますが私の場合は、肥満性横隔膜挙上による胸郭縮少と考えられます。登山を続けるには体重を減らす必要がありますが、ダイエットすれば（受け持っている）患者さんの感冒に感染します。機能性食品や高脂血症治療剤の応用も奏効せず、トレーニングも膝の故障で限界があります。禁煙しながら職業上のストレスに耐え、体重を減らすためには鉄の如き意志が求められます。

外傷性膝関節炎

永年の山行と焦ったトレーニングのため右膝を悪くしました。安静時でも痛みますのでスポーツ障害五度に相当し、黒部の下の廊下ではシビレと変わり、谷足を眼で確かめねば進めませんでした。X線写真では骨は変形しておりませんが、半月板内側が摩耗しています。整形外科医は減量と共に登山をやめて水泳をするよう指示されましたが、消炎鎮痛剤使用と慎重な下りでクリアーしたいと思っております。

心電図

安静並びに負荷心電図は正常ですので、ホルター心電計を装着して登山時の状況を再現しました。ホルター心電計は小型且つ軽量で二四時間以上連続記録できます。ただし磁気記録ですからホストコンピューターで圧縮乃至拡大心電図に再生する必要があります。これにより得られる情報は心電図連続波型、一時間毎の総心拍数、最大・最少・中央値、不整脈数、心筋への酸素供給状態を示すSTの上昇や下降等です。

トレーニングと登山における身体機能

自宅近くの栂尾山の通称四百階段（高度差六四米）を空荷で上り七分三〇秒、下り四分三〇秒のペースで五往復以内は自覚症状並びに心電図波型には何らの異常も認めませんでした。ペースを早め上り五分三〇秒にしますと三回目の登りから心拍数一五〇を越え息切れと共に上室性期外収縮を主とする頻脈性不整脈が出現し、四回目の登りからペースを遅くしますと心拍数一一〇以下で息切れや不整脈は速やかに消失しました。

次に日をかえ一八kgのザックで荷重し息切れしないように上り平均一二分一二秒、下りは膝を保護するために六分四五秒で前述の階段を一〇往復し、続いて栂尾山、横尾山、馬の背、東山まで往復しました。軽食のための休憩二〇分を含む総所要時間五時間一〇分、最多心拍数平均一三一、最少心拍数平均九四、中央値平均一一〇と安定し、特筆すべき不整脈やST変化は認められませんでした。なお靴はコフラックを用い、前述の空荷と後述する富士山ではローバーのスーパーアルピンを履きました。

富士登山における身体データ

更に高所、即ち酸素濃度の影響を検討するため富士山に登って診てきました。新幹線新富士駅にてタクシーに乗る直前よりホルター心電計を作動させ、新五合からは絶対に息切れしないペースで登り、八合小屋で四時間二五分の休憩仮眠後頂上～お鉢回り～富士宮口下降～新五合へと帰りました。実行動時間一二時間三〇分はあまりにもスローペースと批判されると思いますが、実は消化器疾患で十日間入院した直後のブッツケ本番で、しかも行動中頻回な下痢に悩まされ、紅茶以外なにも摂取できなかったせいもありました。さてデータはシュラフ、アイゼンを含む平均荷重七kgで登りの最多心拍数一二五、最少八五、中央値一一〇と極めて安定し、下降時にはそれぞれ一〇ほど少なくなっています。八合目での睡眠中は最多一〇一、最少六四、中央値七八と高度の影響は全くみられず、また最高峰で強制的に喫煙二本しましたが変化はありませんでした。STの変化も同様にありませんでし

た。下降時九合目の雪渓を横断する際落石がありましたので走ったり、石車でスリップした際一時的に急増した心拍もその都度速やかに回復しております。戻りの速やかなことは栂尾山四百階段でのトライアルにも共通しておりますが、これは網膜動脈硬化があるにせよ、血圧や血清生化学的データに対し充分な注意と管理を行い、加うるに不可逆的変化に陥る前に行動を抑制したためと思われます。唯この富士登山中一瞬ながら不整脈が二回出現しております。

最初は新富士駅からタクシーに乗り新五合までの料金を尋ねたときで、所謂三段脈が七連発しております。予想より高値だったため、一時間待ってもバスに乗ればよかったかと後悔したためでしょうか。「金は命よりも大切」とはこんな事を申すのかもしれません。今一回は新五合直前で石車に乗り大勢の人前で転倒し赤面した時です。換言すれば登山中如何に平常心を保つかの大切さを立証したともいえます。

（この欄は平成元年七月二十二日実施）

おわりに

心肺機能、殊に心臓機能の障害はしばしば登山者を窮地に陥らせることがあります。しかしこういった検査診断には、なお高度な技術、方法が数多くありますが、私の場合、今後とも山行を続けるためにある程度の検査段階まで行ってきました。本業が医師でもありまずはこれで自己管理が可能であると判断できたからであります。結論は簡単です。日常の健康管理と共に山行中如何なる状況に遭遇するとも、平常心を保ちマイペースで粘ることです。

平成元年盛夏から晩秋にかけ、単独で大峰山系へ十回はいりました。時には厳しく或は優しく迎えてくれた稜線の紅葉が、たちまちのうちに山を駆け下って谷底までの全山を染め、落葉したブナの幹の美しさも改めて知りました。五十年を越えんとする神戸山岳会の歴史の重みを噛み締めながら、剱岳で急逝された故前田浩先輩を偲んで、還暦をすぎたＯＢ会員が試みた実験データと感想を紹介させてもらいました。

岩登りに思う

古賀英年

岩場に向い合った時の心地良い精神の高揚。ともすれば、岩壁に踏み潰されそうになる気持ちを押え岩に触れる。そして重力に逆らい体を引き上げる。すると、今まで心の片隅にあった一抹の不安がさっと消え岩の中に同化していく。こんな魅力にとりつかれ、早や二十年の歳月が流れようとしている。

十五才の秋。それまで、ボーイスカウトで野外活動の楽しさを経験していたものの、何かしら満足しきれず、退会して一人で山へ行きだした頃の事。その日も一人で六甲山にキャンプに出かけた。途中、友人の下宿するお寺に立ち寄る。そしてこのお寺での出会いが、人生を大きく変えることになった。内藤先輩との出会いである。大きなザックを背負った私に「中学生か？中学生が一人で山に行ったらあかん。山へ行くんやったら、内の会へ入れ」。土曜の昼下り、明るい陽ざしの

なかで解放感を求めて山に入ろうとした時のことだけに、今でも鮮明に覚えている一コマである。また、アルプスの写真を眺めながら、何時の日にか、本当のアルプスをこの目で見に行こうと、純粋に憧れを抱いてはいたものの、山岳会のことすら全く知識に無かった。

驚きや嬉しさが交差するなかで、明るく、逞しく映る先輩に、何の不安もなく誘れるまま、神戸山岳会に入会し、間も無く保塁岩で岩登りの手解きを受けることになる。ただ、学生の身では、高価な登攀具など手に入る筈もなく、道具を調達するには一方ならぬ苦労をした。家の内を物色し、使えそうなロープ、大工道具の金槌にビニールテープを巻いたハンマー、工事用のヘルメットに先輩から頂載した鉄のカラビナと、どれも粗末な代物であったが、何んとか、それらしい出で立ちで岩場に通った。そして、初めての北アルプス行きの時が来た。

夏山合宿として組まれたこの山行は、A班・登攀パーティー、B班・縦走パーティーと、二隊に分かれての剱岳入山であった。B班として参加させてもらった私は、千寿ガ原—大日岳—剱沢—長次郎と縦走し、三ノ窓のベースキャンプに入った。三ノ窓では、本峰往復、剱尾根上半～八ツ峰上半を歩き、周辺の概念を教えられた。又登攀に向う先輩のクライマー姿や、チンネ、池ノ谷の雄姿は、登攀の夢を大きく脹らませ、増々岩登りの魅力に引きずり込んでいった。

合宿が終わり、あの池ノ谷の側壁の圧迫感から逃れるかの様に、様々な場面を想定したトレーニングが始まった。岩登りの技術書を読みあさり、ゲレンデで技術を体得し、登攀具も使い易い様に改良し、暇さえあれば、近所の石垣を登った。

そして一年後、黒部丸山東壁に挑んだ。ルートは、中央壁で最初にトレースされた縁ルートである。人工ルートで単調なアブミの掛け替えだけのルートであるものの、ボルトとボルトの間隔が非常に遠く、アブミの最上段に乗っても、なかなか次のボルトに手が届かない、と聞き及んでいたので、可成りのアルバイトを覚悟で取り付いた。しかし意に反して、登攀は快調なペースで進み、上部のハング帯も難なく越え、終了点に踊り出た。上部の垂直のブッシュ帯を出た所で、左岩稜のパーティーと合流、日没の近づく丸山の頂上より下降を開始。しかし、夕闇は、あっというまに、心許無い踏み跡を掻き消し、ついに岩壁の上部に迷い出てしまった。闇の中に、奈落の底が大きな口を開け、とても下降できそうにない。しかたなく、下降を断念し、ビバークを決断する。垂壁に、真横に張り出した木に股がり、ザイルで体を固定し、着のみ着のままで、ビバークに入った。苦しい体勢で、まんじりともせず、夜の明けるのを待った。夜明けとともに、頂上に登り返し、踏み跡を頼りに、丸山の基部へ下った。

その後、幾度となく、予想外な場面に出くわした。初めて行った、奥鐘山西壁では、小雨のなか、血気盛んに、ノーザイルでワンピッチ目を登り出したが、先行するパートナーのスリップに巻き込まれ、二人共、黒部川に頭まで漬ってしまった。「どうせ、雨が降っているのだ」と、気にもせず、再度、壁に取付いたものの、途中より雨は、土砂降りになり、壁一面が大きな川となり、オーバーハングの出口は、滝と化し、そのなかを、寒さに震えながら越え、あたかも、水に打たれる行者のごとく、身も心も洗れ、つくづく自分の浅はかさを感じさせられた。

また、ある時は、ユマーリングをしようと、上部支点より、斜めに

垂れたザイルにユマールをセットし、テラスより空中に飛び出した。体は、大きな振り子の様に空を切って、反対側のオーバーハングの庇の下に、スッポリと入り込んでしまった。一杯に延びきったザイルは、庇のなかへ、体を完全に押し付け、どう腕いても、脱出できない。幸い、テラスの支点に通した、ザイルの末端を身に付けていたので、これを引き、かろうじて、ハングから脱出したがザイルの末端を体に結んでいなければ、自分のザイルを切るしかなく、体から、血の気の引く思いをした。

こうして、長年の間に、幾度となく悲惨な思いや、スランプにも陥ったが、一度として、岩登りを止めようと思ったことはなかった。また、ある時期に冬の寒空のなか、五米ほどのボルダーに、たった一本のラインを描く為、毎夜ランタン片手に、ひとり北山公園に通いつめた。ランタンの明りに写し出された岩肌に、全神経を集中させ、岩の結晶に爪をたてる。クライミングシューズの先は、ヤスリで擦った様に、あっという間にすり減り、指先からは血がにじんだ。そのうち、「このラインは登れるのか」と疑問と、諦めの念が渦巻きはじめた。春の日、ついに一本のラインが完成した。たった五米を登るのに、ひと冬中北山公園に通ったのであるが、岩の上に、はい出た時のあの感慨は、今も、新鮮に心のなかに残っている。そして今、過去の登攀の数々を振り返りながら、しみじみ思う。何故、こんなに、岩登りに夢中になってきたのかと——。

むかしとは、比較にならないほど、技術も、レベルも高くなり、また、スポーツの一分野として、岩登りが、注目されている現在、自分は、何を求め、これから岩壁に向い合っていくのだろうかと——。過去の郷愁を引きずっても、あの三ノ窓での感動や、岩登りを初めた頃の、何もかもが新鮮な気持ちにはもどれないが、自然の中に居る事が大好きな自分なのだから、現在の登り方や考え方に捉われない、自分自身の岩登りをしていこう。人知れず喧噪のない山あいに、新たな岩壁を捜し、気のおけない仲間と、気おいなく、心静かに岩と対話しに行こう。そして、岩壁を抜け出た時のあの感動と、仲間と酌み交わす最高の酒を味わうために、さあトレーニングにはげもう。

東北の山脈

幸内義孝

十年程前、H氏に連れられて、越後三山へいったのが初めての東北方面の山でした。第一印象は北アルプスとはひと味ちがうという感じでした。山々をみた時に感じたのはコル、コルがすぱっと切れ落ちていて、沢は下の方まで一枚岩のようなスラブで、初めてこの風景に接したときの強い印象は、いまだに忘れられません。

それから二、三年後、東北はきっと涼しいだろうと大阪を出たのは、昭和五十九年七月二十七日のことでした。

坂町でローカル線に乗り換える。車窓からは昔みた、というような感じのなつかしい風景がうつり変わっていく。列車の中は扇風機をうるさく回しながら、窓を開け放って走るところはいかにも、田舎、と

いう感じでした。やはり日本の夏は東北でも暑いことには変わりはないと、妙なところで感心しながら、ゆられゆられてようやく左沢（あてりさわ）駅についたのは、午後三時をすぎていてもうバスの便はない。電話でタクシーに来てもらい、ようやく朝日鉱泉に着いたのは五時。大阪をたってまる一日、二十八日の夜は山に登れずここで一泊することになりました。

翌二十九日、鳥原山へ登る途中はトンボの大群です。指を差し出すとナント指先に止まるのです。人間ずれしていないのが何とも愛らしくうれしいのです。ワーッと感嘆の一言だ。次から次へと何故か同じ方に向かって前や後ろを通り過ぎていく。その中には、体や、ザックに止まって、羽を休めているのもいる。すぐ、子供にかえってそっと指先でつまむ。捕まえてはまた逃がしてやりながら鳥原山を越える。

鳥原山を過ぎると低木だけの世界となった。空は雲ひとつなく快晴である。だが暑い暑い。小朝日岳頂上では、呼吸が荒く、心臓の鼓動が早くなって日射病のけはいがする。少し下がった谷すじで谷風を受けて休むと少しは元気をとりもどし、ゆっくり歩いてやがて銀玉水の水場に着く。稜線上なのに、滝のように流れ落ちているところへ頭を出して、ザーザーと水をかぶるといっきに元気回復であった。

銀玉水から少し登ると雪渓があってお花畑。ハクサンイチゲ、チングルマ、いちばん目についたのは紫色の大きな花、マツムシ草だ。まだそんなに高くは登っていないのに、アルプスなみのお花畑だった。大朝日岳に登り金玉水でテントを張る。

あたりにはゴミもなく、水場はすぐそば、張られたテントも少ないし、見上げれば満天の星空。その上お金もいらないテント場での一夜は素晴らしい。夜の更けるのも忘れ、いつまでも星を眺めながら静けさの中にひたりきっているうち、いつしか寝入ってしまった。

あくる三十日、テント場から以東岳までのタンタンとした稜線は、北アルプスのような男らしさはないが、どこまでも、どこまでも峰が続いているように思える。しかも稜線にもかかわらず水は豊富に得られるのは有難い。ピクニック気分で歩くうち今日もトンボの群れにかこまれる。トンボの進む方へ歩いているのか、私の行く方へトンボがついてくるのか、無数のトンボが同じ方向へ向かって飛んでいるのは不思議に思う。リーダーはいるのだろうか、いるとすればどれがリーダーなんだろうかと疑問を感じた。

以東岳につくと、眼下に大鳥池が大きく見える。何んだか神秘的な感じがした。大鳥池湖畔でテントを張る。

今夜はテントのまわりをホタルが乱舞する。星とホタル、何んと情緒があるのだろう。また子供にかえってホタルを捕獲する。平家ボタルである。テントは私達を含め三つ程で静かな夜を過ごす。

八月一日、イワナを釣る人を横目で見ながら下山する。この山に来て良かったとの思いが東北の山旅の印象でした。

とても低い山にもかかわらず雪渓は多く残っているし、水は豊かでしかもテント場と水場がすごく近い。人々の会話も何となくおっとりしている。お花畑で昼寝もできるいい感じの山でした。あの人なつっこいトンボは、八月上旬頃から山から里へ降りていくということでした。やはり群れをなして飛びまわっていることでしょう。

初めての東北の山旅で聞いた尾瀬の平ガ岳、朝日岳、飯豊山の話しに魅せられて、それから毎年一回は東北へ足を向けた。

五月の尾瀬は、スキーには最高です。飯豊山、早池山、磐梯山、鳥海山、月山にも行きました。どの山にも一つ一つの強い特徴があって面白く感じました。

これからは自然のフィールドの楽しさを、たくさんの人達に教えられたらと思っています。

一九八七年
剱岳春の合宿に参加して

佐久本　嘉一

今年は例年になく雪が少ないらしい。岸本さんによると、こんなことは初めてだという。

われわれB班はリーダーが岸本さん、以下堀田、小田、平木、中本、そして私の六名で、池ノ谷から三ノ窓を経て本峰を越え、剱沢へ下ってA・C班と合流する計画で入山した。

五月三日　雨。

計画では、夕方にはA班と三ノ窓で合流の予定であったが……

馬場島でタクシーをおりて池ノ谷を目指して出発。歩き始めるとすぐに雨が降ってきた。雪解け水で水量はかなり多い。白萩川を左岸から浅瀬を選んで渡ったが水は冷たく足が痛い。さらに二〇～三〇分も歩いた頃ようやく雪渓の末端に着いたが、スパット切れ落ちているため取付くことができず、あきらめて少し引き返して高捲をすることになる。苦手なヤブ漕ぎを続けてやっと雪渓の上にあがった。

今日はかなりのロス・タイムである。そろそろA班との交信時間なので（午後一時）無線機のスイッチを入れる。すぐに吉田さんの声が入ったので、こちらから呼びかけるが応答なし。とにかくA班が三ノ窓にいることだけは確かのようだ。

B班はゴルジュでテントを張る。今日は一日中雨だったので靴の中はグチョグチョ。テントの中はビショビショという最悪の条件だったが、一杯やると元気が出てきて、夕食は昔話（？）に花が咲く。

五月四日　晴

朝、テントから出ると新雪が一〇センチくらい積もっていたが、本日は晴天なり。

時折岩から剝がれ落ちるカラッカラッという氷の音、ドォーンと雪渓の切れる音が聞こえるだけで、池ノ谷は実に静かである。他に池ノ谷に入っているパーティもなく、疲れてはいるが心が洗われるようで気分は最高である。

高度が上がるにつれ雪が締まってきたのでアイゼンを付ける。キックステップで確実に高度を稼ぐ感じはなかなかいいものである。

三ノ窓に着いた頃には日は傾いていた。運よくA班がテントを張っていたと思われる跡があり、少し手直しするだけで素早くテントが張れた。濡れたシュラフをテントの上で乾かしながら夕食の支度にかかる。食後剱沢で合流しているA・C班と交信ができたときは全員感激して一体感を覚えた。現状報告をする岸本さんの声も少し興奮気味だったように思えた。無線機からはA・C班が宴会をしているような会

話が聞きとれる。こちらはほんの少し残っていたウイスキーを紅茶に混ぜて、飲んだつもりになって早々に寝ることになる。

古賀さんの指示で、明日は大事をとって本峰を外してルート変更、長次郎雪渓経由で剱沢入りとなった。

五月五日 曇。

早朝〃オイ、起きろ！〃という岸本さんの声で全員が、シュラフの中から跳ね上がった。少し寝過ごしたようだ。素早く朝食をすませてパッキングをして、さあ、出発だ。

昨日の疲れが残っていて頭の中はまだボーとしていたが、いきなりの池ノ谷のガリーの登りで眼が覚めた。かなりの急登なので、ここで滑ってはたまらない。一歩一歩確実にステップを踏みながら、やっとの思いで登りきった。ふり向くとガスっていて何も見えない。長次郎の下りでは足どりも軽く、と行きたいところだがヒザが笑ってしまった。

剱沢で我々を待っていてくれたA班と合流した頃には疲労困憊で、皆んなよりかなり遅れをとったが、何とかついて行き無事に室堂に着いた。

三日間の合宿でしたが毎日天候が変わり、貴重な体験をしたと思います。

神戸山岳会に入会して

青谷晋行

私が神戸山岳会に入会させて頂いてから、早くも三年が過ぎ去ってしまいましたが、この三年間における私の山行の思い出と言いますと数限りなくあります。その中でも大変印象に残っているものは、何と言っても、入会して初めての冬合宿〃槍ガ岳〃であります。その次にと思い出せば、何と言っても冬の北鎌が今でも、つい昨日、山から帰って来たかの如く、心の中に思い出として残っています。合宿をはじめ少人数のパーティでの山行や、又個人山行。とにかく、山へ行けば行く程、山というものが私をどんどんひきつけてゆくかのようで、山から帰り、ホッとひと息つくと、すぐ又、次はあの山へ行きたいなあと、気がついた時には地形図を広げている始末です。

私は山と同じくらい大好きな仕事の関係上、なかなか思うように他の方々とパーティを組めないのが残念なところでもあるのですが、やっぱり、山という所は一人の時でも、二人の時でも、山頂に無事に立てた時の感激というものは、自分個人としては同じだと思います。只、個人山行の場合、装備の重さや気象判断、ルートファインディングや技術の面で多くの問題がありますが、それはそれで、人それぞれ、歩き方やスピードも違いますが、とにかく、自分なりに最良の方法で事

故なく無事に登り、山を下り、わが家にたどり着いた時こそ、その山行が成功した事でもあり、又、充実感に浸る事が出来ます。

そもそも、遭難というものは、道に迷い、山中から脱出する事が出来ない状態の事だけではなく、山中において、身体の調子を悪くしたり、少しの傷をおっても、それは遭難に直接、つながらなくても、遭難にたどりつくまでの第一歩と私は確信しています。手袋を風に飛ばされれば当然、凍傷となり、又、それが原因でかつ落したり、靴の手入れをしないまま山へ入り、靴ずれが起き、又、それにより、大事故につながる時もあると思います。ですから、いかに安全な登山が出来るかは、日頃のトレーニングはもとより、ザックをかついで、靴に足を入れ、家の玄関を出る瞬間から決まるものだと私は、いつも思っております。山に入り、下りるまでは、何から何まで自分の責任で成しとげなければならない、これは、一人でも十人のパーティでも、一人一人が自覚しておくべき事だと思います。人数が増えれば増える程、お互いのコミュニケーションを大切にし、いったい後に続く者はどうしているのかなど、自分の事の次に気を配りたいものです。それらは、自分の事が十二分に出来てこそ他の事にも目や耳が向けられるのであり、それがため、単独行は、登山の原点だと思います。いざバテても、誰も、自分の代わりには、歩いてもらえないものであり、誰も助けには来てくれない。天と地の境い目を歩くというスポーツ。これほど、刺激的で、感動の多いスポーツは他にあるだろうか。自分の生きるという中にあるところの可能性の輪をもっと広げてゆきたい。

私が山にとりつかれたのはＫＡＣに入会する年の夏、大の友人と二人で槍から穂高を歩いたのがそもそものきっかけであります。あの時の感激が火種となり、この三年間で、数多くの山が、今もこうしてペンを取っている間にも、私の心の中で燃え続けています。ちょっとやそっと水をかけた位では消えないでしょう。逆にこれからは、もっともっといろんな新しいものを燃やしてゆきたいです。と言いましても、冒険的な事はさておき、常に初心を忘れず、基礎をもう一度見直し、新たな、一歩へと踏み出したいものです。

そして、山中において少なくとも土に感謝し、川の水にも感謝し、又、草や花にも一言、あいさつをかわし、空気にも感謝し、何といっても、山行中、下界で待ちに待っている人々にも感謝をするべき必要性はあると思います。それに、一回、一回の山行を常に大切にしてゆきたいものです。山から帰り、反省をしていると必ず、次回の山行において課題が出てくるものですし、やはり、山は経験を積んでゆくしかないと思います。私もまだまだ未熟ではありますが、今後、出来る限り多くの人と、多くの山行をしてゆきたいのはもちろんでありますし、もっと例会にも行けるように日々、努力をしていきたいと願っております。

神戸山岳会に入会して

岩崎里美

〝登山〟は究極の遊びだと言われるけれど、私も本当にそうだと思

う。今までいろんなスポーツをしてきましたが、これほど、自分の生活に入りこんでしまったものはない。持てる限りの体力、技術、適正な判断力を必要とし、それらが全て命にかかわってくる。また、その人なりの人間性が裏表なくあらわれてくる点で、人とのつきあいにしても、一般の人とのそれとは違ったものになってくる。

私はＫＡＣに入って二年たちましたが、幸運なことに、登山を通じて、私のいろんな力を引き出して下さったことに、とても感謝しています。入るまでは、夢のようなことが多かったのに、それが今、現実に実行できていることに、驚きを感じます。これも、今まで私を支えて下さった多くの先輩や仲間の皆さんのおかげだと思っています。

心に残る山行は、たくさんありますが、中でも、初めて会の山行に参加した八十八年の一月、八ガ岳のアイスクライミングが、とても楽しかった。冬山の装備もろくにそろえていなかったのですが、国沢さんにすべてお借りし、テント生活も初めての私に、いろいろと親切に教えていただき、新人の私には、山の楽しさを充分味わうことのできた山行でした。

それから、それとは全く違った厳しい山行として八十八年の穂高登攀の夏合宿も忘れられません。本番の岩登りも、一週間フルに行動するのも初めてで、苦しい思いの方が多かったですが、それだけに、登り切ったあとの充実感は、今まで得ることのなかったものでした。

山に登っていると一度は、なんでこんなしんどい目をしているんだろうとか、なぜこんな悲惨な目に合うのだろうと思うのですが、おりると、やっぱりよかったなと思います。これからも、自分の好きな山を、登っていきたいと思います。

神戸山岳会に入会して

竹内省吾

昭和六十一年に正式に入会させていただきました。私は学生時代に関東で社会人山岳会に所属しており、就職で帰神しました。神戸でも山のパートナーが欲しいと思い岳連で紹介してもらったのです。

入会して驚いたことは会員の年齢と職種が多彩なことです。前の会では、現役は二十代から三十代で、ＯＢも四十才、職業は会社員かビルの窓ふきがほとんどだったからです。それに比べ神戸山岳会は下は十代から七十才代までが今も山行しているし、先生、医師、主婦の方と職も実にさまざまです。これだけ幅広い人達と利害なく話しができるだけでも貴重な経験です。今までの私の山行は単調で、○×ルートを何時間で登ったとか、継続登攀や難易度にしか興味がありませんでした。伝統ある神戸山岳会に入会させてもらって多くの人と接するうちに『山行の幅を拡げてもっと山を楽しみたい』と今は思ってます。

基調テーマである「思い出の山行」や、秘かに「記録に残しておきたい山行」もあります。しかし、入会してから年数も浅く、とても記念会報に載せてもらうような山行はしておりません。

これから先、自分なりに山を『真面目かつ充分に楽しんで』本当に「懐かしい思い出に残る山行」を会員と実践してゆきたいと思ってい

ます。その時はもう一ページは多く書くつもりでいます。

神戸山岳会に入会して

吉田典夫

私が神戸山岳会に入会させてもらって、はやいもので九年。ひょんなことから野上さんとお知りあいになり、岩登りの例会に連れて行ってもらったのがそもそもの出会いでした。

岩登りがふしぎと性にあっていたのか、今日まで会員の皆さんに御世話になりながら、楽しくやってこられたと思います。

ここ一年位、仕事の関係でとんとごぶさたしておりますが、時間の許すかぎり山へいきたいとおもっています。

年齢、学歴、性別、仕事などの肩書ぬきで、山が好きだという点で皆平等の社会はいまどきそうざらには見当たりませんね。

入会したてのころは体力がなくて、ずいぶん悔しい思いをしました。たしか最初の夏合宿で奥又白への登りでバテてしまい、登攀どころではなかったのを覚えています。

その年の九月、屏風1ルンゼのときもさんざんでした。

まず体力がないとお話にならないと思い自分なりに工夫しました。登攀だけでなく縦走、山スキー、冬山、沢登りとなんでもオールシーズンよくいきました。今、その時の記録や写真をひっぱりだして見ながらこれを書いているのですが、どの山行もそれぞれに楽しかったですね。

昭和五十七年小西君が宝剣岳で遭難死し、五月に捜索に行った時の金属探知器をめぐっての星野さんと岡田君の会話。思い出しただけでふきだしてしまいそうです。岡田君はどうしてるのかなあ。駒ケ根駅の壁登りもおもしろかったなあ。

昭和五十八年九月滝谷を下からつめた時は、広池君と岩の弱点を巧みに避けてばかりで小林さんたちをイライラさせてしまった。岩の技術はさることながらガレ場の歩き方、ザイルのフィックス、ルートファインディングなど総合力の必要性を感じた山行でした。

昭和五十九年一月、小林さんたちと富士山へいった時の突風。ツエルトがやぶれてデポしていたものが吹き飛ばされて、僕以外みんな貧乏になってしまった。幸いなことに命は飛ばされませんでしたが。

昭和六十年五月、小窓尾根は天気も良く、はじめて雪洞で寝る。剱岳西面を岸本さんに案内してもらう。また、三ノ窓での雪上訓練は後々たいへん役立ちました。

昭和六十一年夏、黒部上の廊下・黒部川源流はたいへん印象に残る楽しいものでした。なんといっても水がきれい。

この年の冬と六十三年末の槍ガ岳中崎尾根合宿。この頃から今の新しいメンバーが登場してくる。新人のレベル向上に主眼をおいて岩を中心に例会がくまれる。

昭和六十二年夏の屏風岩では芝君と組んで登る。

この他にも但馬の山々踏査のおもいでや、小豆島ダイレクトルートでポンをうったこと、御在所中尾根バットレスなどなどおもしろいことはたくさんありました。

いっしょにザイルを組んでくれた仲間のみなさん、先輩の方々、今後ともよろしく。

神戸山岳会に入会して

月脚祐子

高校の時から、なんとなく山に魅かれていた。テレビなどで山での遭難事故など報道されると、親に「大学に入ったら好きなことしていいけど山岳部にだけは入ったらだめよ」と耳にたこができるほど言われていたのだが、今、私はそのたった一つだめと言われた山岳会に入っている。

この神戸山岳会には学生は今のところ私一人だけで少し寂しくもあるが、最近、大学などの山岳部でも部員不足で悩んでいるそうだ。

私は、大学に入って学校の山岳部に入ろうと思ったが、うちの大学も例にもれず、部員不足でほとんど廃部状態だった。ワンダーホーゲル同好会というのもあり、そちらは部員は十人くらいいるらしかったが、ほとんど活動していなかった。登山がしたい。近くの山でもいいから行きたい。ずっとそう思っていたが、周りに山登りに一緒に行ってくれそうな人も見付からないまま、だんだんと焦りを感じていた時、「山と渓谷」という雑誌を見つけた。そのような山の雑誌の存在すら知らなかった私にとってそれはとても新鮮で引きつけられた。その中に会員募集のコーナーがあり、関西のクラブのいくつかに電話してみたり手紙を書いたりして、結局、神戸にあり、若い人も多いということでこの神戸山岳会に決めた。

それまで登山とはハイキングのように歩くことしか知らなかったが、岩登り、沢登り、雪山などいろいろあることを知った。いきなり一番最初に行った例会が岩登りで、テレビで見たことはあったが、まさか自分にも出来ることとは思ってなかったから、初めて登れた時は、感動した。

山岳会では、日常生活で味わうことのできない刺激や感動が味わえる。苦痛・恐怖感など平和な大学生活にはほとんどないものだが、このスパイスのような感覚を味わうことが出来て私はとても幸せと思う。たいくつで何もないより絶対におもしろい。わざわざ好きこのんで苦しい思いをすることないという人も多いが、今の私にはこのスパイスのような登山はなくてはならないものになってきているような気がする。

神戸山岳会に入会して

寺川喜美

私は去年の六月末に入会したばかりで、改めてふり返る程の山歴もないが、山とつきあいはじめた一年目を、この原稿を書きながら、ふ

り返ってみようと思う。

私が最初に自分から山に登ろうと思いついたのは、中学二年の時だった。学校の友人二人と鈴鹿の御在所山へ登る計画を立て、五月の連休に行ったのである。快晴の下、山頂からは遠く伊勢湾まで見渡せたことを憶えている。その後、幾度か、近くの低山を歩いたりしていたが、その内だんだんと登らなくなってしまった。高校を卒業し大学生になり、オフロードバイクで乗鞍スーパー林道を走っていた時、目前に槍ガ岳を見て、「ああ、あれが槍か」とえらく感動して、また山登りをはじめたのである。

その内、夏と秋の年二回の山行では飽き足らなくなり、冬山にも登りたくなってきた。しかし素人仲間で登っていては、いつまで経っても冬山には行けないので社会人になったら山岳会に入ることに決めた。

神戸山岳会は、三ノ宮のスポーツ店で紹介してもらい、まずは集会を見学させてもらった。しかし、その時は入会するふん切りがつかず試しに次の例会に参加してみることにした。例会は〝こうもり谷・人工〟ということであったが、〝人工〟の意味もわからぬまま、私はこうもり谷へ行った。そこでは、〝アブミ〟なるものを使って何人かが壁を登っていた。私は「ああいうハシゴを使うから人工というのか」なんて思いながら、ぼーと見ていた。その内、松本さんが登攀用具を貸してくれ、登ってみたが、無茶苦茶苦しいばかりで何も面白くない。一本で終りにしようと思ったが、松本さんのやさし気でありながらじわりと強い押しにあって、結局三本程登らされた。例会の最後に、来週の雪彦の例会に参加する者の確認をとったのであるが、十人程が一勢に手を上げ、私もつられて上げてしまっていた。

――こうして私は、勢いで入会してしまったのです。――

入会してからの山行、夏合宿、冬合宿、また例会や個人山行を通して山に対して二つのことが変ったように思われる。一つは山の世界が大きく広がったことである。今までは小屋泊りの夏山縦走だけであったのが、テント泊の長期縦走、岩登り、沢登り、雪山といろんな楽しみ方を知った。剱岳から薬師岳まで縦走した夏山合宿では、はじめてのテントをかついでの山行ということで不安はあったが、何とかバテずに歩けたことは、自分が歩けるという発見は大きな収獲であった。秋の北鎌尾根は、昔からのあこがれのルートではあったが、バリエーションルートでもあり、今年は行けないだろうと思っていたが、連れていってもらうことができ、今年一番の満足のいく山行になった。また冬合宿では冬山の厳しい中にも遠慮なしに山とつきあっているようで気持ちがよかった。

もう一つの変化は、山に対する考え方が少し変ったことである。以前は景色を楽しめるという外面的な要素が強かったのであるが、今では、内面的な発見のおもしろさとでもいえるもの、つまり、これが自分の限界だと思っていたものが、実は自分が勝手に思い込んでいたもので本当はもう少し頑張れるということや、日常生活では置かれないであろう状況下での自分の対処の仕方など、自分でもわからない自分のことを少し覗くことができるという面白さが加わってきた。実力が伴っていない新人がいうのも口はばったいが、山登りは何か趣味とは

いえないものがあるように思うようになってきた。

最後に、これからは、人に連れていってもらうのではなく、自分で計画を立て、実行できるようになりたい。また、ただルートにあこがれるだけでなく、行きたいなら行けるだけの力をつけることを考えてゆきたいと思う。

入会当時の思い出

金田順子

神戸山岳会の会員となって、例会や合宿に参加していた期間より、集会にも出席できずKACだよりを羨しく眺めている年月の方が長くなってしまったこの頃、また山へ行けるかさえ定かでないせいか、益々〝山〟が恋しい存在となりました。私が、神戸山岳会に入会したのは、昭和六十一年の六月、今から約四年前のことです。神戸山岳会の存在については、兵庫県山岳連盟を通じて、その数年前から知っていましたが、その昔から活発・旺盛なる活動ぶりで、女・子どもの入れるような会ではないという印象を強く受けていました。岳連の山登り教室で講習を受け、初めて岩登りなるものに挑戦したのが、比良山の奥の深谷でした。確か、人工岩場での練習には参加できずに、いきなり本番に臨んだように記憶しています。そこでの出来事は、今でも忘れられない大きなものです。当時岳連の役員で岩登り講習の講師の一人であった岸本光弘氏が、滝壺に落ちた男性の受講生を助けに飛び込み、落ちた受講生を岸に引き寄せたものの自分が滝壺に沈んでしまったのです。その岸本氏を助けに行かれた別の役員の方もまた滝壺の中へと、二重三重の遭難となりました。ほんの何人か前に私はその滝を登ったのでしたが、もしかしたら自分が落ちていたかもしれないと一瞬考えたりもしましたが、その後浮いてもこない二人、体は引き寄せられたものの意識の回復しない状態での長い時間をじっと見守るしかなかった中で、その場に居合わせた人たちの様々な行動を見た時に、人間の自我というか、我が身さえよければという情けない程の我がままな気持ちを強く感じたのです。結局、意識を回復された二人をかついだりして降ろすということになったのですが、私たちのように何もできない者は、一足先に下山することになったのです。その時に同じような気持ちになれた方々とは、その時以来何かと親しくして頂き、山だけでなく下界でも事ある毎に集まり楽しく過ごすことができました。岸本氏ともそんな集まりの際に親しく声をかけてもらえるようになり、その後入会しないかと勧誘された時は、まさかと信じられないくらいでした。それまでもいくつかの山の会にも接する機会はあったのですが、やはり組織になるとそれなりの会員としての務めがあると思うと気ままに迷惑をかけるようなまねはできないと感じ、どこにも属さないでいました。神戸山岳会に入会しても、会員の方々の足手まといになるようなことがないかと不安でしたが、それは心配いらないと言われ、それなら一度入ってみて、自分なりにやって行き詰ったら、その時はまた考えてみようと楽な気持ちで始めました。

入会してすぐに、雪彦山へ連れられ、オーバーハングを越えられた

時、頂上へついて眼下を見下ろした時のうれしさ、爽快感は、本当に子どものようにうきうきとしたものでした。それが六月。そして八月には、夏合宿として黒部の上の廊下へ。以前に雲ノ平〜三俣連華、鷲羽周辺に行っていたので、また一段と感激しました。源流では、たったひとしずくの水が、大きな流れとなり、川底を削り、岩をも動かす力となることを身をもって体験しました。毎日、一日の行程を終えるとたき火を囲んで、みなさんと語り合い、時には歌声になり、笑い声になりと楽しい合宿でした。トレーニングらしいトレーニングもせずに臨むことになったのでしたが、なんとか必死でついていくことができました。合宿の延長で槍ガ岳に登りましたが、さすがにその時は、疲れ果てていました。小林氏の「さあ行くで」と言う声が、なんと冷ややかに聞えたことでしょう。でも、頂上に着くと初めての槍だったので、顔は笑う余裕もなかったようですが、心は充分満足でした。そして、冬合宿では、正月を槍ガ岳で迎えました。突き刺すような冷たい強風の中で仰ぎ見た、満天の星くずの美しさは、格別でした。年が明けて春。池ノ谷から剱への春合宿。雪どけ水がしぶきをあげて流れ落ちるのを見た時は、もうこの先は行けないのかと思うばかり。冷たい水の中を徒渉したり、太陽の光が純白の雪に反射し、空の青さが輝いていたことを覚えています。

入会した六月から翌年の七月まで、本当によく山へ行きました。例会には、ほとんど参加し、合宿は全て行きました。そして、会員の方との自由山行、北海道、東北の山、北岳のバットレス、北山公園でのトレーニング等々、たった一年でしたが、思い出深い一年でした。

結婚、出産、職場復帰と今は、毎日の生活に追われていますが、近い将来、また山へ行ける日を楽しみにしています。神戸山岳会に入会して、何より強く思うことは、自分自身の新しい面を見、知らない自分を発見したということです。やればできるじゃないか、まんざら自分も捨てたものじゃないと我れながらに感心しました。本当に子ども以上に子どもになれたと思います。またいつの日か、もう一度、無邪気な子どもに戻れることを願ってやみません。

私の山歴

森脇種夫

僕の山歩きは、現在九才の長男がヨチヨチ歩きの時、六甲山系の東お多福山や摩耶山などの一般道を、家族でピクニックしたのが最初で、ファミリー登山が主体です。長女が生まれてからは、よく背中におんぶして、六甲山を今日はこのルートで登って、あのルートで下ってと縦走や横断をしました。回数が重なってくると、だんだん距離を伸ばし、夏日には午后七時ぐらいまで歩きました。

最初のうちは、しんどいとか休憩とか、おしっこと言っては、ストライキばかりでしたが、下の子が四才の時には一日正味八〜九時間は歩けるようになったので、京都の北山の魚谷山、桟敷岳、愛宕山、高雄山、貴船山、鞍馬や大阪の金剛山、槇尾山、二上山、葛城山、奈良の和佐又山、大普賢岳、稲村ガ岳、弥山、八経ガ岳、釈迦ガ岳、大杉

谷、日出ガ岳、滋賀の武奈ガ岳、蓬来山、シャカ岳、北摂の深山、るり渓、高岳、剣尾山、大船山、羽束山、中山連山、妙見山、淡路の諭鶴羽山、北兵庫の三岳、小金ガ岳、千ガ峰、氷ノ山、三室山、後山、四国の石鎚山、瓶ガ森などと年令が増すにつれて足を伸ばしていきました。

だんだん山域も大きくて山深い危険な所も多くなったので、基本的な登山技術やテント生活技術を必要とするようになり、ちょうど新聞広告に夏山登山教室の講座の開講が載っていたので応募しました。座学が終ると終了山行があって白馬だったのですが日程の都合で参加できないので残念がると、入会してもらったら雲の平、三俣蓮華岳、双六岳山行があると言われたのでさっそく労山に入会しました。入会すると驚いたことに毎週平日に三日ぐらい事務所に集まらなくちゃならないような雰囲気で、しかもクラブの勢力拡大主義がさかんで山行部、機関誌部、ハイキング部、婦人部、自然保護部、冒険学校委員会、遭難対策委員会と部が七つもあって、必らずどれかに属して活発に参加するように要請されます。だから私のように妻子もちが入会すると家庭がなおざりになり大変です。月二回ぐらいは、泊りで山行に出かけて、後の二回が家族と一緒にハイキングに出かけるパターンですが、しだいに会の方に比重が片寄ってしまいました。秋になって岩登り教室が始まると毎週になって、そのまま冬山教室と連らなって、週三日は会の活動で母子家庭と同じになってしまいました。この頃に一年間限りでやめると決心し、退会するともう山岳会に入会できないものと思い、おもいきり冬山、春山に出かけました。

退会してからは、家族と山行に励んでも私は、どうしてももの足らず、うずうずしていましたが、そのうちに仕事がいそがしくなってくるし、家の引越なんかで一年が過ぎました。少し落ちついてくるとやっぱり山の会に入りたくいろいろ捜しましたが、なかなか自分にあった会がみつからなくて岳連に相談すると、神戸山岳会を紹介していただいて入会させてもらいました。

入会してからは、個人装備もそろえてこの夏には、テント山行で家族で初の北アルプスに挑戦し蓮華温泉から朝日岳、雪倉岳、白馬岳を経由して清水岳、不帰岳、祖母谷温泉へと二泊三日の行程を組みました。途中天候が急変して鉢ガ岳を越えてから鉱山跡道をエスケープして又蓮華温泉にもどって予定より一日早く帰るハメになりました。途中お花畑の散策でたっぷり時間を費すことができたし、雪渓の上でテントを張った一夜めには、疲れているにもかかわらず子供たちは雪合戦をしてはしゃぎまわったり、テント設営を手伝ってくれたり、雪渓のトラバース用にピッケルがわりにスティックをさがしてくれたりして家族の連帯を深めあうことができました。帰ってから夏合宿に参加しても雨で半分テントの中だったので又白馬を計画しました。

今度は、大雪渓を猿倉から登り頂上から裏旭岳を通って清水平に行きそこから清水岳、不帰岳、祖母谷温泉を経由して欅平に出るコースです。この清水平に出るコースは、お花畑が一面で昔みた映画のサウンド・オブ・ミュージックを思い出しながらのルンルン気分でしたが、途中で足が痛くなってきて思うように歩けなかったが子供たちは元気で祖母谷温泉では河原の露天風呂に入って泳ぎまわりました。又雪解けの冷たい水で冷しそうめんを食べたり帰りのトロッコ電車が気にいって又乗りたいと言う始末でした。私の足が痛まなかったら又来る気

でしたが、帰って病院でみてもらうともう〝年や〟と言われてガックリ。当分の間は足を休めて山行はだめにあいなり、この春の成人病検査で血液中の尿酸値が異常に高いと検出され、痛風予防のため食事療法中で肉や魚が食べられないので重ねての宣告をうけ非常につらい思いをしています。やっぱり厄年で故障の出る年頃なのでしょうか。

まだ入会したばかりでこれじゃ晩年進歩なさそうな気がする。しかしまだガンバルつもりで先日から水泳教室に入って週三日トレーニング中で来年には変身したいと思ってます。

山に行きたい

都倉幸江

いつも心の中に自分の山を持っている。そんな人が多いのではないか。

ＫＡＣに入会した当時は、仕事上、または、家族の間でも、自分自身の体力のうえでも、山に行きやすい環境にあった。また、今までとは違うルートでピークを踏む喜びや、今までは登れないと思っていた雪山に登ったりすることが、そのまま次回の山行のエネルギーとして蓄えられた。精神的にも肉体的にも次の山行の為に向上していた。

最近はどうだろう。仕事、家族、体力、どれをとっても山には行きにくいと感じる。そして実際に山に登らない。だから山には行けないのだと認識する。だけど、心の中には登りたい山がある。ルートや日程、山行中のメニューまで考えて、下山後飲むビールの味まで想像している始末である。これはこれで楽しい空想なのだが、何故か空しい。実体験しないと向上は少ないし、ほんとうには楽しくない。

せっかくつくった山行計画を実践しないなんてもったいない話だ。最近お互いに姿を見かけなくなった会員の中には同じようなタイプの人が多いのではないか。心の中の山行について語り合えば、一緒に行こうというふうに、山行が実現するかもしれない。山行の話をするにはコミュニケーションが必要だ。お互いに電話をすればよいのだが、なまけものなので実現しにくい。そこで、期待するのが場の設定と提供だ。いよいよ、神戸アルコールクラブの存在が重要になってくる。

パーティを組んで山に行こうとする場合はなおさらのこと。町で語らうもよし、ハイキング、ピクニック、ドライブ、パーティ、何でもよし。仲間と一緒に夢の山行を実現できるような何かを企画していきたいものである。山行に参加していない者のわがままだろうか。

我が山行への思い

星野辰也

神戸山岳会五十周年を期に我が山行への思いを振り返ってみると、様々な思いが脳裏に浮かんで来ます。その中で今回は特に会の山行以

外のいくつかの思い出と現在の思いを綴ってみたいと思います。今から十五年程前に本屋さんで、深田久弥氏の日本百名山を手にしアルプス以外の多くの山々に深く興味を抱きました。と言うよりは、ここに述べられている我が故郷の山々に近い感覚の日本各地の名山に引かれたと言った方が正しいと思います。

その中で東北と上信越の山々は実に素晴らしいものがあります。同書では東北で十四、上信越で十八程紹介されており、小生は現在まで色々楽しませてもらいましたが、残念ながら飯豊連峰と皇海山は未登で何とか今年度中に登りたいと考えています。今までの山行の一つのコンセプトとして単車によるツーリング登山を採用して来ましたが、この東北の名山の大半と九州及び四国の山は専らこれで登りました。午前中に山を駈け登り午後は次の山麓まで一気に突っ走る韋駄天走りで、正に体力と気力の限界への挑戦と言える山行でした。早池峰と栗駒山、月山と蔵王山、西吾妻山と磐梯山などは全て同日に登れました。二〇〇〇㎞のツーリングも楽しいですが、更にそこに山が加われば言う事はありません。また東北、九州と言えば温泉で山行の後各地の秘湯へ単車で一走りし、気に入った場所で幕営して、明日に備えると云うわけです。勿論食料は毎日新鮮なものをスーパーで仕入れることが出来ます。

この様な山行では面白い事があり、ある時など何と四国の石鎚山と九重山（久住山）を同じ日に登頂することが出来ました。そしてその日に別府からフェリーで帰路につく事が出来ました。勿論やまなみハイウェーも充分満喫したうえでのことです。

しかし究極はやはり北海道の山と云えるでしょう。休暇不足と「おやじ」への恐怖にもめげず、これに向かって計画を練っているところです。そして真打ちはやはりこの「富士山」です。しかしこの計画の前には十五の「友」が今か今かと待っています。最南端の宮ノ浦岳、最北端の利尻岳など考えただけで楽しくさせてくれる友です。これらを如何に低コストで有意義に楽しむか、これが問題です。

ここに広くこの場を借りて同行の氏を求む！

百名山中未登の山々……平成二年五月現在

1利尻岳　2羅臼岳　3斜里岳　4阿寒岳　5トムラウシ　6十勝岳　7幌尻岳　8後方羊蹄山　9飯豊山　10皇海山　11筑波山　12笠岳　13両神山　14鳳凰山　15宮ノ浦岳　16富士山

【灼熱のバンコクにて連休中の仕事の合間に思ったこと】

山について思うこと

松本智圭

やはり、はじめてということの感激は大きい。まだ、数回しかアルプスへ行っていないが、初めての雪山、春の鹿島槍ガ岳へ登った後の信濃大町からの北アルプスの眺めは最高であった。桜の咲いていた（と思う）大町のまちを、登山博物館へ。山の興奮を残しながら、振り返り見た北アルプスは最高であった。これまでの山関係の中で、一番印象的なことであった。山行そのものより、強烈であったと思う。

（山に登ってきたという前提があってのことだろうが。）

夜行で大阪を出発。アプローチの時からドキドキしていた。第1日目、鎌尾根～南峰ピーク。第二日目、雪山訓練。第三・四日目、東尾根よりピークへ。

雪の上を歩くうれしさ。切れてくると、滑落の不安とともに、山全体の雪が崩れてしまわないかという雪に対する不信感。雪上訓練では途中でハーネスが取れ、笑われると同時に、冗談でないものを感じたり。雪崩そうなところで、のそのそとアイゼンをつけていたり。ビバークで小さなツェルトをかぶり、膝をつき合わせている姿に驚いたり。その他、当然に何をしても新鮮で、童心にかえり、本当に楽しかった。

そういう山行が終っての北アルプスの眺めだったので、思いもまた新たなものがあったのではと思う。

その時から、約二年、いろいろと楽しい思い出が出来たけれど、山から離れている最近ではあるが、まずは山へ登り、末長く山と付き合っていけるよう自分なりの山というものを見つけていけたらと思っている。

私のマウンテン・ライフ

芝　正人

私が、山に行き出したのは、いつ頃だったのか。小さい頃、学校の遠足で登った山は、ただしんどいだけという記憶があるだけで、むしろ興味の方は、海に向いていた。当然その興味が延長して、商船大学へと進学した。今、考えてみると夢のようであるが、大学一年生の頃は、潮まみれの生活で仲間と一緒に毎日カッターを漕いでいた。まさに、海漬けの生活であった。

その生活にも一つの転機が訪れた。大学の山岳部への入部である。今までの生活に不満足というわけでもなかったが、大学では寮生活、クラブでは大学近辺の海という生活であったため、非常に視野が狭くなっていた。また、確かに海というものは素晴らしいが、自分自身の力で進むには限界がある。どうしても、風、機械等の動力で進まなければならない。しかし陸続きの所は、自分の二本の足さえあれば、どこまでも進んで行くことが可能である。しかし、山岳部へ入った当時は、そこまで考える余裕など何もなく、ただ、視野を広げたい、色々な物を見たい、動き回りたいという気持ちだけで山岳部の門を叩いていた。

やはり、やり初めは、色々と印象も大きく、初めての山行は、鮮明に覚えている。入部したのは大学の二年生の時で、二十歳、若かった。しかし、山というのは歩きばかりであると、勝手に想像していたが、そう甘くはなかった。なんと岩を攀じ登らなければならないのである。しかし、生来の恐がりのせいか、全く、足が動かない。先輩同輩に励まされ、何とか登るが、みっともなかったと思う。そして、初めての山行へ。夏山、しかも、白馬へと行けるという気持ちで浮わついていたが、そんなに甘いものではないとすぐに気付かされた。まず、荷物が重い。60立のザックが満杯になる。今、考えるとおかしな話だ

が、縦走なのにヘルメットを持っていったり、とても食べ切れない量の食料、使い切れない量の燃料等、色々と無駄な物を持っていった。実際、私が持って行った米は全く使わず持って帰って来た。

そして、出発、荷物を持ち上げる度にどうして山岳部に入ってしまったのだろうかと思いながら列車に乗り、白馬の大雪渓を登る。荷物が重い、たんたんとした登りが続く。しかし何事にも先は見えるものだ。雪渓が切れたらお花畑が見えた。つらいが、きれいだ。テント場について見る景色は夢のようにきれいで、今までの苦労は全く忘れてしまった。そう、この気持ちを得たいがために、山に登ったのだ。今でも感じるが、重たい荷物をかつぎ、危険な岩を攀じ登るのは、一瞬のときめきと充実感を得たいために私は山に登り続けているのであろう。初めての山行は危険な箇所も色々とあったが、毎日毎日新しい発見があった。仲間も楽しく、自分でも気付かない内に山にのめり込み、冬山、春山と経験して山の素晴らしさの虜となっていった。

もう一つの転機は、登山研修会への参加である。最初の一年間はほとんど縦走ばかりで岩登りは芦屋の簡単な岩場しか経験していなかった。大学の仲間たちは、ほとんど岩の方には興味がなくて、実際私も、わざわざ岩を攀じ登らなくとも、ピークに立てるのにどうして？という気持ちがあったが、やはり好奇心には勝てなくて参加した。だがやってみるとなかなかおもしろい。今まで、恐がってばかりいた岩場であるが、違った仲間と新しい刺激があると結構ファイトも湧いて登れるのだ。これが、きっかけとなって、もっと岩をやりたい、うまくなりたいという気持ちで、神戸山岳会の門を叩いた。

さて、私の神戸山岳会への入会の経緯を書いてみたが、現在の私自身はどうであろうか。初志のゲレンデのノーマルルートは、登れるようになりたいという志しもまだ達成できていない。確かに、色々なことが経験できてそれなりに満足しているのだが、初志も達成できないでいる自分が非常に歯痒い。確かに合宿前は日曜ごとに集まり、盛り上がってはいるが。けれど毎回自分自身の壁を乗り越えようと努力はしているのだけれど、中途半端に終わっていることが多い。今の、若い人にとってすべての興味を山だけに絞り込むというのは問題があると思われるし、せめて、技術的な問題は、自分自身が得たものが、効率よく発揮するにはどのような方法が妥当であるかを考える必要があると思われる。一度登れても次に登れなくなる状態はなるべく避けたい。

神戸山岳会も五十周年を迎える。私自身もポテンシャルをアップさせるための、努力または自分なりの方法を模索しつつ向上していきたいものである。

今までに一番印象に残った山行

永田　宏

かなり古い話になるが、五年前の昭和六十年十一月二日の土曜日から四日の振替休日にかけて、会社の友人二人と家族四人（小学校六年生と一年生の娘と妻）でキノコ狩をかねて大峰の弥山、八経ガ岳へ登

った。

二日の土曜日、時間はもう忘れてしまったが道中の車の中で、阪神タイガースが優勝したと聞いたことを覚えている。野球が特に好きというわけでもなく、また阪神タイガースファンでもないが、「六甲おろし」は好きなのでやはり気分は高揚していた。

大峰山脈の行者還岳から弥山へ向う縦走路の途中に、行者還林道（川合〜天ガ瀬）が大峰山脈の横腹をつき抜ける形で、行者還トンネルとなって通っている。トンネルの入口の高度は約一一〇〇米程度と高く、小さい子供連れで弥山に登る取付としては丁度よいところである。

その夜十一時頃トンネル入口横に着いた。テントを張って早速酒盛り。底冷えをアルコールで押え明日を思う。

三日、空気が張りつめている。朝日がブナの紅葉を突き刺し絶好の登山日和だ。尾根に出ると右手遠くに大台へのドライブウエイが見える。振り返れば国見岳、大普賢岳が手に取るよう。昼過ぎに弥山のキャンプサイトに到着。大人だけで八経ガ岳まで足を伸ばす。夕食は途中で集めたブナハリタケ、スギヒラタケを油で炒め砂糖としょう油で味付け、なかなかいける。

四日の朝、シラビソの葉先に霧氷が光る。今日も快晴。出発が九時頃と遅くなったが当初の予定を変更して弥山川を下ることにした。友の一人は二台のうち一台の車を、弥山川入口にまわすために元の道を戻り、我々五人は川を下っていった。

河原小屋から双門の滝へ向う中程で昼メシとする。双門の滝が近づくにつれ道は予想をはるかにこえて厳しく、鉄バシゴ、木の根がからまる所をほとんど垂直に下る感じで、下の娘のピッチでは下りることが無理な状態となった。そのため思いのほか時間がかかり、双門の滝に着いたのは二時過ぎ。スケールは大きく人の気配もなくなく気味が悪い。ここで下から上って来た友人と会う。

もう一台の車も取りに帰らないといけないので、友人二人、長女は先に行くことにした。このときテント食糧等が入った私のザックが大きいので友の軽いのと交換することにした。

双門の滝から下は前にもまして急で時間はどんどんたっていく。これはまずいことになったとこの時ハッキリわかった。時は新月、山で陽が落ちたら真暗闇になるのは目に見えている。しかし不安は現実となってしまった。一の滝を下りた所で急に日が落ちた。ランプを出して見るが闇に光が吸い込まれて一米先も見えない。吊橋を渡った所で完全に道を見失なってしまった。小路らしい所をあちこち探がしていくが行き止りばかり。ワイフが川に沿って下りればというので二〇米程進んだが、娘もろとも崖下に落ちそうで、やっとの思いで元の所へ戻った。これでやっと腹がすわった。ビバークを決意。テントもシュラフもない。なんとか使えそうな岩陰を探し、シラビソの枝で床と屋根を作った。不安がる娘をアグラの中へ抱えこんで今日はここで寝ようと安心させた。

何時間ぐらいたっただろう。川音にまじってかすかに笛の音らしいものがする。気のせいかと目をつぶったが、しばらくするとまた音がする。もしかして、あいつが来たのかなあと思い吊橋の所まで出てみる。また聞える。これは本物だ。私は今回買ったばかりの英国製、オレンジ色の笛を胸ポケットから取り出し、指で両耳の穴をふさいで思

い切り吹いた。何回が吹いた。私の笛に合わせて彼も吹いている。その内チラチラと光が見え隠れしだした。〃助かった〃。〃新聞によると……〃になったら会社でまずいなと思っていたが。

彼の名前は和田君といい私の釣の師匠でもある。現在彼は大阪ワラジの会に所属している根っからの渓流師。今日は二度目の登りで流石に喉がカラカラ。コップ半分しか水がなかったけれど、レモンと砂糖をタップリ入れた紅茶を作って飲ませた。

一息ついて出発。彼はキャンプ用の大型携行灯を持って来ていたが威力は抜群、我々が迷った所を見て納得した。そこから岩を登って上へ行くのだ。

白川八丁まで下って来るとまた光が見える。もう一人の友人佐藤さんが心配して迎えに来てくれた。林道に戻ると長女が車の中で寝ていた。ええ度胸をしていると恐れ入ったが、後で聞くと。恐いから寝ていたとのこと。そうかなあ——。

それから遅い夕食をとって家に帰り着いたのは午前三時過ぎ。その日の会社はきつかった。

六甲・摩耶・地蔵谷の道を行く

大橋清孝

六甲山記念碑台から広い道を西へ向ってのんびり歩く。しばらくすると別荘や保養所が点在するあたりから左へ、摩耶山に至るハイキングコースになる。夏には日陰が涼しく、冬には風をやわらげる樹林帯で、森林浴コースでもある。

摩耶までの途中に道が崩れかけている所があって、将来どうなるのかと案じられる。その先の三又路では工事が行われていたから、やがては補修されるのだろうか。再びアスファルト道路に出るがこれは途中で敬遠して、アゴニー坂を越えると山頂はすぐ真近となる。

摩耶山頂で一服、休憩して六甲全従の逆コースをとって少し歩くと、私の大好きな地蔵谷が右手にあらわれる。夏は緑が谷間までおおい、谷の水量は下るに従い増えてきて涼気を肌に感じることができる。冬には、枯葉が水面に浮んでは沈み、沈んでは浮んで再び流れるのを追うように下っていくと椿の群落に出会う。そこは静けさの中で己を見つめるのに良い場所で、最も私の好きな場所である。

そこから更に下ると、コンロなどを置いて食事のできる岩の休憩所がある。そこでコンロに火をつけ、のんびりと食事をしたりコーヒーを飲んだり、一時間近く私なりの贅沢をし、赤い夕陽が見られる頃までに市ガ原に向うのである。

市ガ原に向う途中の山合いでは、下る私と入れ違いに山に向かうカラスの鳴声にせかされるように、ひたすら下山を急ぐようになる。後は天狗道への出合いから市ガ原、神戸の水源布引貯水池へと出ればよい。

六甲の山あいの静かな、そして私の好きな地蔵谷の由来は今だに知らないままである。しかし私はあえて知ろうとも思わないし知らなくてもよいと思っている。そこを地蔵谷と呼ぶ人がいるなら地蔵谷でよ

いのではないかと思う。何故なら固有名詞なるものは自由につけることができるからである。

一期一会

――回想のマッターホルン登攀――

米澤典之

シロン城に似た水辺の館が過ぎ去ると、レマン湖は車窓を離れ山が迫って来る。ほっとして、来あわせた売り子にサンドウィッチを求めるが、フランス語で尋ね返すので困っていると「メイ・アイ・ヘルプ・ユー」と隣席の婦人が英訳して下さり助かる。メルシー・ボクーと礼を述べれば、ツエルマットへ行かれるとて、ケルク・ヴー・ランデイ・アベック・モア、ウイ・ムッシュ。

ビスプで乗り換え、ローヌ渓谷を登りつめる頃真っ白い峰が現れる。ブライトホルンと教えてもらって駅で別れる。

ベルグヒューラービューローにガイドを依頼するが、天候が悪く、客がつかえているので毎朝尋ねて来いとすげない。パイプをくわえた粋なガイド達が屯ろしているので個々に交渉するが、いずれも肩をすくめるのみ。あきらめてミューゼアムと教会の墓地を訪ね、ハドーやハドソンの碑を見る。

マッターホルンを眺めにゴルネルグラードに上がったが、雲がかかって姿を現わさない。登山電車で席をゆずってくれた西ドイツから来たという子供と、その一家と語りながらモンテローザやミシヤベル山群の展望を楽しむ。ローレライやリンデンバウムを口ずさんでいると、いつかあたりの人達も和して大合唱となった。ブラボーという拍手で我に返ると、突然、離れた雲の間からマッターホルンが勇姿を現わした。アウフ・ビーダー・ゼーンと別れ望遠鏡に飛びつく。

プリズム番をしている子供にチップをはずむと、現金なもので自由に使えという。マッターホルンは雪か氷に覆われて全山真っ白、一瞬背筋が寒くなるほどの興奮を覚える。子細に観察しているとスイス山稜に二人いるようだが全く動かない。しばらく見続けているとゆっくり下降にかかったようである。どうやら退却というところらしい。

歩いて村に戻る途中のカフェの庭にエーデルワイスが咲いている。金網でかこっているのは、天狗の小屋の黒百合と同じである。押し花にしようと少し買い求める。

氷河遊覧の参加をすすめられ、十五人ばかりが老若二人のガイドの案内で出発。テオドルパスの小雪壁の登りではザイルのラストにされる。再三スリップする先行者の荷の重量をささえるかたちになってしまい、国境稜線に着いた頃は息ぎれで気分が悪くなってくる。体裁がわるいのでハングリーとごまかすと、今度はビスケットやキャンデーの雨。

イタリヤ側に下ると雪は少なく空も明るいが、何か荒涼としていてカウベルの響きも淋しい。

老ガイドが岩登りのトレーニングをすすめてくれたので、ゴルネルグラードの岩場に行く。氷河壁の上部で高度感は充分、ホールドは多

く登りやすいがスタンスは鋭くビブラムが切れんばかり。九ミリのザイル一本でのクライミングを楽しみながら、保墨岩の東稜の方がむつかしいのでは、という思いがして、二回目からはトップで登る。

数回繰り返していると、ヘルはクライミングが上手だ、山には登れると妙なほめ方をして終わりにしてしまう。それではと、マッターホルンをガイドしないかと誘ってみたが、年で登れないという。さてはバテたのか、とだまされたような気がして白けた感じになっていると、突然、彼はヨーデルを歌い始めた。声は氷河をわたり、岩壁にこだまして還ってくる。繰り返し歌う彼を眺めながら、若かりせばやはり登りたいであろうにと思うと、心に沁みるものを感じてフイを支払う。

永旅の疲労も重なったのか体も冷え食欲を失う。ゾンタッグの村の祭りも楽しめない。ディナーに手をつけないのでメイドが心配してくれる。ライスを食べたいと頼むと、バターで炒めパセリまで振りかけているので一口も喉を越さない。

その時丁度、パリで出会ったソルボンヌ大学生のマドモアゼルが訪ねて来た。フロントのフロイラインにアンマリジットは駄目と断られ、ホテルバンノッフに宿を求めて行った。間もなく自炊OK、米はスーパーで売っていると知らせてくれる。早速訪れてマダムに頼むと快く承知してくれる。加州米ながらお粥を炊いて梅干で食べる。手足の先まで暖まり元気が出てきた。木賃宿的なホテルだから各国の若者が多く話がはずむ。メロンを分けてくれたニュージーランドの娘さんにヒラリーの話をすると、ヒラーリーと発音する。梅干を珍しがるイスラエル人に一口食べさせると顔をしかめて逃げ出してしまった。

マダムにガイドが頼めず困っているという話しをすると、SAC・スイス山岳会モンテローザ支部、ツエルマットセクションのボスに相談するとよいのでは、と教えてもらい早速、かのマドモアゼルに案内してもらって訪問する。日本山岳会のメンバーなら私が紹介者になりますと即座に入会が許可され、電話をしてくれると鶴の一声、難航していたガイドについても直ちに決まり、オトマー・ケーニッヒなるガイドが明晩ヘルンリ小屋で待っているとの吉報である。マドモアゼルも一緒に登りたいと言い出す。ことはついでとSACの入会手続きをとる。年会費八〇フラン程については、ボスのマダムが前祝いにと御馳走（？）して下さるというおまけまでついて感激する。

いよいよ出発の日、チェックアウトの際に荷物を預け、もし還らなければ日本のマザーに送って欲しいと頼むと、微笑みながらフロイラインはグットラックと見送ってくれた。シュバルツゼーからヘルンリの小屋までは意外に遠い。天気はよく、にぎり飯もたっぷりあるので景色を楽しみながらゆっくり登る。

午前四時、ガイドとアンザイレンし北壁下部にライトを光らせながら取付く。天候が回復してきたため、ルートは前穂北尾根なみの混雑である。ガイドがルートを外していくぞと云う。ヤーと応じると東壁を少々深く回り込み、ライトでスタンスを求めながら先に立ち、コンテニアスでサッサと登り出す。黎明と共に星が消え、上部がモルゲンロートに染まりはじめると東壁の落石が始まる。ガイドが急いでいた理由がやっと理解できた。

ヘルンリ山稜に戻り、快適な登りを続けソルブエー小屋で小休止し

てアイゼンを着ける。アンカーボルトはあるがフィックスされてはいない。息切れが激しくなってきたのでビッテ・ラングザムと頼むと、お前は犬のようにぜいぜい云うと冷やかされる。何しろ彼は冬季北壁単独登攀をした男、こちらとは比較にならない。肩にかかると流石に緊張してスタッカットで登る。

この日の頂上からの展望は素晴らしい。ベルナーオベルランドからモンブランまでの山稜がすべて望め、少し見下ろすようになるワイスホルンの三角錐は殊のほか美しい。写真撮影のためザイルを外したので、イタリヤ側山頂へのナイフリッジは足がすくんで進めない。羊羹をすすめると日本のケーキはうまいとお世辞は云ってくれるが、イタリヤ山頂の方には行ってくれない。

再びアンザイレンして下りにかかる。雪が軟らかくサッサと降りるガイドに追付こうとして、半足でも滑ろうものなら忽ち鋭い叱責が浴びせられる。しかし、リンクス・レヘテと指示されてリズムに乗って下りはじめるとエス・グットと機嫌良く調子づけてくれる。

ヘルンリ小屋から往復一〇時間、小屋へ帰りつくとマドモアゼルがテイを飲みながら待っていてくれた。早かったですネと誉めてくれるので、実はマリオネットのように引き上げられたり、ブランコさせられたりで散々だったと少しは謙遜して話すと、大笑いになった。

ガイドが私のサブザックに気がある様子なので進呈すると、小屋で留守番していた私のピッケルのシャフトに「ベリーナイス・ジャパニーズクライマー」と記し、サインのサービスでこたえてくれた。ヘリコプターが飛び交い騒がしくなってきたのは、北壁で事故があったようである。

ホテルに帰ってのディナーではテーブルの正面に招じられる。今シーズン最初にマッターホルンに登ったジャパニーズクライマーだと紹介があると、コングラチュレーションと次々にシャンペンを注がれる。

翌日、ツエルマットを去る前、ホテルバンノッフのマダムにお礼とお別れを告げに立ち寄る。アディユーと別れを惜しんでくれるマダムに、私は再びここに来ますとの思いを込めてオールボアール。

二十三年前、学会へ出席したおりにストックホルムを訪ね、美術館を巡ったり山へ足をのばしたりもした。当時の写真はすでに色褪せ、日記も失ってしまったが、生涯心に残るのは、この時にナショナルギャラリーで一日半も見続けたダヴィンチの描いた一枚のカートンと、スイスアルプスの雄峰に接した思い出と、多くの人々との心あたたまる触れ合いでした。人々との出会いこそが人生を豊かにしていくものであることは、たとえ単独行であっても「山にあれば人恋し」というように——。

青いケシを求めて

—インドヒマラヤ一人旅—

平木賢一郎

昭和六二年八月三一日、ヤマケイで見た青いケシの花を見るべく、

インドヒマラヤの麓、ヘームクンド及びフラワーバレーを目ざして大阪空港を発った私は夕闇せまる頃、インドの首都デリーに降り立った。バンコク経由で一〇時間程で着いてしまうので、今一つインドに来たという実感がしない。しかし、一歩空港を出てバスに乗りこむと、その異様な臭いと板ばりの座席に、やはりインドに来たんだなと実感する。

九月一日、とりあえずリシケシまで行ってしまおうとバスターミナルへ行く。チケットを買おうと窓口へ向かって「リシケシ！リシケシ！」と叫ぶが、何やら訳のわからない事を言って指さすだけで一向にらちがあかない。やれやれ困ったと思っていると近くのおっちゃんが今、まさに出発しようとするバスを指さして「リシケシ！リシケシ！」と言っている。あわてて近くまで行くとみんなに押し込められてしまった。インドの大平原をバスは軽快に走り、夕方、ガンジス川のほとりのリシケシの町に無事到着した。

九月二日、朝一番に観光案内所へ行って、ヘームクンドの登山口にあたるゴビンダガートへ行く方法をたずねる。バスで二日の行程であり、明日の朝出発との事である。そこで今日は、ゆっくりリシケシ見物でもしようと街をブラブラ歩く。ここはヒンドゥー教の聖地なのでサードゥー（修行僧）がたくさんおり、リンガ（ちんぽこの神様）に水をかけていたり、ガンジス川につかって沐浴していたりする。アーシュラム（修行僧の道場）のまわりを歩いていると、急に小さな一室からサードゥーの一人のようなじいさんに呼び止められる。話を聞くと、なんでも自分はネパールから来たヨギストで大勢の日本人にヨガを教えているとの事。絵ハガキも見せてくれるが話がどうもうさん臭い。どうやら彼はこっちをカモがネギしょってやってきたように思ったらしいが、こちらもこんな所でお鍋になってもつまらないので適当に話だけ聞いて飛び立つ事にした。

昼過ぎ頃、翌朝出発する場所を確認しておこうとバスターミナルへ行き、そこのおっちゃんにゴビンダガートへ行くバスの事をたずねると、「そこのバスが一五分後に出るよ」という返事。案内所で聞いた話とは違うが、早くなる分には大歓迎なので喜んでバスに乗る。今日はどこまで行くのかと思っているとカルナプラヤーグという所で止まった。予定していない町なので宿が心配だったが、バスの中で親しくなった電気技師の人が宿の交渉をしてくれた。彼はここまでとの事だったので礼を言って別れる。

九月三日、ゴビンダガートへ向けて出発。道はいよいよ険しくなり、ガードレール、カーブミラーはなく、ダートの道をバスの運ちゃんは歌を歌いながら、ブラインドカーブではブレーキのかわりにクラクションを鳴らして景気良く飛ばしていく。道のすぐ下は数百米はあろうかという断崖絶壁で、はるか下にはガンジス川が流れている。何となく黒部渓谷を思わせるが、桁違いにスケールが大きく、ガンジス川は日本のような清流でなく土色の濁流である。おまけに道は半分崖崩れで埋まっていたり、逆に半分なかったりする。インドのバスは見た目こそワイパーはないし雨もりはするが、そのバイタリティーは日本のバスとは比べものにならないものを持っているのである。それにしてもこうしてガンジスの源流を辿って行くと、遠くへ来た実感がひしひしと湧いてきた。どうやら旅はゆっくり行った方が遠くへ来た気がするらしい。

夕方、無事ゴビンダガートの町に降り立つ。通りがかりの人に「どこか宿は無いか」とたずねると、けげんそうな顔で「ここにはそんなものは無いよ」という返事。バスももう無いし途方にくれているとみんな集まってきて郵便局の人の家につれて行ってもらった。そこで「庭にツェルトを張って寝かせてくれ」と頼むと家の中に泊めてくれるとの事。おまけにダール（豆のスープ）とチャパティ（小麦粉を焼いたもの）の夕食までごちそうしてくれた。話をすると、本業はバドリナートで写真屋をやっているとの事。こちらのカメラのことをいろいろとたずねるので、大事なペンタックスは別としてもう一つのバカチョンカメラの方をお礼に進呈すると言うと、それでは悪いので売って欲しいとの事。結局一五〇ルピーで売る事にする。

九月四日、いよいよヘームクンドのベースキャンプであるガンガリヤー目ざして歩いていく。ヘームクンドはシーク教の聖地なので道は整備され、茶店もたくさんある。回りには朝顔やつりふね草そっくりの花が咲いている。ターバンをまいたシーク教徒がたくさん登って来るが、みんなラバに荷物を乗せ、手ぶらで上がって来るので自分でザックをかついて登って行くと変な眼で見て行く。あたりの草や木、山の感じは日本の穂高なんかと良く似ており、なつかしい気分になる。やはり同じモンスーン地帯なのである。

それはそうと朝からどうもおなかの調子が良くない。今までみんな飲んでいるから大丈夫と生水をガブガブ飲んでいたことに原因があるらしい。ガンガリヤーが近くなった頃には歩くのもやっとの状態であった。その時、後から声をかけてくれた人がいた。名前をプロビールといって、マドラスの近くのポンディチェリーという所から家族と一緒に旅行に来ているとの事。ガンガリヤーのロッジに案内してくれた。その夜はプロビールのお父さんに薬をもらってすぐ寝る事にする。

夜中、急に腹痛がひどくなって外のトイレへ走るが、途中でピーピーと黄色い信号が鳴ってズボンの中を温かいものがジャーと流れる。ヤッターと思ったが、うまいぐあいに近くに水道があったのでズボンとおしりを洗い、ベッドにかけ込んで事なきを得るが、友人がインドで赤痢になった話を聞いていたので自分もそうかなーと暗い夜を過ごす。

九月五日、プロビールが様子を見に来てくれた。「今日は一日寝ているつもりだ」と答えると、「二週間しかないのなら急いで回らないとダメだ。薬をやるから一緒に行こう」と言う。二週間も休んでと言われる日本と、二週間しかないと言うインドの違いに、日本社会の忙しさを痛感させられた。

結局、根が優柔不断なのでプロビールと一緒にヘームクンドへ行くことにする。体調の悪さもあるが、さすがに四千メートルを超える山道はなんとなく息苦しい気がする。そろそろ今回の旅の目的である青いケシ、メコノーシス・アクレアータが咲いているのではないかと注意していると、あった、あった。まさにヤマケイに載っていたとおりのブルーである。少し盛りの過ぎたものが多いが、結構あちこちに咲いており、青ばかりでなく薄紫色をしたものも多い。夢中で写真をとるが、それでなくてもペースが遅くてプロビールの足を引っぱっているので数枚写して立ち去ることにする。やがて標高四三二九メートル、シーク教徒の聖なる湖であるヘームクンドに到着。夏とはいえ、この高さに来るとセーターにヤッケ姿でも寒い。しかし、シーク教徒

たちはみんな裸で湖につかって沐浴している。信仰の力というのはすごいものである。

九月六日、昨日のゲリはうそのように治まり、フラワーバレーへ行く。写真では花いっぱいなのだが、時期が少し遅いせいかちらほら咲きである。しかし、良く見るとシオガマのたぐいや赤いキンバイ、大きなトリカブト等が咲いている。みんな日本の野草と良く似ている。青々とした草原が後のヒマラヤの雪峰までえんえんと続いて見える。ツェルトもあるし、ずっと奥まで行ってみたい衝動にかられるが、ゲリをした事が頭をかすめ、ここは無理をしないで引き返すことにする。

九月七日、ゴビンダガートの奥のビシュヌ神を祭る寺院のあるバドリナートへ向い、再びゴビンダガートへと下山する。プロビールはコーサニーへもどると言う。下山中、日本の歌を教えてくれとプロビールが言うので「雪山讃歌」を歌ったらプロビールが同じ歌がアメリカにあると言って「オーマイダーリン、オーマイダーリン」と歌い出した。そう言えばそうだなあとこちらはでまかせ笑いをする。ゴビンダガートに着くと、お互いの旅行の安全を祈ってプロビールと別れた。

私の旅はこの後、コーサニーで再びプロビールと再会し、ナイニータールまで一緒に行き、アーグラー、デリーと続くわけですが、今回の旅をふり返ると一人旅とは名ばかりで、プロビールとその家族を先頭にあちこちの現地の人の好意に支えられた旅でした。困っている時に手をさしのべてくれる人がいると本当に心強いものです。私も山で、また下界でも、困っている人には積極的に手を差しのべて行きたいと思いました。

あとがきにかえて

神戸山岳会委員長　古賀英年

平成二年十月に、神戸山岳会の創立五十周年を迎えるにあたり、昭和六十三年四月の総会において記念行事を催すことが検討されました。記念行事としては、記念祝賀会と記念登山を、そして記念会報の発行が企画されました。

これらの行事を具体化するために、創設当時からの片山英一氏を委員長とし、同じく、島田文雄、新川利夫両氏のほか、OB、現役会員の三世代の会員の代表を構成メンバーとする「五十周年記念行事運営委員会」を設け、第一回の会合を昭和六十三年七月に神戸登山研修所で開催し、以後毎月一回の定例会を重ね、行事内容を検討してまいりました。結果的には定例会の当面の課題は記念会報の編集対策が主体となり、しばしばその在り方が論議されました。本来ならば記念行事の主題を記念山行におくべきところでしたのでしょうが、当初企画しかかったブータン山行は時間的にも困難性があって見送られ、最終的には懇親登山として、平成二年十一月三日～四日に氷の山とその周辺山地で行われることになりました。このため記念会報の内容について、当初の企画は五十年の区切りとしての回想録とするのか、あるいは会の今後を展望する基石となるような内容とするのか、との議論もあって、一時期編集方針がゆれうごく事態もありました。

しかし、会報発行自体に異論があるわけでもなく、これを契機に現役会員からの寄稿も続き、ようやく本書の如き形態となりました。余談ながら、半世紀にわたる会の記録、会報や月報の収集が行われ、総計は百余部にも達しましたが、資料の整理と集成に力及ばず、残念ながら剱岳山行の年表のみにとどまりました。もっとも、折角の資料でありますから時期を改めて、何らかの形でまとめたいものと考えております。

さて、記念会報の内容にふれた機会に、亡き会員の追悼記に付言させていただくと、神戸山岳会創設以来戦後再興するまでに亡くなられた方々については、本文中に片山英一氏が述べておられます。また、神戸山岳会になくてはならない存在であった故前田浩氏。岩壁登攀に卓越した技量を発揮されていた故広瀬文雄氏。会の剱岳へ取り組み始めた基盤づくりに貢献された故新川和正氏、故新川雅英氏。剱尾根池ノ谷側壁R4で逝った故宮永泰男氏。木曽駒ガ岳稜線で消息を断った小西正宏さんら各氏については、既に会報、追悼集等が発行され、そのお人柄を偲び追想されています。

しかし、その前後に物故された方々を偲ぶよすがもないままになっていましたので、編集企画の段階から、当時を回想していただく計画をたてていました。幸いよき人をえて、各氏の生前の追想を語っていただくことができました。改めて各氏のご冥福をお祈り申し上げます。

始めに申しあわせた記念会報の発行は、神戸山岳会創立五十周年祝賀会を平成二年九月末に実施するところから、それまでに発行できるようにと、企画当初から丸二年の歳月を経ましたがようやく発刊の運びとなりました。ご協力いただいた皆様のお陰と御礼申し上げますとともに、創立以来五十年を迎えた今日もなお健全な姿で存在するのは、神戸山岳会を支え、引き継いでこられた数多くの先輩諸氏のご努力と情熱によるものであることを、編集に携わり痛切に感じさせられました。そして、これからも神戸山岳会が繁栄への道を歩み続けるために、個々の会員が年齢や趣向に応じた登山を生涯つづけられる山岳会であることを祈念してやみません。

おわりにあたり、編集、校正の遅れにもかかわらず出版にご尽力いただいた第一印刷出版株式会社とご担当の皆様方、写真製版にお力添えいただいた光陽社の方々、本書の刊行に物心両面にわたるご援助をいただいた片山英一氏に心から御礼申し上げます。

年	月／日	山行名（または ルート名）	メンバー	参考事項
62	8.14～8.17	夏山	小林利樹、竹内省吾、国沢昭美、都倉幸江。 他に、永田ツヤ、斎藤、幸内、吉田、青谷。 ＝その他の参加者不明＝	会執19号（1988 №18）剱岳集中合宿（春山）から。 竹内省吾「池ノ谷～チンネ登攀」および、国沢昭美「剱岳」、都倉幸江「剱岳」から収録。
	8.14	入山　前夜大阪発		馬場島～二俣～小窓尾根～（登攀中雷雨）～二俣幕営
	8.15	チンネ登攀	a、左稜線(登攀メンバー不詳) b、中央ルンゼ（登攀メンバー不詳）	二俣幕営地～（ルート不詳）～三ノ窓・BC説営後、登攀。＝竹内省吾「池ノ谷―チンネ登攀」から＝
	〃	チンネ中央チムニー	小林、永田、吉田、国沢。	三ノ窓～中央チムニー～aバンド～bクラック～三ノ窓
	〃	八ツ峰六峰Cフエース	幸内、斎藤、都倉。	三ノ窓～八ツ峰六峰Cフエース～5・6のコル～三ノ窓
	8.16	チンネ左稜線	小林、永田、青谷、吉田、国沢。	三ノ窓～左稜線下部～中央バンド～aバンド～bクラック～三ノ窓
	〃	チンネ等の登攀	チンネ、八ツ峰六峰フエース、剱尾根。	（登攀メンバー不詳）。竹内省吾「池ノ谷―チンネ登攀」から。竹内一人のみ先行下山。

年	月／日	山行名（または ルート名）	メンバー	参考事項
59	12.30 ～1. 4	冬山合宿 早月尾根往復	岸本光弘、吉田典夫、馬場　孝、小林利樹。	会執№17（1985）昭和59年冬山合宿報告から。
	12.30 12.31 1. 1 1. 2 1. 3	12.29大阪発　入山 早月尾根 〃 早月尾根～剱岳頂上往復 下山		富山～上市～伊折～馬場島幕営。 馬場島～松尾平～2100付近のピーク幕営。 2100付近のピーク～2800付近で先行パーティ難渋により渋滞、撤退～2100付近のピークで再び幕営。 2100付近のピーク～剱岳頂上～2100付近のピーク～馬場島幕営。 馬場島山荘～伊折～上市を経て帰神。
60	5. 3～ 5. 5	春山合宿 ＝行動記録不詳＝	岸本、小林、吉田、大西、国沢。	会報第18号1987 №17 昭和60年度「春山合宿」から。 三ノ窓～剱岳頂上～早月尾根から下山の模様。（下降中のスリップ事故についての感想文・食料計画書・反省コメントのみ掲載）
62	4.29 5. 5	剱沢集中合宿	A：小林、古賀、三浦、吉田。 B：堀田、中本、佐久本、平木、小田。 C：国沢、矢木、菊池、土居、金田、野上(芳)、野上(博)、野上(哲)。	会報19号（1988№18）剱岳集中合宿（春山）から。 合宿報告的な感想等各頁にあり、取捨しつつ左記のごとく収録す。
	A班 4.29	入山　丸山東壁試登	小林、古賀（三浦は足を痛めテントキーパー吉田は後発の模様）	前夜大阪発。大町～扇沢～黒四ダム～丸山東壁基部幕営～夏壁の左岩稜登攀
	4.30	丸山東壁・中央壁　緑ルート	小林、古賀、三浦。	丸山東壁基部幕営地～緑ルート登攀～丸山東壁基部幕営地
	5. 1	剱岳への移動日	小林、古賀、三浦、吉田合流。	丸山東壁基部幕営地～内蔵助平（吉田合流）～ハシゴ段乗越～剱沢長次郎出合雪洞泊
	5. 2	八ツ峰登攀	小林、古賀、三浦、吉田。	仮泊地～八ツ峰一・二峰間ルンゼ～二峰～八ツ峰ノ頭～三ノ窓雪洞設営
	5. 3	停滞（天候雪）		
	5. 4	剱沢のC班・BCへ移動		三ノ窓にてB班と合流予定なるも不能。三ノ窓～剱岳頂上～剱沢C班・BC
	5. 5	下山		BC～長次郎出合までB班サポートに下降～合流後、室堂経由下山
	B班	馬場島～三ノ窓～剱沢を経て～室堂へ		行動日程・参加者ともに不明。
	C班	剱沢をベースに立山縦走		行動日程・参加者ともに不明。

年	月／日	山行名（または ルート名）	メンバー	参考事項
56	5. 2〜 5. 5	小窓尾根から剱岳登頂 早月尾根下降	メンバー　山本、岸本、山内。 ＝会報№12（1981）個人山行記録から＝	5. 2/富山〜馬場島泊。5. 3/馬場島〜小窓尾根〜1600上部で幕営。5. 4/幕営地〜ニードル〜ドーム〜マッチ箱〜小窓ノ頭〜三ノ窓幕営。5. 5/三ノ窓〜剱岳頂上〜カニノハサミ〜シシ頭〜伝蔵小屋〜馬場島〜帰神。
57	神戸山岳会会長　前田　浩氏は昭和57年9月、富山県・千寿ガ原の文部省登山研修所に於て開催の「全国登山研修所施設協議会」に出席し、会議終了の9月22日同行の（神戸市役所山岳部所属、当時神戸市立王子スポーツセンター所長）松本行雄氏と立山三山を縦走、剱御前小屋に一泊。 翌昭和57年9月23日剱岳を目指すも、薬師岳方面雨模様につき前剱頂上から引き返す途中、剱御前のトラバースルートの平坦部分で休息せんとして倒れ、急逝さる。＝会報№14（1982）掲載「前田浩氏事故経過報告」から抜粋＝			
58	8. 13〜 8. 15	夏山合宿	ＣＬ小林、ＳＬ幸内。川辺、広池、大西、国沢、および岸本。	会報№16（1983）昭和58年度夏山合宿報告から。
	8. 13	入山　馬場島〜池ノ谷〜三ノ窓		
	8. 14	a、チンネ左稜線	小林、川辺。広池、大西の2パーティで登攀	
	〃	b、剱尾根上半	岸本、幸内、国沢。	ＢＣ〜Ｒ３〜ドームノ頭〜長次郎ノ頭〜剱岳頂上〜ＢＣ
	8. 15	下山　台風接近により1日繰上げ撤収		ＢＣ撤収〜長次郎谷〜剱沢雪渓〜別山乗越〜室堂〜美女平を経て帰神。
59	8. 10〜 8. 16	夏合宿	小林、迫田、吉田、大西、国沢、馬場、広池、堀田、幸内、種子。	会報№17（1985）昭和59年度夏山合宿報告から。
	8. 11	8. 10前夜大阪発入山		黒四ダム〜真砂平。ＢＣ説営
	8. 12	Ａ：源次郎尾根縦走	迫田、広池、大西、国沢。 馬場、種子、幸内、堀田。	ＢＣ〜源治郎尾根〜剱岳頂上〜平蔵谷〜ＢＣ
	〃	Ｂ：源次郎尾根二峰	迫田、広池。	Ｃフェース登攀
	8. 13	Ａ：源次郎尾根一峰	小林、大西。	中央ルンゼ〜成城大ルート
	〃	Ｂ：源次郎尾根一峰	吉田、広池。	中谷ルート〜名古屋大ルート
	〃	Ｃ：八ツ峰上半	国沢、種子、幸内。	ＢＣ〜５・６のコル〜八ツ峰上半〜剱頂上〜剱御前〜剱沢〜ＢＣ
	〃	Ｄ：八ツ峰六峰Ａフェース	迫田、堀田、馬場。	
	8. 14	下山：Ａグループ	迫田、大西、広池、堀田。	ＢＣ〜池ノ平〜宇奈月〜富山を経て帰神。
	〃	下山　Ｂグループ	国沢、小林。	ＢＣ〜剱沢〜室堂〜富山を経て帰神。
	〃	Ｃグループ　下山第１日	吉田、種子、馬場、幸内。	ＢＣ〜黒四ダム。馬場はここから帰神。
	8. 15	〃　下山第２日	吉田、種子、幸内。	黒四ダム〜針ノ木峠で仮泊。
	8. 16	〃　下山第３日		針ノ木峠〜扇沢を経て帰神。

年	月／日	山行名（または ルート名）	メンバー	参考事項
54	8.12～ 8.17	夏山(A班)合宿	CL星野。SL幸内。 内藤(正)、神田、植原、上原、岸本。	会報No.9（1979）昭和54年度夏山合宿報告から。 ＊B班は毛勝三山へ9名が合宿＊
	8.12	前夜大阪発　馬場島～池ノ谷～三ノ窓	入山　三ノ窓へBC設営	岸本1日遅れ13日BCに合流。
	8.13	a、池ノ谷中央壁右ルート	内藤(正)、星野。	BC～R2～コルB～αルンゼ～中央ルンゼF4～ピナクル～剱尾根～BC
	〃	b、池ノ谷中央壁左ルート	神田、植原。	BC～R2～コルB～αルンゼ～ピナクル～剱尾根～BC
	〃	c、池ノ谷右俣ドーム稜	幸内、上原。	BC～R2～コルB～αルンゼ～中央ルンゼF4下～剱尾根ノ頭～BC
	8.14	a、池ノ谷左俣　R4	岸本、内藤(正)、星野。	BC～R4登攀～ドームノ頭～コルB～R2～BC
	〃	b、チンネ左稜線	神田、上原。	（左稜線登攀中T5付近で中央バンドからトラバース中のパーティ墜落をみたという）
	〃	c、八ツ峰六峰Dフェース富山大ルート	幸内、植原。	登攀後、八ツ峰上半をへてBCに帰着。
	8.15	チンネ日嶺ルート～aバンド～bクラック	神田、上原。	計画では休養日。内藤(正)池ノ谷から下山。他の4名は沈殿。
	8.16	剱尾根下半登攀	神田、植原。	岸本、星野、幸内、上原の4名は池ノ谷から下山。 BC～R7～コルC～ドームノ頭～R3～BC
	8.17	BC撤収　下山	神田、植原。	BC撤収～剱岳頂上～剱山荘～剱御前小屋～室堂～美女平経由8.18帰神。
55	8.10～ 8.16	夏山合宿	先発隊　CL小林。SL川辺。堀田、三原鍛冶。 後発隊(8.13出発)矢木、山本、萩本、山内。	会報No.11（1981）昭和55年度夏山合宿報告から。
	8.10	(前夜発)白馬駅～唐松岳～餓鬼ノ田圃		
	8.11	餓鬼ノ田圃～祖母谷～櫟平～阿曽原		
	8.12	阿曽原～仙人池～剱沢二股幕営		
	8.13	二股～三ノ窓BC設営		
	8.14	剱岳頂上往復		午後到着の後発隊を池ノ谷に迎える。
	8.15	(雨天)　停滞		午後三ノ窓雪渓で雪上技術訓練。
	8.16	(雨天)　下山		BC撤収～剱岳頂上～前剱～剱御前小屋～雷鳥荘～室堂～美女平経由帰神。

年	月／日	山行名（または ルート名）	メンバー	参考事項
52	8.13	入山　富山～馬場島～池ノ谷二俣		
	8.14	三ノ窓ＢＣ説営		
		A班　チンネの登攀	星野、幸内、神田。	左下カンテ～中央バンド～左方カンテを登攀。
		B班　剱尾根上半の登攀	岸本、梅原、田中、田村。	R２～コルＢを経て長次郎ノ頭～ＢＣ。
	8.15	A班　ドーム稜の登攀	星野、幸内、神田。	R２～αルンゼ～ドーム取付き点（ルートの名称不明）～長次郎ノ頭
		B班　八ツ峰上半	岸本、梅原、田中、田村。	ＢＣ～剱岳頂上～平蔵谷～長次郎雪渓～５・６のコル～八ツ峰上半縦走～ＢＣ。
	8.16	A班　八ツ峰六峰Ｄフェース	星野、幸内、神田。	富山大ルートから取付き久留米大ルート登攀。
		B班　池ノ平・仙人池往復	田中、田村。（岸本、梅原、池ノ平から下山）	ＢＣ～小窓～池ノ平山～池ノ平小屋～仙人池～二股～三ノ雪渓～ＢＣ。
	8.17	ＢＣ撤収、下山		三ノ窓～二股～ハシゴ段乗越～内蔵助平～黒四ダム～大町～松本～帰神。
53	夏山合宿（A班、B班共に、8.12大阪発）			月報No.85（53.12.1）号「夏山合宿報告」から。
	8.13～8.16	A班（黒部丸山・黒部別山谷周辺）	三浦、星野。	合宿後半B班と合流予定なるも、アクシデントにより２名のみの山行となる。
	8.13	入山　丸山東壁　左岩稜登攀		大町～扇沢～黒四ダム～内蔵助谷～丸山東壁下部にＢＣ説営～丸山東壁登攀
	8.14	休養　ハンノ木平周辺散策		
	8.15	別山谷左俣　大スラブ壁登攀		ＢＣ～ハンノキ平～別山谷出合～別山谷左俣～大スラブ壁登攀～別山谷出合～ハンノキ平にて幕営
	8.16	下山（大町経由帰神）		ハンノキ平～黒四ダム～扇沢～大町。
	夏山合宿			月報No.85（53.12.1）号「夏山合宿報告」から。
	8.13～8.15	B班（剱岳西面）	幸内、矢木、上原、萩本、内藤（正）、岸本、野上（芳）。	
	8.13	入山　池ノ谷二俣にＢＣ説営		富山～上市～馬場島～白萩川～小窓尾根～池ノ谷二俣・ＢＣ説営
	8.14	登攀日　池ノ谷右俣上部から退却	全員ドーム稜登攀を目指すが、アクシデントにより登攀中止。	ＢＣ～ドーム稜へ向かう途中、池ノ谷右俣上部で雪渓崩壊、３名巻き込まれるも無事救出。計画変更しＢＣ撤収～雷岩迄下降し、幕営。
	8.15	下山（富山経由帰神）		雷岩～馬場島～富山。

年	月／日	山行名（または ルート名）	メンバー	参考事項
50	8.13	入山　第４日　五色ガ原～剱沢		立山縦走～剱岳幕営
	8.14	三ノ窓ＢＣ設営		剱沢～長次郎雪渓～三ノ窓ＢＣ設営 後発隊・馬場島～池ノ谷～三ノ窓（ビバークし翌朝合流）
	8.15	新人班：剱岳頂上往復	メンバー不詳	前半、三ノ窓雪渓にて雪上訓練を行う。
		中堅班：チンネ等登攀	星野、田中。	チンネジャンダルムＰ１、チンネ左稜線下部(報告には8.14とあり)
	8.16	中堅班：チンネ登攀	星野、田中。	チンネ中央チムニー、左稜線上半（記録には日付記載なし）
		新人班：八ツ峰上半	メンバー不詳	
	8.17	剱沢～室堂経由下山		ＢＣ撤収、三ノ窓～長次郎雪渓～剱沢。
50	8.12	第１日　室堂～立山三山縦走～剱山荘泊	大樫正之(単独行)。	月報№78（50.9.10）号 剱岳単独山行報告から。
		第２日　一服剱～前剱～剱岳～三ノ窓	合宿中のＢＣ訪問不能なるも、宮永泰男君の墓碑参詣し、下山した模様。	山行月日は明らかでないが、合宿報告の中の内藤正司君の(後発隊)入山報告に、池ノ谷下降中の大樫さんとの出会いのくだりあり。これから逆算して、日程を(編者が)記入した。
	8.14	第３日　三ノ窓～小窓王～池ノ谷～下山		
51	8.9～8.15	夏山合宿　8.9 大阪発	ＣＬ宮本、ＳＬ古賀。神田、相馬。(後発隊)幸内、植原。	月報№81（51.11.17）号「夏山報告」から。 合宿中8/11、12日以外は雨にたたられた模様。
	8.10	入山　第１日　富山～馬場島山荘		数日来の雨のため白萩川増水により、渡渉に危険を感じ途中から引き返したとのこと。
	8.11	馬場島山荘～早月尾根・伝蔵小屋で仮泊		
	8.12	伝蔵小屋～剱岳本峰～三ノ窓ＢＣ説営	雪上訓練：宮本、相馬。	
		午後雪上訓練、及びチンネジャンダルム	チンネジャンダルム、Ｄクラック：古賀、神田。	報告には「Ｄガリー」と記されているが？
	8.13	剱尾根上半の登攀	メンバー不詳なるも、先発隊全員（４名)か？	後発隊三ノ窓へ、ＢＣ合流。
	8.14	ＢＣ撤収～剱沢小屋泊	６名全員	雨、午後ＢＣ撤収。夜間強風雨であった由。
	8.15	下山　剱沢小屋～雷鳥沢～室堂		
	8.12～8.18	夏山合宿　8.12大阪発　8.18帰神	ＣＬ星野辰也、ＳＬ幸内義孝。岸本光弘、梅原慶彦、田中正裕、田村勝美、神田章吉。	月報№83（53.3.15)号「夏山合宿報告」から。

年	月／日	山行名（または ルート名）	メンバー	参考事項
	8.6 8.7 8. 8 8. 9 8.10 8.11 8.12 8.13 8.14	仙人池泊 三ノ窓着 チンネほか登攀 チンネほか登攀 A班メンバーと行動をともにする チンネ登攀 ——雨・停滞—— 撤収　三ノ窓～別山平へ 下山　剱御前～雄山～一ノ越～室堂	（報告文中に記載はないものの、46年夏山合宿A班と合流した模様）	チンネ・中央チムニー～中央バンド～頂上～クレオパトラニードル登攀～帰幕 チンネ・北条・新村ルート～gチムニー・dクラック～頂上。 A班（釜本、朝倉、池田）到着。合流後片山、福島、ジャンダルムP1・P2登攀 池ノ谷左俣～右俣へ 左稜線下部ベルニナルートから左方ルンゼ～中央バンド～aバンド・bクラック 片山、福島の2名下山にかかる。
47	冬　山	早月尾根トレース	釜本孝彦を含め4名であった模様。	月報No.70(47. 6. 14)「剱岳の印象」と題する感想文による。(10日間の日程で計画の由。メンバー・行動の詳細等不明)
48	夏　山	三ノ窓を基地に合宿	野上哲男。その他日程・参加者等一切不明。	月報No.71（48. 7. 1）掲載「夏山合宿雑感による。
48	時期不明個人山行	室堂～剱山荘～本峰～二股～阿曽原	萩本維都子。その他日程・参加者一切不明。	月報No.72（48. 10. 1）掲載萩本維都子の「剱岳」紀行から。
49	夏　山 （8. 17）	8. 13大阪発。14・15・16日の3日間をかけ、針ノ木～平ノ渡～五色ガ原～立山～剱沢への縦走 登攀　源治郎尾根平蔵谷側一峰フェース	（日程・行動メンバー等の詳細不明）報告・星野辰也。 8. 17剱岳本峰登頂。8. 18雷鳥沢から室堂経由帰神した模様。 内藤正司、三浦靖男。	月報No.76（49. 11. 27）掲載「夏山合宿」から。田中正裕の感想文に、「八ツ峰上半縦走」とあるも内容不明。登攀報告は次のもののみ。 三浦靖男の「登攀報告」から。
	8. 9 8. 17	夏山合宿（8. 9大阪発）	CL三浦靖男　SL宮本朋之。幸内義孝、桂　正弘、堤　康正、片山富美子、星野辰也、田中正裕、前田正英、鮑　碧琴、岩崎敏明。(後発隊)岸本光弘、田中享三、内藤正司、間島敬介。	月報No.78（50. 9. 10）号夏山報告から。 合宿後半台風5号の日本上陸あった由。
	8.10 8.11 8.12	入山　第1日　富山～薬師峠 入山　第2日　薬師峠～五色ガ原 入山　第3日　五色ガ原周辺探訪		富山～有峰口～折立～太郎兵衛平～薬師峠 薬師峠～薬師岳～スゴ乗越～五色ガ原 前田、堤の2名、五色ガ原から室堂経由下山。

年	月／日	山行名（または ルート名）	メンバー	参考事項
	〃	b 剱岳往復	記録：岡村。その他メンバーの記録なし。	ＢＣ～別山尾根～頂上～長次郎出合～ＢＣ
	5. 3	a 奥大日岳往復	野上(芳)、乾、片山、朝倉、岡村、立岡。	ＢＣ～別山乗越～頂上～ＢＣ
	〃	b 立山往復	内藤、星加、南、川島、笠井。	ＢＣ～別山～真砂岳～大汝山～雄山～別山～ＢＣ
		＝以下行動記録不詳＝		
46		夏山合宿　A班の記録	合宿期間、参加者ともに詳細不明。記録担当：釜本孝彦と計画書に記載。	月報№68（46. 11. 5）夏山合宿報告から収録
	8. 10	登攀　池ノ谷左俣～右俣～早月尾根～頂上～三ノ窓ＢＣ	釜本、朝倉、片山、福島、池田。	ＢＣ～池ノ谷左俣～二俣～右俣～中央ルンゼ～長次郎ノコル～チムニー状のルンゼ手前～インゼル～早月尾根～頂上～池ノ谷乗越～三ノ窓ＢＣ
	8. 12	――記録なし――	岡本、朝倉。（記録・岡本正則）	当日他に右俣奥壁へ２名登攀に向かった模様。
	8. 13	――雨・停滞――		
	8. 14	R 7～剱尾根登攀		
	8. 15	――雨・停滞――		
	8. 16	ＢＣ撤収三ノ窓～池ノ谷～馬場島		
		夏山合宿　B班の記録	合宿期間不詳。	月報№68（46. 11. 5）夏山合宿報告から収録
	8. 8	入山　富山～千寿ガ原～称名滝～大日平山荘	野上(博)、小崎、田中、上宮、笠井、沢田、古賀、西原。(合宿期間不詳)	
	8. 9	入山第２日　大日平山荘～大日小屋～奥大日岳～室堂乗越～剱御前～剱沢		
	8. 10	ＢＣ設営　剱沢～長次郎雪渓出合～長次郎ノコル～三ノ窓		途中、長次郎雪渓で雪上訓練を行う。
	8. 11	本峰往復		
	8. 12	――記録なし――		
	8. 13	――記録なし――		
	8. 14	剱尾根上半及び八ツ峰上半縦走	乾、田中、西原、沢田、古賀、笠井。	ＢＣ～R 2取付き～コルＢ～ドーム往復～剱尾根ノ頭～池ノ谷乗越～長次郎雪渓～八ツ峰５・６のコル～六峰～八ツ峰頭～三ノ窓ＢＣ
		＝以下記録なく不詳＝		
		欅平から剱沢へ	片山　明、福島。	月報№68（46. 11. 5）個人山行報告から収録
	8. 4～8. 15	欅平から剱沢へ		
		8. 4 大阪発 8. 5 阿曽原泊		

年	月／日	山行名（または ルート名）	メンバー	参考事項
	〃	b、チンネ　日嶺ルート　aバンドbクラック	数野、前川。	登攀後、数野は乾と共に池ノ谷左俣偵察。後発隊ＢＣ到着。
	8.15	a、Ｒ４～剱尾根～中央ルンゼ	数野、釜本。	雷雨により中央ルンゼＦ11上部でビバーク。8.16、ＢＣに帰着。
	〃	b、八ツ峰六峰Ｄフェース	田中、岡。	奥田君夫妻はベースキーパーを勤める。
	〃	c、剱岳西面偵察	乾、内藤、前川。	池ノ谷、早月尾根周辺の偵察行。
	〃	d、チンネ　中央チムニー	岡、内藤、前川。	登攀中雷雨。乾、田中、土居のサポートをうける。
	8.16	a、数野パーテイのサポート	乾、田中、岡、土居、前川。	
	〃	b、チンネ　左下カンテ～Ｃクラック	乾、岡、前川。	数野パーテイのサポートの後登攀を行う。
	〃	c、チンネ　左稜線	土居、内藤。	登攀終了後剱沢二股にＢＣを移動、Ａ班と合流。
	8.17	ＢＣ撤収～（下山路はＡ班と同様）	本隊下山。岡、土居、釜本の３名は残留。	雨の中を下山。残留の３名は8.17停滞し、8.18中央ルンゼ～上部フエース登攀後、室堂最終バス乗車。
44	4.28～5.6	丸山東壁周辺	ＣＬ田中享三、岡　春海、釜本孝彦、木村耕治。 (後発)岸本光弘、星加弘之。	月報No.55（44.8.7）春山合宿Ａ班報告から収録。
	4.29	大町～黒四ダム～内蔵助谷右岸幕営		
	4.30	大タテガビン偵察		
	5.1～5.2	丸山東壁緑ルート登攀	田中享三、岡　春海、釜本孝彦。	中央バンド（右の岩小屋）でビバーク。木村はＢＣキーパー。
	5.3	5/4 登攀のルート偵察	田中享三、岡　春海、釜本孝彦、木村耕治。	後発メンバーＢＣ到着。
	5.4	a　丸山東壁　左岸稜登攀	岡　春海、星加弘之。	
	〃	b　丸山東壁　右岸稜登攀	田中享三、釜本孝彦。	
	〃	c　ハシゴ段乗越方面	岸本光弘、木村耕治。	
	5.5	ＢＣ撤収～黒四ダム～大町経由帰神へ		
45	4.28～5.5	剱岳春山合宿	参加者の明記なし	月報No.62（45.6.16）春山合宿報告から収録。 山行期間は、月報No.61春山合宿計画案から。
	4.29	富山～天狗小屋～剱御前小屋下ＢＣ		
	4.30	雪上技術訓練		
	5.2	a　八ツ峰六峰Ｃフェース～八ツ峰上半	Ｌ星加、内藤、立岡。	

年	月／日	山行名（または ルート名）	メンバー	参考事項
	8.10	A班・アタック。		
	〃	B班・剱尾根上半登攀～剱岳頂上～BC。		
	8.11	A班・アタック。		
	〃	B班のa、八ツ峰上半。B班のb、八ツ峰マイナーピークから下半部登攀。		
	8.12	チンネ各ルートからの集中登攀。		
	8.13	BC撤収～剱沢二股～ハシゴ段乗越～内蔵助平で幕営。		
	8.14	内蔵助平～白竜峡～十字峡～下ノ廊下～阿曽原から富山へ下山。		
43	剱岳夏山合宿			月報№49（43. 7. 15）掲載の夏山合宿計画および月報№50（43. 9. 15）掲載の夏山報告から収録。
	8.10 8.18	A班（新人パーテイ）	（先発）L野上（芳）、間島、荒木、谷田、光田、内藤（正）。 （後発）岸本、河原、小島。	
	8.11	富山～折立～太郎小屋～薬師平直下		薬師平直下に幕営。
	8.12	幕営地～薬師岳～スゴ乗越～越中沢岳		鳶岳手前のコルで幕営。
	8.13	幕営地～五色原～獅子岳～浄土山～雷鳥沢（幕営）		
	8.14	幕営地～剱御前小屋～剱沢二股BC設営		
	8.15	登攀日　八ツ峰上半縦走～三ノ窓～剱沢二股BC	6峯Aフエース野上、内藤。 一般ルート岸本、間島、光田、吉田。	B班三ノ窓到着　BC設営。 A班およびB班乾、田中ら小窓王の宮永君の碑参詣。
	8.16	登攀日　BC～三ノ窓～池ノ谷～R 2～剱尾根上半縦走～BC	（登攀メンバー不詳）	B班の三ノ窓BC撤収協力。
	8.17	下山日　BC撤収～ハシゴ段乗越～内蔵助平～黒四ダム～扇沢～大町		
	8.10 8.18	B班（中堅パーテイ）	（先発）　L乾　昌弘、田中享三、数野満義、岡　春海、前川泰祥。 （後発）　釜本孝彦、内藤保一、奥田保雄、奥田正美。土居健次（8.15：BCに合流）。	
	8.11	大町～黒四ダム～内蔵助谷出合～内蔵助平幕営		
	8.12	内蔵助平～黒部別山周辺偵察～内蔵助平		丸山東壁・南東壁、大タテガビン等のほか、乾、岡の2名はハンノ木平、第二尾根フランケ偵察。
	8.13	内蔵助平～ハシゴ段乗越～剱沢二股～三ノ窓・BC設営		
	8.14	宮永君の碑参詣後登攀		
	〃	a、チンネ左稜線他	田中、岡。	登攀後、小窓尾根からR 4～ドーム北壁偵察。

年	月／日	山行名（または ルート名）	メンバー	参考事項
39	8.10 8.11 〃	池ノ谷二俣にＢＣ設営 Ａ・Ｒ４登攀 Ｂ・剱尾根登攀	 宮永、奥田。 ａパーテイ・乾、松岡。ｂパーテイ・梅原、田中。	 取付き点上部から宮永転落、死亡す。 Ｒ10からコルＤ、コルＣをこえドームノ頭へ。ここで法政大学山岳会会員から伝言をうけ救援に向い、他パーテイの協力で三ノ窓へ収容。

8.11／第一次救援隊神戸発。Ｌ金田　晏、岸本光弘、山本光矢、北出智章。
8.12／早朝から遺体収容作業。警察官３名、山岳パトロール隊４名および三ノ窓方面入山中のパーテイの協力で剱沢小屋到着。
〃／第二次救援隊神戸発。前田浩をチーフに、宮永君の父君および弟さん。船橋　亘（当日夕先発）、三木善隆、宮松暁、梅原秀平、野上芳宏、丸屋信雄、堀野和子、藤本卓民、岡崎群治、ならびに川崎重工勤務の上村知義氏の13名。
8.13／遺体は室堂でご両親と対面、美女平、千寿ガ原経由富山へ下山、斉場にて火葬の後、8/14帰神。

年	月／日	山行名（または ルート名）	メンバー	参考事項
40	剱岳春山（計画の概要） ＝5.1・神戸発・5.5・ＢＣ撤収予定の計画＝ 1. 合宿開始前　先発隊、槍岳から縦走後合流の予定 2. 合宿の前半　ＢＣを剱御前乗越に設営 3. 合宿後半　剱岳から薬師岳縦走（5.5ＢＣ撤収後縦走） 5. 2　弥陀ガ原～雷鳥沢幕営 5. 3　～別山乗越ＢＣ設営後雲上訓練 5. 4　本峰～平蔵谷からＢＣ帰着 5. 5　ＢＣ撤収（雷鳥沢経由下山又は縦走へ）	ＣＬ野上博司、ＳＬ乾　昌弘、梅原慶彦、武田　禎、河原武夫、数野満義、釜本孝彦、土居健次、稲垣　勲、伊集院正彦、桧垣忠彦。大樫正之、岡崎群治、野上芳宏、岸本光弘、金田　晏、田中享三、北川福一、宮松　暁、萩原邦一、小島勝俊。	月報№35（1965.5）掲載の「春山合宿計画」から 槍岳～剱岳縦走班4.28神戸発・岡崎群治、萩原邦一、小島勝俊、数野満義、のうち岡崎、数野、小島は、5.2 入山後合流。合宿計画のみ。
40	剱岳夏山（計画の概要） ＝8.7・神戸発・8.16帰神予定の計画＝ 山行目的 1. 故宮永泰男君の追悼山行とする 2. 中堅メンバーの養成及びバリエーションルートからの登攀 3. 新人に対するロッククライミング技術の向上と剱岳西面の概念を把握させる 8. 8　上市～馬場島～池ノ谷二俣に幕営。 8. 9　二俣～三ノ窓～宮永君の慰霊碑建立後追悼式～式後ＢＣ設営。	ＣＬ大樫正之、Ａ班・Ｌ岡崎群治、追悼式・Ｌ萩原邦一、 Ｂ班・ＣＬ小島勝俊、Ｂ班・ＳＬ梅原慶彦、土居健次、釜本孝彦、伊集院正彦、稲垣　勲、河原武夫、岡　春海、河股武智、桧垣忠彦、北川福一、数野満義。	月報№35（1965.5）掲載の「夏山計画」から 故宮永泰男君の慰霊碑は、小窓王ノ頭に池ノ谷を見渡す位置に設けられた。 （この項丸屋が弥陀ガ原から入山した記憶から） 合宿計画のみ。

年	月／日	山行名（または ルート名）	メンバー	参考事項
38	8.17		股武智、田中享三。	
	8.13	チンネ左稜線	乾、奥田。	
	〃	池ノ平方面偵察	名村。	
	〃	剱岳登頂	B班全員。	帰途長次郎雪渓で雪上技術訓練を行う。
	8.13～14	小窓尾根登攀	山本、北出、谷口。	小窓尾根下部から小窓王までの積雪期の偵察。
	8.14	チンネ日嶺ルート他	山本、北出。	中央バンドからgチムニーcクラック登攀。
	〃	剱尾根登攀	萩原、名村、朝倉。	R10から取付き剱尾根ノ頭までの縦走登攀。
	〃	池ノ谷中央ルンゼ	奥田、乾。	池ノ谷右俣から剱尾根のコルAまでの登攀。
	〃	B班三ノ窓にBC設営	（村井、松岡を除く）B班全員。	村井、松岡下山。
	8.15	雪上訓練	A・B班合同で実施。	名村本峰経由下山。
	8.16	本隊下山（池ノ平～阿曽原）	（北出、谷口を除く）A・B班。	萩原、乾両名は本隊と別れ双六池まで縦走。
	〃	チンネ左稜線と八ツ峰六峰Cフェース	北出、谷口。	
	8.17	遭難救助応援	北出、谷口。	8.16チンネジャンダルムでの事故の負傷者を、遭難者所属のパーティ、FRC、岳窓会パーティとともに、池ノ谷二俣に待機の救助隊までの搬送に協力。
	8.18	残留隊下山（池ノ平～阿曽原）	北出、谷口。	
38	10.26～28	剱岳小窓尾根偵察	L萩原邦一、金田　晏、小島勝俊。	会報第8号「剱岳を中心とした会の動き」から。1600のコルから上部へ縦走し仙人谷に下る。
39	3.15 3.23	剱岳春山合宿 小窓尾根登攀～剱岳 早月尾根下降	CL金田晏、北出智章、乾昌弘、宮永泰男。	会報第8号「剱岳を中心とした会の動き」からおよび月報第32号の報告から収録。 3.15　入山、ブナクラ谷出合幕営。 3.16　風雪、停滞。 3.17　1600mコル幕営。 3.18　ニードル下方で幕営。 3.19　マッチ箱ピーク第一岩峰上で幕営。 3.20～21　風雪、停滞。 3.22　三ノ窓～剱岳頂上～早月尾根1800m幕営。 3.23　馬場島経由上市へ下山。
	8. 9～17の予定 8. 9	剱岳合宿 入山雨天、白萩川取入口で幕営	CL宮永泰男、乾昌弘、奥田保雄、松岡新一、田中享三、梅原慶彦。	会報第8号「故宮永泰男君追悼号」から 8/11、午前10時頃、R4登攀の宮永泰男遭難。

年	月／日	山行名（または ルート名）	メンバー	参考事項
	〃	剱尾根側壁　ドーム西壁	パーテイ・三木、宮永。	初登攀。
	8.14	中央ルンゼ	パーテイ・小島、谷口、梅原、松本。	Ｆ３で、梅原落石をうけて負傷。
	〃	剱西面偵察	パーテイ・大樫、朝倉、堀野、名村。	池ノ谷二俣から左俣～早月支尾根～シシ頭。
	〃	剱東面偵察	パーテイ・三木、乾、江村、山田、奥田。	池ノ谷～主稜線～剱岳頂上～平蔵谷～八ツ峰上半縦走。
	〃	東大谷Ｇ３登攀	パーテイ・岸本、金田、宮永。	
	〃	後発隊入山（ＢＣに入る）	（萩原、丸屋、榊）	ＢＣから萩原、丸屋は梅原を迎えに左俣下降。朝倉炊事中熱湯をこぼし行動困難となる。
	8.15	梅原（剱沢小屋で治療後）下山	岸本、三木、小島同行。	梅原の手当後、小島はＢＣに戻る。
	〃	ドーム稜　中央壁下部	パーテイ・谷口、松本。	左オーバーハング・ルート試登、初登攀。
	〃	剱尾根主稜	パーテイ・大樫、丸屋。	Ｒ７～コルＣ～ドーム～コルＢ～Ｒ２～ＢＣ。
	〃	チンネ登攀	パーテイ・乾、江村、奥田、山田。	
	8.15～16	剱尾根ドーム北壁　上・下半完登	パーテイ・金田、宮永。	初登攀。雷雨のため夕刻一旦ＢＣに帰り、翌日Ｒ５から登攀再開、完登。
	8.15～16	ドーム稜　奥壁左岩稜	パーテイ・萩原、榊、名村。	Ｒ２～αルンゼ～中央ルンゼ～雷雨にあいＧ２中間部のテラスでビバーク。翌8.16ビバーク地点からＧ１を登り奥壁ノ頭を経てＢＣに帰着。
	8.16	剱尾根主稜上半	パーテイ・小島、谷口、	
	〃午前	剱尾根上半を登る	大樫、丸屋、朝倉および行動中の７名以外	萩原パーテイをサポートに。コールを聞いて登攀す。
	〃午後	チンネ		
		1. 北条・新村ルート～ＡバンドＢクラック	パーテイ・萩原、名村。	
		2. 北条・新村ルート～ＧチムニーＣクラック	パーテイ・谷口、榊、江村。	
		3. 左稜線	パーテイ・小島、堀野、奥田、乾。	
		ジャンダルム～Ｐ２	パーテイ・丸屋、山田。	
	8.17	撤収、下山		三ノ窓～小窓王の廃道～小窓頭のコル小窓雪渓～池ノ平～仙人谷～阿曽原経由下山。
	8.11	剱岳合宿		会報第８号「剱岳を中心とした会の動き」からおよび月報23号掲載の合宿報告から収録。
		Ａ班	Ｌ山本光矢、北出智章、乾昌弘、奥田保雄、名村彰男、朝倉美子、谷口忠男。	
		池ノ谷から入山		
		8.12三ノ窓にＢＣ設営	ＣＬ萩原邦一、大樫正美（後発8.13合流）。	
		Ｂ班		
		弥陀ガ原から入山	ＣＬ梅原秀平　ＳＬ三木善隆、松岡新一、村井正典、小谷信之、河	
		8.12別山平にＢＣ設営		

年	月／日	山行名（または ルート名）	メンバー	参考事項
36	8.13	八ツ峰班	大樫、梅原、和泉、谷口、松本、榊、名村、尾川。	
		源治郎尾根班	萩原、宮松、米沢、大樫(正)、山本、太田、朝倉。	
	8.14	チンネ　神戸山岳会ルート～日嶺ルート	梅原、尾川。	
	〃	チンネ　日嶺ルート	谷口、名村、山本、松本。	岸本、萩原、名村、谷口、榊は残ってチンネ左稜線を登り、池ノ平にキャンプした。
37	5. 1～5. 6	剱岳合宿		会報第8号「剱岳を中心とした会の動き」からおよび月報14号・15号掲載の報告から収録。
	4.30発	A班　剱岳・池ノ谷	L萩原、岸本、三木、宮永。	池ノ谷二俣にBC。
	5. 2	R4アタック	パーテイ・萩原、岸本。	初登を目指すが惜しくも失敗。
	5. 2～3	池ノ谷二峰南壁右岩稜と剱尾根主稜連続登攀	パーテイ・三木、宮永。	二峰南壁右岩稜の初登攀に成功。二峰頂上でビバーク。二峰頂上～コルC～ドーム頭～二俣BC。
	5. 3～4	池ノ谷ドーム稜	パーテイ・萩原、岸本。	ドーム稜登攀等でビバーク。最終ピッチで、岸本落石で負傷するも完登。
	4.28発	B班　剱岳　東面	L丸屋、小島、山本、谷口、名村。	別山乗越にBC。
	4.30～5.1	源治郎尾根縦走	パーテイ・小島、山本、谷口、名村。	一峰のコルでビバーク。縦走後八ツ峰へ向うが天候悪化、BCに戻る。
	5. 2	前剱西尾根	パーテイ・山本、谷口。	
	5. 2	立山往復	名村。	小島目を痛めテントに残る。
	5. 3	雪上技術訓練	丸屋合流。	B・C・D班合同で実施。
	5. 1発	C班　剱岳　スキー	L掘野、吉岡、榊。	雷鳥荘付近にBC設営。女性のみの独立パーテイで積雪期の山行ができるようになった。
	5. 4	雄山往復		
	5.5～6	剱御前往復、雷鳥沢周辺スキー等	〃	BC撤収後室堂から弘法までスキーで下る。
	5. 1発～5	D班　剱岳	L大樫、三宅、乾。	剱沢に雪洞のBC設営。後半はB班と行動を共にする。
	5. 5	B・D班　立山川下降下山	L大樫、三宅、乾、丸屋、山本、谷口、名村。	小島のみ 5.4、弥陀ガ原経由先行下山。
37	8.11～8.18	剱岳合宿	CL大樫正之、岸本光弘、金田　晏、梅原秀平、三木善隆、宮永泰男、谷口忠男、小島勝俊、朝倉美子、名村彰男、松本英男、乾　昌弘、奥田保男、江村重則、山田　洋、堀野和子。 SL萩原邦一、丸屋信雄、榊　雅子(以上後発)。	会報第8号「剱岳を中心とした会の動き」からおよび月報15・16号掲載の報告から収録。 充実した内容の合宿。第2期黄金時代にふさわしい成果をあげた。 しかし梅原、朝倉の負傷があって、災害ムードがただよい始めた。(この項会報から)
	8.12	本隊(大樫ほか15名)入山		白萩川から池ノ谷へ、二俣に幕営。
	8.13	R4登攀	パーテイ・岸本、金田。	本隊、三ノ窓にBC設営。午後雪渓訓練。

年	月／日	山行名（または ルート名）	メンバー	参考事項
			岸本。	のため荷上げ、ジャンダルムＰ１～池ノ谷乗越～長次郎谷～ＢＣ Ｃ　本峰～池ノ谷乗越～長次郎谷～ＢＣ
	8.16	Ｂ　チンネ各ルートのアタック	メンバー　9名	
	〃	Ｃ　立山縦走	メンバー　9名	
	8.17	Ａ　剱尾根左俣側Ｒ３からドーム頭登攀～池ノ谷奥壁偵察	メンバー　5名(前日と同様)	8.17　真砂平キャンプ地にてコンパ。
	〃	Ｂ　Ａ班サポート	メンバー　9名	
	〃	Ｃ　剱沢下降～二股	メンバー　9名	8.18　小雨の中ＢＣ撤収　下山の途につく。
35	5. 1 5. 4	剱岳合宿 別山乗越にＢＣ頂上～池ノ谷乗越～主稜縦走	福岡、三木、萩原、宮永、野上(芳)、野上(博)、藤本。	会報第８号「剱岳を中心とした会の動き」から以下35年夏（8.13～8.18）まで、同じ。 成果も意気もあがらぬ山行であったと反省。
35	8.13 8.18	剱岳西面合宿	Ｌ萩原、野上(芳)、野上(博)、岸本、三木、藤本、船橋、羽田、宮永、金田、日高、西島、小島、北出。	池ノ谷から入山。雨中の池ノ谷遡行に難渋したが、三ノ窓にＢＣ設営。 天候に恵まれて大活躍し、めぼしいルートの大部分をトレース。仙人谷を下山。
	8.17	中央ルンゼ 奥壁ドーム稜 剱尾根主稜 チンネ左稜線 ンネ右方ルンゼ チンネ左方カンテ	金田、藤本、宮永、船橋。 岸本、野上(博)。 萩原、岸本、野上(芳)、 三木、羽田。 萩原、西島。 野上(芳)。	チンネに残された数少ない未登ルートの一つを登る。恐らく初登であろう（岳人172号）。
36	4.29 5. 1	剱岳合宿 剱尾根、チンネ試登	野上(芳)、野上(博)、岸本、宮永、金田、小島。	会報第８号「剱岳を中心とした会の動きから 池ノ谷から入山。三ノ窓にＢＣ。雪の剱岳西面の概念把握。早月尾根を下山。
	8.12 8.16	剱岳合宿	ＣＬ山本光矢、ＳＬ谷口忠男、朝倉美子。 大樫、宮松、大樫(正)、松本、太田(弘)、名村、尾川、萩原、和泉、梅原、米沢、岸本。	会報第８号「剱岳を中心とした会の動き」からおよび月報1961.8No.5からの記録による。 別山平、二股にキャンプ。源治郎尾根、八ツ峰上半の縦走、チンネの一般ルートのトレースを行う。

年	月／日	山行名（または ルート名）	メンバー	参考事項
		1. センターチムニー右リッジより頂上ダイレクト	広瀬、新川(利)。	
		2. センターチムニーより頂上ダイレクト	十川、新川(雅)、久保。	
		3. センターチムニーより右方リッジ	三宅、新居、福田(早)。	
		4. 左ルンゼより右方ルンゼ	新川(和)、片山、縣。	
		5. 左ルンゼより頂上ダイレクト	新川(成)、前田、福田(耕)。	
		6. チンネ・ジャンダルムセンターチムニーより右方ルンゼ	井上、林。	
32	8. 5 8. 10	剱岳合宿 クレオパトラニードル 八ツ峰上半	川本、三宅、久保、小川、岡崎、他8名。	会報第8号「剱岳を中心とした会の動き」から【以下34年春（4. 26～5. 1）の記録まで同じ。】 5日間のうち雨のため1日の行動に終る。
33	4. 29 5. 4	剱岳合宿 弥陀ガ原～剱岳 早月尾根～剱岳～弥陀ガ原	大樫、野上(芳)、香地、岸本、藤本、野上(博)。 松岡、萩原。	休暇の関係で1パーティは早月尾根に雪洞を進め、剱岳から弥陀ガ原に下る。 他は弥陀ガ原から雄山、剱岳を往復する。
33	8. 13 8. 19	剱岳合宿 五色ガ原～針ノ木峠縦走	川本、三宅、大樫、岸本、野上(芳)、小川、萩原、岡崎。 三宅、大樫、川本、小川、岡崎。	BCを真砂平におき、六峰フェースに2パーテイ、その他八ツ峰下半の縦走、源治郎尾根、チンネを全員9名で完登。 帰途、5名は五色ガ原から針ノ木峠を越える。
34	4. 26 ～5. 1	剱岳合宿	三宅、大樫、岡崎、萩原、船橋。	2日をかけてBCを頂上の肩に設け八ツ峰上半を登攀、帰途早月尾根を下る。
34	8. 12 8. 18	剱岳合宿	CL大樫正之　SL萩原邦一、香地博方、船橋　亘、清水良隆。野上芳宏、野上博司、岸本光弘、油谷　章、藤本卓民、丸屋信雄、宮松　暁、羽田正明、宮永泰男、萩原佐一、金田　晏、三木善隆、稲村耕吉、山田　洋、隆　宗寛、小島　隆、飯田圭介、垣内秀介。前田　浩。	会報第7号掲載 8. 12　先発隊真砂平にBCを設営 8. 13　本隊入山　BCに入る 8. 14　台風7号本土上陸、午前中豪雨なるも午後止む。 雪渓技術習得をかね平蔵雪渓を遡り源治郎尾根第二峰偵察。
	8. 15 〃 〃	東大谷　G1 東大谷　G2 A　池ノ谷・中央ルンゼ	オーダー　萩原、野上(芳)。 オーダー　香地、岸本。 オーダー　大樫、萩原、野上兄弟、	8. 15　A　平蔵谷～前剱～東大谷G1、G2登攀 B　9名　三ノ窓AC設営

剱岳山行記録集成表

（昭和24年合宿から昭和62年夏合宿まで）

年	月／日	山行名（または ルート名）	メンバー	参考事項
24	8.13 8.21	剱岳合宿	ＣＬ片山英一　ＳＬ新川利夫、川本　勉。 三宅、木村(次郎)、伊藤(博吉)、木村(泉三郎)、井上、十川、新川(和正)、新川(雅英)、大橋、生島、岩本。	会報第１号掲載 合宿記録　片山英一 登攀記録 チンネ中央チムニー右岩壁・岳人19号掲載 池ノ谷右俣奥壁中央壁・岳人19号掲載 その他25年合宿の登攀記録とともに、「剱岳ルート解説」に収められている。（会報No.８付表２による） 記念会報編集月報第４号４頁「デイリースポーツ紙の記事から」にも記載されている。
	8.16	チンネセンターチムニー	新川、井上。	
	8.17	チンネ中央チムニー右岩壁	新川、木村(泉)。	
	〃	東大谷チョングラピーク	三宅、川本。（試登）	
	8.18	池ノ谷　右俣（剱尾根）奥壁中央部	新川、木村(次)、木村(泉)。	
	8.20	東大谷　Ｇ３　ドーム	新川、三宅。	
25	8.7 8.21	剱岳合宿	ＣＬ片山英一　ＳＬ前田　浩。 広瀬、新川(利夫)、川本、三宅、井上、林、新居、福田夫妻、新川(成信)、十川、新川(和正)、新川(雅英)、縣、久保、福田(耕)、松本。他に苅部(途中から帰神)。	会報第３号掲載 合宿記録　前田　浩 登攀記録　各パーテイから
	8.13	龍王東尾根(永島尾根)	新川(和)、縣、新川(雅)、久保。	
	8.15	東大谷　中尾根	広瀬、川本。	
	〃	前剱沢	井上、林。	
	〃	剱南面フエースＡ３稜	十川、新川(雅)。	
	〃	剱岳頂上縦走	前田、新居、新川(成)、福田(耕)、福田(早)、久保、縣、松本。	
	8.16	剱南面フエースＡ１稜	十川、新川(和)、新川(雅)。	
	〃	剱南面フエースＡ２稜	井上、林。	
	〃	東大谷　Ｇ２尾根背面	Ａ・林、新川(雅)。 Ｂ・十川、新川(和)。	
	〃	源治郎尾根縦走	前田、新居、新川(成)、福田(正)、縣、久保、福田(耕)。	
	〃	剱頂上北東稜岩壁	片山、川本。	
	8.17	東大谷　Ｇ１尾根	井上、林。	
	〃	八ツ峰　上半部縦走	新川(成)、縣、久保。	
	〃	〃　下半部縦走	前田、福田(正)、福田(耕)、新居。	
	〃	〃　六峰フエース	十川、新川(和)、新川(雅)。	
	〃	〃　七峰フエース	広瀬、新川(利)。	
	〃	クレオパトラニードル	Ａ・新川(成)、縣、久保。 Ｂ・十川、新川(和)、新川(雅)。	
	8.18	チンネ及び前衛峰		

発行日　一九九〇年九月
発行所　神戸山岳会
〒六五三　神戸市兵庫区湊川町一〇丁目二三―一
岸本光弘方
発行者　神戸山岳会創立五十周年記念
実行委員会　委員長　片山英一
編集者　同委員　丸屋信雄
印刷所　第一印刷出版株式会社
〒五五三　大阪市福島区福島七丁目一三番一号

1990年
委員会月報
号外

神戸山岳会創立五十周年
祝賀会記念号

神戸山岳会創立五十周年記念
会報発刊によせて

会報担当　丸屋　信雄

神戸山岳会創立五十周年記念行事の企画については、神戸山岳会会報・創立五十周年記念号に、当会運営委員会の古賀英年委員長が「あとがきにかえて」の中で述べておりますように、計画から二年六月を経てようやくこの記念祝賀会を迎えることになりました。

長らく会とはご無沙汰していた私は昭和六十三年七月、岸本光弘君からの電話をうけてこの企画を知らされ、出かけていった会合でなんとはなしに会報の編集にたずさわされる羽目となりました。

生来の性格から資料収集と編集プラン検討に約一年、原稿集めにまた一年近くをかけるスローテンポのスタートでしたが、どうにかお役にたつことができました。ひとまず原稿の取りまとめがおわったのは本年五月でしたが、やや量的にさびしいところから、さらに原稿集めに精をだし、最終校正は八月末に終了という全くの追い込み仕事で、印刷所には多大のご迷惑をおかけしたうえ、いささかの校正漏れが生じました。

平成元年正月から、記念行事の進行状況の会員周知に、神戸山岳会50周年記念行事推進委員会月報なるものを毎月発行してまいりました。「創立五十周年記念号」の正誤のお知らせによい方法は、と考えた末、この月報の号外という形で、訂正をかねお詫びを申し上げることにいたしました。

また、会が精力的に取り組んだ「つるぎ岳」の文字を「剱岳」と統一した根拠もあわせお知らせして、山名の表記等についてもご紹介いたしたいと考えました。前述のような次第で、つい先日記念会報が完成しましたことから編集担当の一存でこのような形をとりました。何分のご理解を賜りますようお願い申し上げます。

『つるぎ岳』の表記について

「つるぎ岳」の表記については、当用漢字または常用漢字表では「剣」または「劍」の文字しか示されていなかったことから、おおむね「剣岳」と表記されていたのが通例でした。しかし私（丸屋）は、故前田浩氏の助言もあって、山名の表記は、日本山岳会監修による「日本の山々・その正しい呼び方集」をもちいていたことから、つるぎ岳については『劒』の文字を使用してきました。

情報としてはいささか旧聞に属しますが、富山県中新川郡上市町では、建設省国土地理院の前身である「陸地測量部」の地図にのっとって、表記を『劒岳』に統一したということが新聞報道されておりました。

（平成一年四月二日付、神戸新聞掲載記事）

「つるぎ」の文字は「剣」「劍」「劒」「劔」「劔」の五つの文字がありますから、従来からの山行記録、合宿報告に使用されてきた文字も、まちまちなのも無理からぬことだったのではないかと思われます。

平成元年五月当時は、まだ記念会報の構成プランを練っていた段階で、劒岳の記録を主体にまとめたいとの考えもあったので、多くの山行報告の表記の統一に頭を悩ませていました。

その頃（平成元年五月に）発行した推進委員会月報には、この新聞記事のコピーを添えて、

「上市町の言い分はともかくとして、私にとっては有難いことになりました。現在進行中の「記念会報」の主要な部分を「つるぎ岳」の記録等で占められるであろう編集・校正作業にひとつの方向づけができたからです。これからの校正作業には、会員諸兄のご協力を願うにあたって、どのように表記の統一を図ろうかと思案の最中でしたから、実のところホットしたという心境です。」と記しています。

したがって、その後この企画は大分薄れましたが、新川利夫氏の寄稿をうけて、劒岳山行記録表の作成にかかり、従来の会報、神戸山岳会月報等からの取りまとめに大いに役立つことになりました。しかし、困られたのは印刷所。この文字活字は常用漢字に該当しないためその数も少なく、また、ポイント活字にはなかった模様で、当会の会報のために新たに鋳造等していただきました。

「劒岳」の文字はこのような経緯から、当会の今後の山行記録や印刷物に採用することになり、またこの「創立五十周年記念号」にも使用しております。

創立五十周年記念号　付表

剱岳山行記録集成表の地名表記について

「剱岳」の文字とともに、表記の統一を図りたいと考えていたのは剱岳各所の地名でありました。平成元年六月の記念会報編集打合せ集会で、剱岳山行記録を一表にまとめるに際して地名表記にばらつきがあるところから、そのいくつかを例示して統一すべきか否かを協議しております。大要はほぼ編集担当の提案で了承され、細かい部分は一任されたことから、「剱岳に関する地名の表記」として、推進委員会月報第八号（平成元年八月発行）にまとめ掲載しました。

この作業には国土地理院五万分の一集成図「立山」・東京創元社刊の現代登山全集3「剣・立山・黒部」・築地書院刊の「劔岳登攀ルート解説」・白水社刊の日本登山体系5「剣岳・黒部・立山」、及び当会の会報等を参考にしました。もちろん剱岳の表記は前頁によったことはいうまでもありません。

統一した表記の主なものは次のようなものであります。

「別山平」剱沢小屋周辺の野営地。

「真砂平」真砂沢出合の真砂子の野営地。

「股」の文字使用は剱岳東面の谷の合流点に、「俣」の文字は剱岳西面の谷の合流点に用いる。

「つ」「の」「こる」の文字は全てカタカナを使用し、「八ツ峰」「三ノ窓」「池ノ谷」「小窓ノ頭」「黒百合ノコル」などとしたほか、八ツ峰の「みね」は「峰」に、八ツ峰などの各ピークは「一峰、二峰、二峰南壁」のように漢数字を用いることにした。

しかし、池ノ谷左俣側剱尾根主稜のピーク、及び別山フランケの岩稜（G1、G2等）はアラビア数字に、その他アルファベット表記は原則として大文字を使用すること。ただし、チンネの各ルート名は小文字を、池ノ谷右俣側剱尾根主稜のルンゼ名はギリシャ文字の小文字とするなど、特定のものにあっては一般に通用する表記にした、等々であります。

もっとも、このような独断的な表記統一は社会的に認知されるかどうかは疑問もあり、そこは老獪にも「これは、今回の記念会報編集作業をすすめるうえで、一冊の会報の中での用語の不統一をさける目的からまとめたものです」と逃道も忘れてはおりません。記念会報巻末の「剱岳山行記録集成表」のご参考に供する次第です。

神戸山岳会　会報
創立五十周年記念号　正誤訂正

一、氏名誤記の訂正

○五頁末尾から六行目

「（多田繁二氏主催）」は「多田繁次氏」が正当。

○二三頁下段最終行から七行目

「土居健治君」は「土居健次君」が正当。

原稿確認不十分の点、謹んでお詫びいたします。

二、印刷不鮮明個所の補記

○四二頁上段行程表の後半部分次のとおり補正

分岐点―小覇尖山―風口―中覇―三〇五〇―九九山荘㊥―
0・三0　0・三0　0・三0　二・00　0・四0　二・

―渓底―竹東―台北
00　四・00　二・三0

○四三頁下段行程表の末尾（　）書きの中の文字

「（注）」

三、文中の校正もれによる誤植の訂正

○七二頁上段本文四行目末尾

「見らられる。」は「見られる。」の誤り。

○一〇一頁下段四～五行目

「オラタン・ホテテル」は「オラタン・ホテル」の誤り。

○一二八頁下段、表題

「東北の山脈」は「東北の山旅」が正当です。

四、剱岳山行記録集成表の訂正（末尾頁から掲載）

○一七三頁24年剱岳合宿8／17の山行名の欄

「東大谷チョング・ラピーク」は「チョンラピーク」

○一七〇頁35年剱岳西面合宿8／17の山行名の欄

「ンネ右方ルンゼ」は「チンネ右方ルンゼ」

○一五七頁62年4／29の山行名の欄

「剱沢集中合宿」は「剱岳集中合宿」の誤りにつきそれぞれ訂正方よろしくお願いいたします。

この記念会報は納本から創立記念祝賀パーティ当日まで時間的余裕もなく、編集担当において取り急ぎ点検いたしましたので　これ意外にも不備があるやも知れませんが、その余についてはしかるべくご判読賜りますようお願い申し上げます。

なお、本誌目次には掲載しておりませんが、中扉「海外登山の記録と思い出」の次に、カラー版一二頁を挿入しておりますからご確認下さい。

おって落丁、乱丁のありました折にはお取り替えいたしますから、ご面倒ながら奥付記載の発行所（会事務所）または、左記までお知らせ下さい。

神戸山岳会五十周年記念会報編集事務局
〒六五一　神戸市中央区御幸通三丁目二番四-二一二
（丸屋　信雄　方）